

申されました。即ち種子は神の道である、説教に於て、書物に於て、また朋友との談話に於て神から吾人に来る所の傳言である。之を聞いた者のうちに踏み固めた道路の如き頑硬な心を以てをる者がある。其人の心は他の思想が先入主となりをつて、神の道は其人には何等の感銘も與へず、また其人自らも神に對して何等の注意もせぬ。磽确地の如き輕薄な心を持つてをる人は初めの程こそ非常に興趣をおこし、歡喜に滿ち、熱中して、神のため何か大きな仕事でも爲さうと決心は爲たれ、家に歸りてのち其日々々の生計や心配に忙殺せられ、人は擲擲はれ、迷はされ、心には爲たかない事も無理に爲せられ、其中には切角決めた殊勝の志も終に萎へかた枯れてしまふとあたかも太陽の炎熱に枯れた苗の如くである。聽衆のうちには荆棘の藪のやうなのがある。彼等の最初は善かつた、一時は勇敢に俗と戰つた、眞實神の道を守り之に遵ふことを欲したのであるが、彼等の心中深く根をおろしてをる物欲煩惱が次第々々に頭を出しかけた。虚偽の荆棘、懶惰の藪、我利私慾の雜草、これらが日を経るに従つて成長

し繁茂して、良心の善き苗を排しのけ、覆ひかぶせ、終に餓死せさせてしまつた。由來手入をせんでも成長繁茂する園は雜草の園であります、しかし雜草は何の役にも立ちませぬ。我主は心中に雜草の畝をもちをる人が此世に澤山有ると申されました。然れども神の王國の眞の市民たる者は毎日神の聖旨を奉じて云爲せんとして物慾に克ち、煩惱を抑へ、以て仁義を強盛に成長せしめんと心懸ける。此種の人善く手入の届いた畝の如きである。神は此種の人を嘉賞し給ふのであるといふのであります。

第十一章 先驅の首

主が種々の不思議な行を爲し、種々の智慧の言葉を語り給へる時に當りて、主の先驅たるバプテスマのヨハネは獄舎に繋かれる身となりました。ヨハネは前にも申した通り罪惡のうちに生活しをる者を口を極めて責め罵り、富貴の人であらうが、貧賤の者であらうが更に顧みる所はありませませんでした。その門閥に誇り、名高き先祖のある

を鼻にかけをる當時の紳董に向ひて、神は此河原の石をも能くアブラハムの子たらしめ得べく、彼等の行爲を視て、彼等の眞の親は蝮すなはち惡魔なるを推し得べしなど、言ひました。さてヘロデ大王が死にました時に其領分を數人の子息に頒ち與へました。その一人なるヘロデ、アンテバは、ガリラヤとヨルダン河の外の地を受けてこゝに王となりましたが、もとより天下は羅馬の天下で、ヘロデは羅馬帝の承認を得て此地方の主となつたのであります。ヨハネが人々を責め教へてをる時分ヘロデ、アンテバはその異腹の兄弟ヘロデ、ピリピを訪はんために羅馬へまゐりました。アンテバは既にアラビヤの或る小國の王女を娶りて、后としてをりましたにも拘らず、ピリピの後ヘロデヤを見て之を悦び、遂に之をピリピより奪つておのれの後としました。ヘロデヤもその夫を棄て、女サロメをさへ一所に連れて、ガリラヤ湖畔のテベリヤに在るヘロデ、アンテバの宏麗なる宮殿に來り、アンテバと偕に住みました。領分内の人民は皆之を見聞して、其不倫の非行をいやしみ、寄ると觸はるとこれを譏りました

が、誰一人起て諫める者はありませんでした。それは國王や王后を非難したあとのたゝりが怖ろしいからであります。

然るにバプテスマのヨハネは例の鋭い舌鋒を以て少しも假借する所なく攻撃し、初めは其説教にて人々に、後には國王ヘロデに直接その兄弟の妻を奪ふとの人の法律にも、神の律法にも背反した大なる非行であるを極諫いたしました。ヘロデもヘロデアも大に怒り、ヨハネを捕へてヨルダンの外に大きな黒石で築いたマケラスの堡と稱する、その牢舎におしこめました。ヘロデヤはどうかしてヨハネを殺したいと思ひますが、人民がヨハネを尊敬してをるので、人民の怒を恐れてまだ手を出しません。又ヘロデも自己の面前にその非行を諫めて怖るゝ色のなき勇士を心に尊敬する所から之を殺すには忍びませんでした。

ヨハネは牢舎に囚繋の身となりましたが、その弟子等がこゝに來り、ヨハネを訪ふとは許可されてありました。永年の間曠野に自由の生活を爲し、小兒たりし時より其

頭上に屋根といふものを戴いたとのないヨハネに取りてはこの牢屋の石壁のなかに閉ぢ籠め置かるゝとは誠に辛苦いどであつたと見えす。流石に勇敢なりし彼も神經の衰弱を來し、主イエスにつきて聊の疑惑の念が生じたので、一日其弟子を主の許に遣はして問はせましたには『來るべき榮光の主は果して爾なるか。若くはわれら他に俟つべきか』と。これはバプテスマのヨハネも他の人々と同じく此俗世界に君臨すべき國王の出現を待ち望み、イエスを其人なりと思つてをりましたところ主イエスは人々の期待とは全く違つて、政權を握らず、軍隊を率ゐず、至て穩かに、質素に生活し、漁夫等を引連れて諸方を巡歴し、わが齋らす王國は此世のものに非らずと宣傳してをられますので、ヨハネは合點が出来なくなりました。殊には今や囚繋の身となり、明日をも知らぬ生命なればさきんゝの事が氣に懸つて、かやうに弟子をイエスの許へよこしたのであります。主イエスは靜かに此弟子に『今日はわれと偕にこゝに留まれ』と申されまして、弟子の前にて主が毎日爲さるゝ所のとを行されました。即ち日

の盲ひたる者に明を得させ、耳の聾ひたる者を醫し、跛へたる者を歩ませ、癩病を潔め、死にし者を蘇生へらせ、貧しき者に福音を説き聞かされました。而してヨハネの弟子に向ひ、『今は還りて爾曹が今日見る所、聞くところをヨハネに告げよ』と仰せられました。弟子は還りました、しかしヨハネが之について何といひましたか、記録にのつてをりません。

去程にヘロデはその誕生日に多くの大臣、千人の長、およびガリラヤの首立ちたる人々を招きて祝宴を開きました。食卓はその廣く立派な座敷に並べられ、金銀の皿には山海の珍味が堆く盛られ、巧妙なる音樂は中庭におこりて興を添へました。酒の酣なるころヘロデはかのヘロデヤの娘サロメを呼びて舞をさせました。ヘロデはこの舞が非常に氣に入りまして、よくも考へずに大勢の賓客の前でサロメに向ひ、『何にてもわれに求へ、爾が望む所の者は我なんぢに與ふべし』と申しました。サロメは何を求めたものかとしばし考へてをり、賓客はヘロデとサロメとの顔を等分に見てをり

ました。ヘロデは興に乗じて『およそ爾が求むるものはわが領分の半に至るともなんぢに與へん』と誓ひました。

非常の誓詞が出たものであります。何を望み、何を求めたものでせうか。世界の美しいといふ美しいもの、うちで此小女王は何を選びませうか。むかし賢王ソロモンはその最も望むところの者を求むる機会を得ました時に、ソロモンは智慧を求めました。しかしヘロデ王は智慧を與へるとは出来ません、此王には人に分け與ふ程の智慧は初めから有りません。しからは艶麗目を奪ふべき上着でせうか、寶玉でせうか、庭園でせうか、それとも何物でも求め得らるべき金貨でせうか。中々決心がつかまないので王女はその母后に相談にゆきました。もし善良の母なりしならばこの母に相談するといふとは一番策の得たるものであります。

ヘロデヤは今計らずも好機會を執らへました。ヘロデヤはバプテスマのヨハネがわが不倫の行爲を誦り讓めたとを日頃深く含んで、如何にもしてその復讐をなさんものと申しました。

と心懸けてをつたのであります。今や其時節が到来しました。サロメが来て宴席にての一伍一什を話し、何を求めたものかと母の智慧を借りに來たといふや否や、母は直ちにバプテスマのヨハネの首をと教へました。サロメは大急ぎに宴席に戻り、何人にも聞ゆるやうに大聲にて『バプテスマのヨハネの首を盆にのせて即時にわれに賜へ』と申しました。

ヘロデは之を聞きて如何いたしましたらうか。若しヘロデが善き王であつたならば左様な無殘なことを求むるものでないと申しましたらう。されどヘロデはさうは申しませんでした。さうして非常に當惑いたしました。彼は何物にても王女の望む所のものは必ず與へやうと約束しましたから王女はヨハネの首をと望みましたのであります。彼は悪しき約束は必ずしも履行するに及ばぬとを氣がつかせませんでした。吾人が結んだ約束にして、若し悪かつたと氣がついた時に爲すべき道は唯之を破棄するのみであります。ヘロデは自分が一旦いひ出した約束を履行しなかつたならば臨席の客人が皆

自分を嘲笑うであらうと心配しました。其ためにサロメの求めを斥くるとが爲たくありませんでした。そこで餘儀なく兵卒をマケラスの堡へ遣はし、バプテスマのヨハネの首を斬りて持ち來れと命じました。兵卒は牢舎に於て榮光の主の先驅の首を斬りました。かくの如くにしてヨハネは世を去りました。其誕生は天使が殿堂の香壇にて約束をしました、その命名は其兩親及び知人の歡喜のうちにに行はれました、さうして永い年月森や野のなかに隠者として、世と離れて修養を爲し、さうして時至つて諸王の王を歡迎せんがために復び世間に出て來ましたその人の首は今や兵卒の手にかゝり、大なる銀の皿の上に載せられて一小王女に捧げられました、王女は直ちに之をその母後に獻げました。

第十二章 麵麩屑の十二籠

バプテスマのヨハネが首を斬られました時、主の使徒たちは二人づゝ相携へて近方

の各地へ旅行に出てをりました。これは我主が彼等を地方へ遣はし、彼等が主より教へられし所のとを人々に教へ、かつ惡魔を逐ひ出し、病める者を癒さしめんため旅行でありました。そこで彼等は二人は此の地方、二人の彼の地方へと愉快に緑いろ濃き野邊を経て、手には杖を持ち、市場の人多き所にて主の教を宣べ、好人ありて彼等を招待せぬ時は自宅に歸りて食事または睡眠を爲し、幾分遠く出でをりて、已むを得ざる時には牧場の枯草の堆積したる上に眠り、清冽なる泉に渴をいやしなどして傳道をしました。

彼等は其成功に喜びまして、還り來りて我主に神が彼等の預想外に彼等を祝して成功を得しめ給ひたるとを復命いたしました。一日彼等が聞きこんだ先驅ヨハネの横死の子細を齎らして、いそぎ還りて主に報告に及びました。主は多くの人々が彼等を圍繞して、彼等使徒に説話や治療を要請し、爲めに使徒等は非常に疲勞し、食事をする暇さへ無いのを御覽になりました。之を憫み、かつは心身の疲勞した者は世のため

人のため十分の用にも立たぬとを知らになりまして、彼等に『爾曹人々を避けて、我と偕に暫く寂寞きところに往きて休むべし』と仰せられまして、一同小舟に取り乗り、湖水へと漕ぎいだしました。彼等は疲労と哀傷とに満されてをりました。バプテスマのヨハネが殺されたといふとは彼等にとりて一箇の朋友を失つたといふ悲しき觀念を生せしめたばかりでなく、豫言者の虐殺といふとを沁々と哀しく心に感せしめました。ヨハネは多くの豫言者と同じ運命に斃れました。これは又やがてかれら主従の運命ではありますまいか。

主従は沈々黙々として櫓を押し櫂を操り、湖水の狭い場所を横りて人家の無い處に上陸しました。そこには青草が澤山に茂つてをり、水より少しうしろの方に樹木の鬱蒼とした低い小山がありました。彼等は此處にて休息せんとて坐しました。然るに打遺された人々は主及び弟子等が湖上に浮び出でしを見て、互に言ふやう、『あの舟に豫言者殿がをらるゝ。豫言者殿は弟子衆と湖へ出られた。我儕も往うではないか』と。

彼等は主等の往くさきの見當をつけ、湖水の頭に沿うて徒歩にていそぎ走りました。彼等の道が進むにつれて人数は次第に多くなりました。それは彼等が急ぎ足にて湖邊の村々を通りますと何事の起りしかと村人は戸口や窓の内から聲をかけて、『お前さんがたは何處へおいでなさる？何事の起りましたか』と聞きます。『ナザレの豫言者殿を捜しに往くのです』と足も停めず走りゆく。『あの有り難い豫言者殿なら我儕も往のう』と、男も女も小供に至るまでも皆連れ立つて來ましたので、終には中々の大衆になりました。無論その中には病人も多く交つてをりました。

かくとも知らず主と使徒等が困憊と哀傷とに満された心身を靜かに草の上に横へ、しばし休息をしてをらるゝ寂寞を破つて、遙かに物の音が聞えて來ました。使徒の一人は『此は多勢の人聲である』といひました。又一人は大群の踏み轟かす足音ならん』といふ間に又一人は立ちあがり、遙の彼方を見やりて、主に『餘程澤山の人か此方をさして参ります』と申しました。主は此時『われらは憊れ且つ悲めり、いざ起ちて

山に登り、樹間に匿れて彼等を避けん』と申されたでせうか。否、主は出でて彼等を視たまふに牧者なき羊の如き有様でございましたから惻隱の情忍びがたく、御自分の上は忘れて許多の事を彼等に教へ、病める者どもを癒して遣はされました。

かくて日も暮れかゝりましたので、弟子たちが『主よこゝは人家なき所にして時も既晩し、衆人の食ふべき物なきがゆゑに其自ら四周の郷村へ往きてパンを市めんために彼等を去らしめたまへ』と申しました。實に彼等群衆はたゞもう主及び使徒等に逢ひたいといふ熱心に驅られて大急ぎに來ましたので、食事の用意など氣のつく者は無かつたのであります。此時主はピリポに『何處よりパンを市ひて彼等に食はしむ可きか』とお問ねになると、ピリポは答へて『銀二百のパンも人ごとに少しづゝ予へてなほ足らざるなり』と申しました。『今われらの有てるパンは幾何ある。往きて見よ』と主の仰せに、弟子の一人アンデレが間もなく戻り來まして『こゝに一人の童子あり、大麥のパン五と小魚二を有てり。されどこの許多の人に如何にすべきぞ』と申し上

げました。今日と雖もこゝに人の爲めまた神のため行さねばならぬ一の大事業があるとする、その時基督教徒の一人は『これ斷じて不可能事なり』といひ、また一人は『纔かに之を爲すべき發端あり』といひませう。しかし我主は當時大群衆に食を與へ給ひたると同じく必ずこれを成し遂げられます。主は小さな發端に由りて大なる業を成就させられます。

其時主は弟子たちに『人々を坐らしめよ』と命じたまひました。人々は百人或は五十人の組を立て、青草の上に坐りましたが、惣勢五千人以上もありました。それから主はその五のパンと二の魚をとり、天を仰ぎ、謝してパンを割り、之を人々に頒たため弟子たちに渡し、又二の魚を分け與へられました。弟子たち即ち十二使徒は主の祝せられたパンの一片と魚の一切とを銘々に持つていつて前列から後列へと段々に頒け與へました。女と小供を除いて男ばかり凡そ五千人の大衆が悉く食ひ飽きて、それでも殘餘はまだ大分ございました。彼等が悉く食へ畢りましたのち主は使徒に少し

も廢物にならぬやう食べ残しの屑を拾ひ集めよと命せられたので、使徒たちは悉く之を拾ひ集めたところ十二の筐に一杯になりました。即ち十二使徒は各自一の筐に溢るゝばかりに拾ひ集めました。

五千餘人の大衆は今かゝる奇蹟を見ました所から大にイエスを敬畏し、互に「此は誠に世に臨るべき豫言者即ちメツシアなり」といひ合ひをりましたが、多くの人は異口同音に「かの豫言者殿はメツシアに相違ない。われらは何とあの豫言者殿をもちたて、王様としやうでは無いか」と甲唱へ乙和し、五千餘人の大衆一齊に立ちあがり、手を振り聲を張りあげてわれらの王よと叫びつゝ、イエスの傍近くおしよせました。主イエスは彼等に向ひ、自分は決して彼等が想ふやうな種類の王ではないといふことを懇ろに告げて、彼等を避け逃れて人無き處へ往かんとされましたが、大衆は口々に、中には暴力を以てしてもイエスを國王とあがめたいと強請ひしめるのを、猶もいろ／＼と説き諭し、拒み争ひ、弟子たちを強ひて舟に乗りてこゝを立去らせ、自らは夕

暮のうすくらがり辛うじて彼等の圍繞をぐゞり抜けて獨り山の奥へと遁げゆかれました。

是は實に我主のお職事の一轉期でありました。此時までは弟子と稱するものも随分大勢あり、また群衆も主を喜び慕ひ、主の往かるゝ所の處へは何處にても尾いてゆく有様でございました。尤も人民のうちにいたく主を嫌ふ者があり、なかには主を殺すなど、脅かし嚇したもののさへあつたのでございました。併し一般の人民は喜んで主イエスの教を聽いてをつたのでありましたが、今や其反動が來ました。主は自分は決して彼等が希望するやうな王たるべき者で無いとを明白に彼等に告げ知らされましたが、彼等は主を眞理の大王、靈界の主として視るとを好まぬのであります。彼の奇蹟を行はれた翌日主はカペナウンの會堂に於て説教を爲され、靈界の消息にはまだ幼稚な彼等には諒解するに頗る困難などをも説かれましたが、其時より弟子たち多く返り往きて、主とは偕に行かぬやうになりました。そこで主も人心の頼みがひの無きを歎か

れ、かの腹心とも見るべき十二人の使徒さへ今は何如なる思想を有つてをるか少し疑はしく思召されて、『なんぢらも亦去らんと意ふや』と仰せられましたところが、シモン、ペテロは直ちに答へて『主よ、われらは誰に往かんや。永生の言を有てる者は爾なり』と申しました。この言は當時の主に取りていかばかり嬉しく、また慰めになつたものでございませう。

次の日エルサレムより幾人かの學者が來まして、我主と街上にて邂逅ひ、多くの人民のをる前にて主の行動を非難し、主が從來の慣例を守らざるがゆゑに神を褻せりといひ、また主の弟子となつた者は教會即ち會堂の善良なる會友でなくなつたといふなどを申しました。然るに我主は却て彼等を難じて、彼等は彼等の慣例を以て神を褻してをるとを仰せられ、彼等の宗教は口の上の宗教であつた、心情の衷のもので無いと喝破し、且つ神は彼等の設けた煩瑣なる諸規則などは毫も顧み給ふとなく、神には唯正直と慈悲と眞理と、さうして善良なる生活とを以て事へ奉るべき者なることを

申され、彼等を嘲りて瞽者の嚮導する瞽者なりと曰はれました。

このころ我主はガリラヤに於てもユダヤと同じく段々と人民からお惡まれなまつて、なかには主のお生命をねらふ者さへあるやうになりましたので、今やこの懐かしかりし七地を去つて近き異邦人の國々を遍歴せらるゝやうに立ち至りました。

第四篇

主しゆいよくますく人ひとに悪わるまれ、ガリリヤヤにさへ留とどると能あたは
ざるに至いたり給たまひし事こと。異い教けうのひとの土地とちまたヨルダン河かの彼かな邊た。
の土地とちにゆき給たまひし事こと、及および終つひにエルサレムムへ向むかひ給たまひし事こと。

第一章 主は何故に世より悪まれ給ひしか

榮光の主がその領内の人民から拒絶せられ給ふといふは吾人には實に不思議で、有り得べからざるものやうに思はれ、また悲惨な事柄に見えますが、實際左様であつたのでございます。然らば我主を、斯様な境遇に陥れた者共は皆悪黨で、屢々牢舎に入つたやうな者かといふに、決して左様ではなく、主に最も酷にあつた人たちは一般に非常な善人だと思はれてをる者共でございました。此人たちは一週に二回斷食をする、金銭が獲得ればその十分の一を毎時教會に寄附する。人物の種類はといへば教役者であるの、教會の幹事であるの、教會内諸團體の委員であるの、先づすべて教會の會友でありました。實に我主が仰せられたやうに彼等は外觀は善良に見えて、衷心は邪惡な偽善者であり、口吻ばかりの宗教家で、衷心はさもしい輩でありました。彼等が何故に我主を惡むに至つたか、その一の理由は彼等が至て儀式的で、四角四

面い人物であるのに、我主はまことに物事が自然で、直接で、簡易でありました。主の言行の多くは甚しく彼等を激させました。一二の例を擧げて見れば彼等は神の名をエホバといひ、非常に神聖なる者として決して此名を口に唱へ筆に書くなどしてはならぬと考へてをりましたのに、我主すなはち彼れ神に在り、神かれに在りたまふ所の主は神に祈り給ふとが儀式ばらずに自然なるとは空氣を呼吸する息と同じく簡易で、またその神につきして話されます様子は宛ながら深く親しく知り抜いてをらるゝ間柄の如く、かつ神を呼ぶに父を以てするのみか、ヘブルの兒女が父母を呼ぶとき用ゆるアバといふ親愛を表する詞を添へて『アバ父よ』——阿爺——と申されますから彼等は我主を目して神を褻す者詳しくいへば神に對して不敬の言語を弄する者なりとして憤りました。

又主を惡むに至りました一の理由は彼等の重要視する習慣、慣例の或るものに對して主が一向頓着を爲されなかつたからであります。彼等は種々様々の習慣を有つてを

りまして、吾人から之を視る時は實に不思議で馬鹿々々しい位に思はれるものが、彼等にとつては甚だ大切なことで、若しこれを顧みずに異つたとしてもすればそれは悪事であるとも思ふ程であります。其一二の例は安息日を厳守すると、手を洗ひ潔めると、他國人の待遇などであります。

彼等は安息日には野良にて働いてはならぬ、即ち麥を刈つたり、扱いたり、打たりしてはならぬといふ一の良き律法を有つてをります。其目的は凡て勞働する者に毎週一日休息の時を與ふるに在るのであります。然るに此律法が破られてはならぬといふ懸念からそれが極端に走りて小麥の穂一つを採り、手にて搏みでもすれば、これは穂を刈り、連枷にて打つと同じであるとしました。一日我主と弟子とは小麥の畑を徑行してをられた時弟子は麥の穂を摘み取りて食へました。之を見た學者は主に「見よ、なんぢの弟子は安息日に爲まじき事を行せり」と申しましたが、主はかやうな愁訴にはトントお構ひなさいませんでした。

彼等の又一の律法は食膳に就くまへ必ず其手を洗ふとであります。若し人間の手といふものが本來是非洗はねばならぬやう出來てをるのならばこれは至極結構な習慣であるのですが、猶太人の考へは此世界に澤山あるものは不潔、即ち吾人がいふならば不吉、不祥であるといふのであります。若し何人でもこの不潔と思つた物に觸はたならば其觸はつた穢れた不吉の處を奇麗に洗ひ去つてしまふまでは神は其人を嘉みし給はぬと考へてをりました。併し主は神の嘉みし給はぬものは惡しき言行であるから神の恩恵を受けんためとしては手を洗ふに及ばぬと弟子たちに仰せられました。

彼等は又他國人即ち教會に屬せざる人に對しては頗る注意深く、偏辟の考を有つてをりました。此種の人のうちに異邦人といふのは異端邪説を信ずるもの、サマリヤ人といふのは一部分は猶太人で、一部分は異邦人で組織してをる國人のと、税吏といふは異邦人たる羅馬人の政府に雇はれてをる者、罪人といふは刑餘の人にて、猶太人はかやうな種類の人々と一座して飲食するを欲せず、また此種の人たちとは交際す

るとか、商賣上の取引をするとかいふとを喜びませんで、平生彼等を擯斥し、嫌惡してをりました。さりながら我主は無智なるもの罪科あるものも善く之を導き教へさへすれば必ず善道に嚮ふべきとを感じられ、且つ何人なりとも之が扶助たらんとすれば必ず先づ其人の友とならなければならぬと信じられました。主は或る時御自分は見失ひたる一匹の羊を搜索に出懸ける牧羊者の如き者であると仰せられたとがあり、又病める者のために盡すが其職責である醫者の様な者であると申されました。主嘗てサマリヤ地方を通過せられました時渴き且つ疲れたまひたるにより只有る井戸の傍の石の上にお腰をおろして休息して居らるゝ所へ一人の女が水を汲んとて此處へ参りました。此女は猶太人の擯斥するサマリヤの女にて、其上に操行のあしかりし者でありました。我主は少しも之をいとひたまはず、親切にこの女と物語をなされました。或時學者たちが我主に惡名をつけやうとしました時彼等はイエスはサマリヤ人だといひ、税吏や罪人の友なりと申しました。彼等が税吏やサマリヤ人に對する感情は合衆

國南部に於ける亞米利加人が黒奴に對する心地のやうなものでございました。

以上の如き理由によりて榮光の主がその領地においてになつてもその領民は之を受け容れませんでした。彼等は下らぬ小さな事に齷齪してをりますが、主は大きな緊要な事に着眼をされました。彼等は薄荷、茴香、馬片其他野菜など十把あれば一把を教會に納める、そんなとに忙はしくしてをりますが、主は公義と慈悲と眞實を行ふに餘念はございません。彼等はその祖先よりの慣例を守るに腐心してをりますが、主は唯神と人の上についてかんがへてをられます。それ故に彼等は主を惡みました。彼等は主が豫言者であることを認め、又人民が主の周圍に群集するの無理ならぬとを知つてをりました。又主が説教せらるゝ所の事は眞理と善とであることを承認せずにはをられませんでした。しかし主の言行云爲は彼等の如くではありません、故に彼等は主を惡みました。かやうなとは爾後たび／＼ございました。主が安息日を守るゝ方法、手を洗ひたまふ場合、他國人と隔てなく交際ひたまふとなど皆彼等と其揆を異にしてをら

れましたとは彼等が主に反對して起つた總體でありました。噫嘻、彼等は忠實に教會へ參ります、祈禱をさげます、聖書を讀みます、一週に二度斷食をして神に事へます、それで居て榮光の主、神の子を惡みました。

此結果は主に取りて最早御自分の國に在るに安全では無くなりました。主はエルサレムの大殿堂の節筵にお出かけになりました時だけを除いてユダヤには決して多くの時を費されませんでした。ガリラヤ殊に湖水の北方に在る部分は主の最も力を盡くされた場所であるのに、學者がエルサレムより來て、カペナウンにて主を稠人の前にて攻撃いたしたとのあつてからは主は此ガリラヤにさへお留りなさるとが叶はぬやうになりました。上流社會の人民は主に反對しました、下流の普通人民は主が彼等の王たるを肯ひたまはぬに失望して上流人の擧に效ひました。主は今や熱中せる群衆に蜂擁せらるゝとがなくなりました。男も女も猜疑と嫌惡の目を以て主を見るに至りました。主が道塗を通行らるゝ時彼等は目引き袖引き、『ナザレの豫言者を見よ。爾は

エルサレムより來りし學者があゝの豫言者を非難攻撃せしとを聞きしや。彼は安息日を破る男、我儕の大事な慣例を惡くいふ奴、而して下等なる人民等と朋友になりざる人ならずや。見よ、税吏のマタイが今奴に何やらん話を爲しをるに非ずや』といふ。終には主のお生命をねらふ者さへ出てまゐりました。

そこで主は十二人の同志、即ち使徒を伴ひて此處を立ち去られました。このち主は二度とナザレの小山の上にはお立ちになりませんでした。又二度と湖水の汀にて人々に教を垂れ、漁夫の小舟に坐せらるゝとはありませんでした。又二度とかの床しく樂しき野路、畑道を通行なされませんでした。一行が此處を立去る時彼等がこゝに生れ、こゝに成長つた思出多き故郷に最後の一瞥を興へました。湖水の面の青々とした色にコラジンや、ベツサイダや、カペナウンの白き家々が反映して美しさが彼等の目に入りました。我主は長太息を爲されて、『あゝ禍なる哉コラジンよ、噫禍なるかなベテサイダよ、爾曹のうちに行し異能を若しツロとシドンに行しならば彼等は早

く麻をき、灰を蒙り、坐して悔改めしなるべし。已に天にまで擧げられたるカベナウ
ンよ、又陰府に落さるべし』と異なる訣別を告げられて踵をかへし、一同は異邦人の
都會なるツロとシドンをさしてゆかれました。

第二章 ツロとシドンにて

かくて我主と十二使徒とはガリラヤ湖と年比手にかけて漁網とを後にして出立を爲
し、小高き丘陵を上りては下り、下りては上りして段々と旅程が進むと共に遙かあな
たの地平線上に一線の銀系の如きものが見えましたが、それは地中海でありました。
海のあなたには希臘の國があり、其さきには伊太利、其又さきには西班牙、西班牙の
北には佛蘭西、英吉利、西の方に當時何人も乗出したとの無い大洋を超えて亞米利加
があります。主は始めて廣き世界を御覽になりました。主は今や其生國より逐はれた
る亡命の客であります、しかし主の眞の生國は天であつて、主は生命の主でございます。

す主の心中には大なる思想が潜んでをります、が十二使徒は當時まだ之については何
事も存じてをりませんでした。主は既に其故郷に於て諸方を遍歴されて智慧の道を語
り、奇蹟の業を行ひて、其職事の一部分は果されました。されども猶教へもなし、病
める者を癒しもせられますが、しかし時間の大部分は隨伴の十二人を教練し開發する
にお費しになるのでございました。此度外國へ旅行の一の目的は彼等十二人と一層の
親密の關係を結び給はんが爲めでありました。主は心中已に死をお覺悟なされてゐら
れますから、御自分の死後この事業を遂行せしめんために彼等をよく訓練しておく必
要がありましたからでございます。

さて主の一行は行きゆきてツロの大きな港に近き一の小さな都會に着きました。一
軒の旅宿を見付けて奥の座敷に入り、戸を鎖して、こゝならば何人も知るとはあるま
いと喜ばれました。いつも何事か起つた時の後には主は只一人で居らるゝとを希望せ
られました。さりながら此處でも主は匿れ了せらるゝとは出来ませんでした。かく長

の旅路をして参られたのであるけれども、主につきての風説が都會にあつたのでござ
います。こゝは人の往來の随分ある所で、昔時ソロモン王の時代に於てすらこのツロ
からエルサレムへ黄銅器の製造人や木彫家やら、美術家、建築家として稼ぎに往つ
た者がありました。近くエルサレムの殿堂の仕事を爲し、またヘロデのテデアリアに在
る王宮に使はれた工藝家、職人などが我主に關する風聞を故郷へ土産ばなしに傳へた
かも知れませんが、またユダヤかガリラヤで主を見たところのある者が今その故郷の街上
でふたゝび主を見て、是は彼のナザレの豫言者だと識認めて誰彼に之を言ひ傳へたの
もありましたらう。

併し又これまで主を見たとも無くして却て主を其人と識つた者が多くありましたら
うとおもはれます。主が街上を行かると時彼等は主をそれと觀取りました。主の人物
風采が他の人々と異つてをとを見分けるに別に大した觀察眼を要しませんでした。
ある時使徒のパウロとバルナバとが小亞細亞を旅行して、其處へ往つた時に其處の人

々走り出で、「諸神人の形になりて我儕に臨れり」と叫びました。彼等は兩人の風采
を視て普通人ならずと推測し、バルナバが身長高く風采の立派な人でありましたから
此は必ずジュピターなるべく、パウロの雄辯滔々たる所より此は必ずマアキュリなる
べしと申したとがありました位ですから、況んや今このツロやシドンの國に人の形と
なりて臨りたまひたる大能永遠の眞神がお出でになつたのでありますから、兎てもそ
のおん身を匿し了せらるゝとの出來ないのは當然の事でありませう。されば主が街上
を行かると際に男は主の後姿を指し、女は窓の内より主を視て「これ誰ぞや」と不
審に思つたでありませう。

ナザレの豫言者が當地へ見えたとはいふ評判が圖らずも病兒の看護に腐心しつゝあつ
た一人の女の耳に入りました。此女はいふまでも無く異教邪宗の者であります。この
ツロやシドンを初めとしてこの界限の津々浦々の人民は皆異教の信者でありました。
此女は猶太人の鄙視む他國人であります。その病に臥せる小さき娘も亦異教信者とし

て成育てられたのでございます。此人たちはアブラハムだの、モーセだの、エリヤやイザヤなどいふ人の事は生れるより聞いたともないのであります。病人は幼き異宗の娘で、祈禱を上げるその物は小さき石か木で造つた希臘の神でありました。其娘が今大病で、可也永い間悩んでをつたのであります。病氣は腦神經の疾患でありますが此邊のならひでこの母親は鬼に憑かれたのだと信じてをりました。

然るにこの程當地にイスラエル地方から何やら偉い人が御座つたといふ評判がある。よく聞けば其人はダビデ大王の裔で、一方に王様であると同時に又祭司の身分、丁度東邦の博士のやうなお方で、どこかの神様が人の形になつて天降りなされたのだといふ。風説は區々で何人も本當に主が誰であるかといふとを知りませんが、たゞ如何にも善さうな人、偉大さうなお方に見えるとの噂であります。そこで直右隣家の親切男が訪ねて來まして、『阿母よ、豫て噂に聞いたナザンの豫言者殿が折りよく此地に來て居らるゝといふに、何故彼を訪ねて娘子の病氣を醫しては貰はぬぞ。彼れ若し手を

娘子の頭上に按きたまはば病氣は直ちに醫ゆべきに』と勧めますと、左隣家の女房が『ホんに左様なされい。お前の留守は私が看病してゐてあげうほどに』と口を添へました。

母親は此勧めをうけ、よろこんで出て行きましたが、丁度よく我主と十二使徒が前面からこちらへ來らるゝのに出合ひましたから直ちに『主よ、ダビデの裔よ、我を憫みたまへ。我娘鬼に憑れて甚く苦めり』と呼はり願ひました。これが子を思ふ親の感情で、『我を憫みたまへ』といつて、『わが娘を憫みたまへ』とは申しませぬ。娘の苦痛は即ち母親の苦痛であります。それ故に『主よ、ダビデの裔よ、われを憫みたまへ』と叫んだのであります。しかるに我主は一言もお答へを爲さいませんでした。

これは實に不可思議の事であります。凡そ困難せる者の依頼歎願には未だ嘗て耳つぶして一語も發したまはぬといふとのなかつた主が獨りこの女の歎願に答へたまはで、たゞ沈黙して進まれ、十二使徒が之に従ひ、憫れなる女親が泣きつゝまたそのあとに

尾いて往くといふこの光景は實にこれまでに無かつたところであります。予は嚮に東邦の人民は泣く時に眼で泣くばかりでなく聲を立て、哭きわめくといふとを申したが、今この女が泣きつ叫びつ主一行のあとに尾いてゆくのであります。外面のたゞならぬ騷擾に臺所の水仕事に忙がしかつた女共は何事かと戸口まで飛び出して來ました。街上を往來してをつた男共は彌次的にゾロ／＼後に隨つて來ました。イエスは黙して俯向きがちに歩を進めたまふ、女は哭泣ながら之に従ひます、群衆は刻一刻數を増して尾いてまゐりました。

使徒たちは遂にたまりかねて『師よ、われらの後より呼はるが故に彼を去らせたまへ。われらは身を匿さんがためにこゝに來れり、然るにかれ叫びて全村のものをかりたてたり』と申しました。實は使徒等も煩悶くなり、且つ忍耐しきれぬやうになつたのであります。予は何卒使徒の一人が、『師よ、我等師にかはりて彼のため何事か爲し得られざるべきか』と曰つて呉れたらば宜つたものと思ひました。併し彼等には

まだ左様な惻隱の心はありませんでした。中世時代に聖徒に禱るのをよい方法だと思つたとがありました。聖徒はもとは人間だから神よりも一層同情があつて能くこちらの祈願を聽いてくれるであらうと彼等は考へたのであります。このツロにての例は此信仰を確かめるに足りませぬ。固よりペテロにせよ、アンデレにせよ、ヤコブ、ヨハネ其他の連中も後日にはそれ／＼立派な品性人格を養ひ得ましたなれど、まだ此時は修養が積んでをりません。聖書の此記事が教會にて朗讀せらるゝ時彼等聖徒に祈禱しやうといふ輩を落膽させはしますまいか。ペテロは今日猶『われらの後より呼はるが故に彼を去らせ給へ』と申しますまいか。或時主と十二使徒とがエルサレムへ往く途中サマリヤの只有る村落を通過するに既に日没になりましたが誰一人彼等に宿かす者もありませんでしたその時ヤコブとヨハネとは主が雷と電とを呼び下して此一村悉皆を滅し盡さば如何と提議したとがありました。聖徒——その中の最も優れたる者にてさへも——が主の如く會て人を愛し恤れむ者はありませんでした。

しかし此時主の使徒等にお答へになつた所は主の爲さらうと思召す事は彼等が推測した通りであつたかの如く一時は見えませんでした。イエスラルの家の迷へる羊の外に我は遣はされず」と主は仰せられました。換言すれば我が索めんと欲する迷へる羊はこの異教の羊群のものならず。我は猶太の羊を索むるなりといふのであります。主は實際左様でありました。嚮に主が他國人と親しくすると猶太人から彼是と悪評されたまひましたが、此時まで主が彼等と交際をせられたのは實は僅少の場合だけであつたのでございます。主が使徒たちを道を宣へ病を癒すため諸方へ遣はされました時に唯猶太人の所へのみ往けとお命じになつたのであります。これは凡て善き事業は一事を十分に成し遂ぐるを以て手初めとせねばならぬからでありまして、多人數に少しづゝ扶助をして満足する人に成功をした例がありません。少数數に全力を注いで盡すのが眞の扶助なり教化なる方法であります。かくしたのちには扶助され教化されたりした者共が今度はこちらの扶助者たり協力者たるに至るので、心は愈よあせらず、

仕事は愈よ確乎に、基礎が据はりて自然大事業も成就するに至るのであります。それ故に我主は主の民たる猶太人にのみ道を説き病を癒され、即ちイスラエルの家の迷へる羊を索められたので、これが實に主の使命であり、またその賢き計畫であつたのでございます。この意味を以て主は使徒に答へられました、さうしてかの女も之を聞きました。

このお答はかの女を退去させることができなうか。いや、一刻の間も一步もできませんでした。主のお聲の調子によつて女は主が深く考へてをられ、「此迄猶太人のために使命を盡して来たが、今は我がはたらきの方面を一變すべきか」と心に商量してをらるゝとを知り得たかも知れませぬ。兎に角この女は迷惑相にしてをる使徒等聖ペテロや聖ヨハネや熱心の聖シモン、税吏の聖マタイ其他人々の間を抜け越して、直ちに主の足下に身を投げ伏し、且つ拜して、「主よ、我を助けたまへ」と申しました。主は立ち止りて女を御覽になりました。女の聲には希望と信仰とが漲つてをりました。

聖徒たちはわが友ならず、友たるべき方は主一人なりとの信仰はこの女をして『主よ、われを助けたまへ』と叫びしたのでございます。此時主は半ばは黙想に耽られつゝ、半ばは微笑を含まれつゝ、『兒女のパンを取りて犬に投げ與ふるは宜しからず』とお答へになりました。これは言ひ換へて見れば、『お前は私が猶太人であるとは知つてゐなさるだらう、また猶太人は天に在す父なる神の家族の一人だと信じをるとも、お前さんたちを只狗だと思つてをるとも知つてゐなさるだらう』といふ意味であります。而して主がかく仰有る時學者たちの虚偽に満ちた冷たき不信仰と、彼等が常に擯斥せる此異教徒なる女の温かき信仰とを較べて御覽でしたらうか。また單に根性の狹隘い猶太人の此の諺を引いて、かの氣の毒な女には一點の同情も寄せたまはぬとが主のお答の聲の調子に表はれましたでせうか。少くともこの女が主の眞意の有る所を諒解したとは明白であります。この女は熟と主のお顔を觀ました時何とも言はれぬやさしい、深切な色が浮んでをりました。主が『狗は兒女のパンを所望するとはならぬ』と仰せ

られると、女は直ちに『主よ、然り、パンにはあらず、パンの屑なり。狗もその主人の膳より落つる屑を食ふなり』と申しました。主はその信仰を嘉したまひて、『婦よ、爾の信仰は大なり。願の如く爾に成るべし』と仰せられました。

女は大に喜び、幾度か禮を述べて還つてゆきました。然るに女が家に歸りつかぬうち留守看護をしてゐましたかの隣家の女房は母の女に何か告ぐべく走り寄つて來ました。さうして氣の狂ひをつた小さきわが娘は病いへて戸口に出で、自分を待つてをりました。

第三章 瞽者明を得

其後主イエスは猶太の北と東とに在る國にて永らく滞在をしてをられました。其間に數次エルサレムへ上られて殿堂の大祭に出席し、其處に集れる大衆に向ひて説教を爲さいました。市中には一晩も宿泊をされたとはなく、エルサレムに近き一小村の

ベタニヤに住へるラザロといふ人の家をいつも宿とせられました。これラザロにはマリヤとマルタといふ二人の妹がありまして、同胞心を協はせてよく主を歓迎いたしました。猶太人は常に主を殺さうと心懸けてゐますから市中に宿泊せらるゝのは主に取りて危険でありました。

斯様な場合に人々はイエスについて甚しく感ひました。主イエスが説教を爲される時之を聴聞した甲の人は隣の乙に「此人は眞に豫言者に相違なし」といへば乙はいと熱心に手を拍つて「イヤ、キリストに相違なし」といふ。さうかと思ふと丙は之を蔑視して「ナニ、彼は鬼に憑れたる狂人なり、爾曹何を狂人の説話に耳を傾くるや」と嘲けると、甲乙の二人は躍起となつて「いかに鬼に憑れし狂人にして彼の如き道理な言語を出し得べきか」と反駁はするものゝ、確乎とした信仰でいふのでは無いからして、終には有力者の無理強ひに壓迫せられて主が市上を通行せられる時主に投げつけると石をさがすやうになりました。

猶太には國と教會とに二の黨派がありまして、一をサドカイ派といひ、一をパリサイ派と申しました。殿堂の祭司や、政府の役人の多くは、サドカイで地方の會堂の宰たちは皆パリサイに屬し、パリサイは主として説教に従事しますが、サドカイの人たちはいろいろ精細い職務にたづさはつてをりました。サドカイ派に屬する者は人數も小勢で、幾んどエルサレムにのみ閉ぢ籠つてをり、パリサイ派は國民の善良にして熱心な宗教的人物の大部分を包有してをるのでございました。それ故に主が古來の慣例を遵守せぬといつて主を惡んだのはこのパリサイ派の人々でありました。サドカイ派の人で主を惡んだのは主が人民を教唆して革命を起し、其爲め羅馬政府より軍兵を向けられ、此上にも悲惨な境遇に陥れられはせぬかとの懸念からでありました。そこで兩派の首立つた者共が一日相談をいたし、主を捕へて牢獄に幽閉せしめやうと捕吏を遣はしたとがありましたが、其捕吏どもは徒しく返り來りましたので、兩派の者は何故主を捕へ來らざりしやと詰問しましたところ、捕吏は「彼の人の如く有益になる

事を説教する者は他にあらざれば』と答へたところがありました。これは彼等が群衆の中に入りて主の説教を聞いて大に感じ入つたからでありませう。

數次の京詣の、ち主は猶太人のをらぬ、若し居つても極めて少數な地方にお戻りになりました。一日ベテサイダといふ處に往かれました。此處は十二使徒の幾人か住馴れた漁業地のベテサイダとは別の土地で、ガリラヤ湖の頭部に在つて、多く羅馬人の住居する處でありました。それゆゑ商店の看板なども拉丁語で書いてあり、子供たちさへ皆拉丁語を用つてをります。我主が街上を歩いてをられますと前方から一人の替者を連れられた數人の夥伴が來るのにお出合ひになりました。

元來物を見るところの出來ない人は物を言ふとも出來ないといふとはありません。此替者は終には口をさゝましたが初めは何もいひませんでした。初めには其友達をしていろく〜と喋舌らせて、自分は一語も發しません。今イエスの許に連れて來られたのも想ふに友達から切て勧められたので、本人は來る氣は無つたのでありませう。彼は是

迄多くの醫者にかゝつたのでありましたが、何の醫者も彼の目を少しでも見えるやうに癒し得なかつたので、もう醫者には信用を有たなくなつてをりました。ところが其友人が『イヤ、こんどのは醫者ではない、神の人だ。この人がこのベテサイダでも一言物を言はるれば神様は天でそれをお聞きになつて應驗があるといふとだ。一つ往つてお頼みして見ようではないか』と勧めました。『それでは往つて見よう。私は信じないがお前方の切角の勧めだから往くとしやう。ナニ、みんな虚偽の皮だ、迷ひだ。私は癒して呉れとは其人には頼まぬ。お前方が頼むなら頼むさ、私は頼まない』とこの目しひは友の誰彼に連れられて我主の前に來ました。

我主は友からの依頼を受けて替者の手を執り、其友人たちは其儘そこに置いて只二人都會の外へと往かれました。これは一には主が靜かに親しくこの男と話を交ゆる機會を得るため、また一にはこの男が主に話をする機會を得るためでありました。主と替者とは兩々手を携へて一の街を上り、その街を下り、人家ある所を過ぎ去りて緑

の郊外に出でました。その一步一步に我が主はまことにやさしい、如何に頑硬なつた心でも解け、やはらぐやうな調子を以て淳々とお話しになりました。男の心は異しく動き出しました。こんな調子に話しをされる人なら何の様な事でも此人が爲やうと思はれたならば出来ぬとはあるまいといふやうな氣になりました。實にこの歩行は治療に取りて必要な一部分でございました。若し此男が冷淡と不信とで堅まりきつてをりましたら如何に主であつても彼をどうするとも出来ませんでした。對手みづからの信仰は奇蹟に必要な條件でありました。この男が自分の目は明くだらうといふ信仰はこの歩行の途中で芽ざし、成長いたしました。

彼等は全く郊外に出でました。主は足を停め、おん指をその唇にあて、それから其指を男の閉ぢたる兩眼の上に載せ給ひたるが、しばらくして其おん手を眼より離し給ふとき『サア、何か見えるか』と仰せられました。男は思はず眼を打開きましたるに何やら是迄知らなかつた不思議の光明が我が前に在ります、恰も闇黒の夜がこ

ゝに終を告げて、遙か彼方に太陽が少しばかり登りかけた様でありましたので、かの男は叫んで『見えます、見えます。何か知らん人間が樹木の様に歩いてをるのが見えます』と申しました。此は何の事でせうか。かの男は樹木と人間とが兄弟であるかの如く手に手を取つて田舎道をこちらへ歩いて來るのを見ただのであります。予は今でも吾人が吾人の心意で或物を見るのが斯様な具合であると想像いたします。吾人は神と神及び吾人に關する大眞理を朦朧混沌たる状態のうちに見るとが丁度かの男が道傍の並樹を見たのと同じくあるのでございます。かの男は雲霧の間を歩むでをる人のやうであります。雲霧の中に在る物は少し隔たれる處から見れば熟れが樹木で、熟れが人間か明瞭には分らぬ者であります。かく吾人もこの驚くべき世界を愚かにもあれこれかと思はしてをるのでございます。

瞽者は遂に明を得、視力を回復いたしましたして、凡ての物を明々白々に視るとの出來るやうになりました。吾人の希望するところは此明快なる視力が時として吾人の心裏

に來り、神の道や工の眞意を餘蘊なく了解するとであります。主はこの男をその家へ歸らせ給ふ時『町に往く勿れ、又町の何人にも我が明を得させしとを告ぐる勿れ』と注意させられました。これは主が御自分の周圍にもこの男の周圍にも多くの人々が聚り集ふのを好みにならなかつたからでございます。

第四章 隅の首石たるべき磐

我主と十二使徒は其頃大方は異邦人の國々を此の都會から彼の都會、この村落からかの村落へと絶えず遍歴してをられました。さうして何くへ往かれますにも徒歩でゆかれる、途中では常に十二人を相手に談話をなされました。途中で遭逢ふ何處の人民でも我主の一行に注意もせず、普通の旅人と想つて振向て見る者もなく通り過ぎてしまします。園圃の作物を近き都會の市場に賣うと急ぐ百姓はその馬車を驅りたてゝして主と十二人を車塵の濛々たるなかに殘して走りゆきます。さうして歸つたとき女

房たちが今日は何か面白いとでもありましたか、珍らしい物でも御覽なされたかと問くと、彼等は頭を振つて何も見なかつたと答へました。何處の者もペテロの傍を過ぎ、ヨハネの横をかすめ、アンデレ、ヤコブ其他の八人、またそれら使徒の中央に主の在すに何人と氣のつく者もなく、空しく通り過ぎて往つてしまひました。若し彼等のたゞ一人にても此等の異様の珍客に氣が付き、足を止めて何なり二言三言問ひ尋ねをいたし、其人は歸宅の後その答へられたところを書きとめ、後世の吾人の爲めに殘し置てくれたならば其人は人類の恩人の一人たるを得べく、また世の終るまで其人の名は朽つるとは無かつたらうかと思はれるに、不注意の人ほど、人を見る明のなき者ほど残念の輩はありません。『お前さんたちは歩きながら何を話しておいでなさるのだ。如何には嬉しげに樂しげに物語をしていらつしやるが』とでも申したならば之を緒に如何なる立派な教訓が世に残つたか知れぬに彼等村人はその生業に忙がしく、何の質問も爲さずに好機を失つてしまひました。

一日十二使徒が其故郷に在りしころの宣教治療に成功した經驗談を爲ながら歩いてをりました時我主は使徒たちに『人々は我につきて何といひをりしや。爾曹が遊行の際に何を聞きしや。彼等は我がとを何といひをりしや』とお聞きになりました。すると十二人は『まづ多くの人は師をバプテスマのヨハ子の 魁りたる者なりといひ、またエリヤなりとも、エレミヤなりとも申し、またたゞ漠然と往昔の豫言者の一人なりとも申しをりました』と答へました。

實に人民の明の無いのは致方の無いもので、イエスの心やさしく、謙遜なるとに目をつけたものは無かつたと見えませす。バプテスマのヨハネもエリヤもこれは何れも剛強敢爲の人物で、神より一大使命を受けて來り、王といはず、主權者といはず凡て奸惡佞邪の輩を叱責罵詈した人でありました。前にも申した通り豫言者といふ者は普通革命家で、凡て邪曲な人間には危險視せらるゝのでありました。たゞわづかに我主の一面を見ただけの人に與へた主の印象は矢張りこの革命家の方面であつたには相違あ

りませんが、しかし多くの人民は主が凡て艱難辛苦の境遇に在る人達にはなことに深切でやさしい友であつて、地に屬く側の人ではなくて、天に屬く側の人、暫時此世のためにパラダイスから天降りした聖徒の如くに見えたのでありました。たゞ主が神の道よりも人の慣例儀則を重んじ、心に邪智をもちながら外面に殊勝な面色をしてをる者共に對はれては如何にも峻烈な態度を取られたのと、此世の有力者を場合によりては何時でも其位地より叩き落しかねまじき勇猛なる御精神の閃灼けるのを瞥見した者の眼には一種怖ろしき人物と映じたので、使徒等が地方の都會で食事に招待せられた席上に於て聞いた彼等が主の月旦は左様であつたのでございました。

今度は主は使徒たちに『爾曹は我を謂ひて誰と爲すか』とお問ひになりました。何事にも氣早で即急的で、口を出すにも手を出すにも最初の人であるペテロは言下にお答へをして『爾はキリスト、活神の子なり』と申しました。之を聞かれて主は『ヨナの子シモン、爾は福なり。そは人ななち告げたるにあらず、天に在す吾父之をな

んちに教へ給ひたるなり。我又なんちに告げん、爾はペテロなり、我が教會をこの磐の上に建つべし、陰府の門は之に勝つべからず』と仰せられました。この猶太地方には都會には必ず入口に門があつて、人々は茲に聚りいろくの相談や賣買などをするのでありますので、主はそれを喩にして、悪人共のあらゆる圖謀は主の教會に勝つとは出来ぬ、大丈夫であるといふとを仰せられましたのでございます。

主は教會のとなつて何か使徒等に教へられた所があつたでしうか。吾人はこれについては何も知りません。唯吾人の知るところは主は一瞬時の間に永い永い未來の事を洞見せらるゝといふとであります。今や主は御自分の屬せられた教會の首立つた人々からは惡まれ、弟子の多くの者には棄て去られ、相隨ふ者としては僅に十二人、それとも主と同じく自國より逃げ來つた亡命の客であつて。主從師弟合せて十又三人子然として異郷の空にさまよひをるのでございます。師弟は今悲哀につ、まれ、勇氣は沮喪したるかの如くに見え、從來の事業は凡て失敗に歸したやうにあります。併

しながら主は吾人が失敗と稱する所の事が時としては却て神の前に赫々たる成功であるを能く知つてをられます。主は一の磐の上に基礎を置いた教會が高く雲漢を衝くまで築きあげられたところを御覽になつたのでございます。

本來ペテロの實名はシモンといひ、總名を呼ぶ時はシモン、バルヨナ、英語にすればシモン、ジョンソンであります。今主が『爾はペテロなり』とペテロといふ新しき名をお命けになりました。そのペテロとは石または磐のことで、頼りになる人物といふほどの心にて『爾はペテロなり』と仰せられたのであります。シモン、ペテロは今『爾はキリスト、活神の子なり』てふ教會が據つて打建てらるべき大切な一語を發しました。今日の基督の教會は實にこの一語を磐とも基礎ともして打建てられ發展したのであります。しかし主は此問答後直ちにこれらの事は凡て秘密に守るべきやう使徒等に警告しおかれしました。ペテロは事の眞をいひました、人々は今や始めてその師たり友たる此の偉大なる人は果して誰であつたかといふとを諒解いたしました。が、これ

は世の人に告げてはならぬのであります。若し彼等が之を軽々しく口にするやうな事があつた日には忽ちパリサイやサドカイの人たちが師たり主たる我がイエスを殺すに至るは火を見るよりも明かなるとでありました。

何故といふにサドカイの人もパリサイの人もイエスの如く彼等とは全く日常の行動を異にせる者が活神の子であるとは如何にしても信じ得られぬ所でありました。若し彼れイエスが果して活神の子であるとすれば彼等は皆悪い者になつてしまひ、その日常生活の全行程を一變してしまはねばならぬ。彼等が設定したる宗教的慣例儀則は悉皆棄て、しまはねばならぬ。彼等は既に主イエスにさういふ心意があつたやうに推測をしました。ある時彼等は主イエスに迫りてその何人なるかを告白させ申さうとして『われらを幾時まで疑はするや。爾もしキリストならば明かに我儕に告げよ』と申したとがございました。しかし主は之にお答へになりませんでした。若し明々地に之を告白せられたならば其時は其の使命もそのお生命も共に急劇な終末を告げ、主は無

残の御最後を遂げられたに相違ございません。いづれいつかは彼等は之を告知されねばならぬが、未しである。時節が到来せば主自ら之をお告げになりませう。其間は何人にも告ぐる譯にゆかぬところから主は使徒たちに此一大事を秘密にしおくやう約束せしめられました。使徒たちでさへ實はまだ此真意の初めのところ、淺いところよりは見えぬので、丁度人を樹木のやうに見た替者の如き情態でありました。併しイエスキリストに在りて神は吾人に語り、吾人の衷に在すといふ教會の中心たるべく、また吾人の生命たるべき所の至上の眞理は其處に在つたのであります。この磐の上に、隅の首石の上にと同じく教會は基礎を置かれました。

主は彼等に人の子はさまざまの苦楚を受け、世より斥けられ、終には殺されねばならぬといふとを此頃より漏しになりました。また一たび死して復た甦り給ふべきともお指教になりましたが、使徒たちにはまだ諒解りませんでした。たゞ彼等を尤も感動させたのは彼等の師は死なねばならぬといふとでした。今や彼等は眞にイエスを

知り師が人間であると同時に神性のお方であることを知りましたが、その尊いお方が無理やりに自分たちから引き放され、死刑に處せられねばならぬといふのです。なぜ師は死なねばならぬのでせうか。まだ三十になつたかならぬ青壯の人が？ 彼等は實に之に耐へ得ませんでした。例の氣早のペテロは之を援きとめて『主よ宜からず、この事なんちに來るまじ』と申したれば主は次のやうな意味で『我も亦その辛苦さことを知れり。われを生を好みて死を惡むは豈に人と異らんや。凡て我が人性はわれに逃げよといふ。われ今なほ神に向ひてこの苦き杯を取去りてわれに飲ませ給はぬやう祈りをれり。されどもその終末は今わがいひし如くなるべし。友よ、爾曹も亦苦しみを受けん。爾曹も十字架を援りて、死に至るまで我に従はざるべからず』とお答へになりました。

第五章 主の美裝

使徒十二人のうちに主が他より増して愛し給ひたる者が三人ありました。これは常

に主がおん身近く侍らせ置き給ふによりて明かなることであります。即ちペテロ、ヤコブ及びヨハネの三人でありまして、かの會堂の宰の小さき娘が白く冷たくなつて床の上に横つてをりました時此三人だけを伴ひ、他の九人は室外に待たせ置きて病室へ入られたとがありました。此三人は他の使徒たちより優れて善良なる者であつたからといふわけでは無く、又他の九人はユダを除きて此三人に較べて多く過誤や失策を爲たといふのでもありません。予一人の想像ではペテロ、ヤコブ及びヨハネの三人は他にまさつて主を愛しました。彼等三人はいくらでも主の愛を受け得らるゝの故を以て主はその愛を愈々益々彼等に傾注し得られたのだといたします。兎に角主は彼等三人の同伴をいつも好んでをられました。

一日主は例の三人を携へて或る高き山に登り、九人の者は麓にて待ちをるやうに命ぜられました。明くる朝山を下る時に『爾曹の見しとを人に告ぐべからず。わが死より甦へるまでは深く之を秘みおくべし』と仰せられました。三人は主が死より甦へる

と仰せられた真意は存じませんでした。山上にて見た事柄は何人にも話しは致しませんでした。爾後何ヶ月か何百日か彼等三人は異しむべく驚くべき當夜の光景を憶ひ出しつゝ、主に従ひて諸方を遍歴しますうちに何か早く之をアンデレヤピリポや其他の使徒たちに話して聞かせたいと思ひましたが、時の来るまでは一度もこのとを仲間の使徒たちには漏しませんでした。彼等は秘密を守る、約束を重んずるといふとは能く知つてをつたからでありました。さて其時が來つて三人は甲一句乙一句この驚絶駭絶の物語を詳しく語りさかせました。

『さて諸兄も我儕が始めて師が榮光の主で御座つたといふとを知つたその日、また始めて師が人に殺されなさらねばならぬとわれらにお話しあつたその日を覚えてゐられるだらう。又その週間といふものは我儕が如何にその事について考へたか、相互に談合つて或時は力味出したり或時は凋れかへつたりしたとを覚えてゐられるだらう。殊にその週間の終りに諸兄を山の下に待たせ置いて我等三人は主のお伴して山へ登つ

て翌朝返つて來たとのあつたのを必ず知つてゐられるであらうとおもふ。其晩のときであつたのだ、實にハヤ驚き入つた事が持ちあがつて、不思議と云つても彼の様な不思議のとは臍の緒切つて初めてのことであつた。それを早く諸兄にも話したいと思つてゐたが、堅い約束で時の來るまでは何人にも話してならぬとになつてゐたので、今日迄は心ならずも秘してゐたが、今は早話しをしても差支ない様になつたから話しをするが、まあ聞きなさい、かうなのだ』と聞耳引つたて、眼まるくして聴き居る他の使徒たちにかの三人は話し出しました。

我主と三人とが山に登りかけたは其日の夕刻近き頃でありましたが途中に於て太陽は既に山陰に没してしまひました。闇き影は刻一刻に深くなりゆき、星は追々に多く現はれ出で、下には遙かの田野に三々五々散在してをる農家の燈火が下界の星の如くに眺められました。かくて山の巔の開豁とした處へ登り着いて其處に坐しましたが、人寰を離れた高山の巔の、しかも深夜の莊嚴なる静寂に打たれて誰一人言葉を發す

るものは有りませんでした。其内に我主は祈禱をお始めになりました。實は彼等の人を離れた高山へ連れて來られたは彼等をして神の前に在る森嚴なる感想をおこさしめ、さうして心から祈禱を捧げさせやうとの主の思召であつたのでした。

實に主は寂寞無人の處に於て祈禱をせらるゝとをお好みでありました。嘗てカペナウシに在られた時或朝早く起き出でられて湖水の濱邊に往かれ、仰で天を望み俯して地を視、心に聖きいろゝの思想を構へつゝ其邊を漫歩せられました。又弟子たちに祈る時には戸を閉ざして密室に在るを良き方法なりと仰せられました。パリサイ派のなかにはわざゝ人通り繁き巷のかどに立ち、掌を合せ、空を仰ぎて祈り、往來の人々に『あの殊勝の事よ』といはるゝを期する所の者がありました。我主は之をよい事とはなさいません。凡て外觀を衒ひ、みえを飾るとが大きらひでありました。それ故に弟子たちに『爾曹祈る時は密室に入りその戸を閉せ』と仰せられました。この山の巔に於ける夜の闇黒は主と世界との間にある戸のやうなものでありました。

主は祈禱を爲されました、此を給へ、彼を授けよと求めたまふにては無く、單に神のおん前に立ち居たまふとあたかも幼き子供が父の膝下に深き信任と依頼とを以て坐しをると同じく、神の近きと愛しみとを感じつゝ、口には出さずたゞ心の奥にいのりしてをられました。然るに伴の三人はいたく疲憊てをりました、それに夜も更闇け、且つ聞く寂かでありました。誰も此聖徒等が祈禱をしつゝ眠りこけるとは思ひも寄りますまいが、實はこの三人の聖徒は眠つてしまつたのでありました。彼等は祈禱を捧げてをるうち眼瞼が次第に重くなつてしまつた、それと氣のつく前に深き睡眠に落ちてしまひました。何時間眠ましたか、當人たちは存じません、不圖その夢現のうちに三人は一種の光明を見ました。彼等は睡氣に重い目を開いて見ましたところ依然として主は祈つてをられました。然るに主の衣服は光り輝いて夏の日の雲のやうに眞白く、おん顔は煌々として午天に於ける太陽の如くにありました。今や榮光の主は木匠の職服は脱ぎ去てられしか、天使の如き白く輝く服につゝまれ、天の榮光はその兩

眼に反射して美しく其處に立ち居られました。さうして又其處に二箇の人が主の傍に立ちてをりました。ペテロとヨハネ、ヤコブは此二人が何人であるかを如何して知りましたか、主みづから彼等に教へられなかつたならば知る筈は無つたでせう。何故といへば此二人は麓から登つて來たのではなく、天より降つて參つた數百千年前既に物故した所の人たちであつたからでございます。即ち一人はシナイ山にて神を見、十誠の石牌を携へ來ましたモーセであり、又一人はカルメル山で神に祈り、驚くべくも雷電と大雨とを以て應へられたエリヤでありました。我主は今この二箇の偉人の間に立たれ。三箇親しげにいろ／＼と談話を爲てをられます。三人の使徒は半睡半覺のうち談話の主旨は一週間前主が己等にお話しになつた主の怖ろしき死が愈々近づき來たとに關したるものでありました。實に曾て仰せられたお言葉は今や不思議にも實現しかけたかの如くでありました。活神の子はその神的榮光を現じつゝ、自ら負はるべき十字架につきて物語をしてをられたのでございました。

しばらくして二箇の人はその今の住處なる樂しきバラダイスへ還らんとする様子でありましたので、ペテロは睡くもあり、恐ろしくもあれど例の氣象の事とて突如進みいで、二人を止めんとし、『主よ、われらこゝに居るは善し。若し尊旨に適はゞ我儕に三の廬を建らせたまへ、一は主のため、一はモーセのため、一はエリヤのためにせん』といひ、早他の二人と共に其邊の樹木の枝を伐り、直にも廬を建らうといふ様でした。が、忽ち光りかじやく雲空より舞ひくだりて彼等を覆ひましたので、弟子たちは非常に驚き恐れ、手を顔にあて、俯伏しました。其時雲の中に聲あつて、主が受洗せられし時と同じく、『此はわが旨に適ふわが愛子なり、爾曹これに聽くべし』と聞えました。間も無く主は三人の傍に來られ、彼等をゆり動かして『起きよ、懼るゝ勿れ』と仰せられました。三人は恐るゝ目を舉げて見れば夜は以前の如く烏婆玉の闇黒にて、空には星の耀けるばかり、人といひては主と彼等三人の外には誰一人も居りませんでした。

翌朝彼等が麓へ下る時主は此事を何人にも告げはならぬぞとお誠めになりました。彼等は堅く其約束を守り、主イエスの榮光、神の子の榮光は何如なるものであつたかといふことを時々憶ひ出して之を偲びつゝ、遂に誰にも漏らすとなくして此日に及んだのでございました。

第六章 山麓の少年

榮光の主の幻象がありました。翌朝二箇の懸伴が各々別の方面から同一處へ次第に近よりつゝありました。一は主及び三人の弟子が山の上より下つて來らるゝのと、一は一箇の少年を伴ひたる其父が山麓の途を此方へ參るのとであります。

此少年は頗る不思議な、怖るべき疾患をもつてをりました。或時は其母が別室にて此少年が何か苦しがつて大聲を擧げて泣き叫ぶのを聞きつけて、其室に走り入つて見ましたれば、此少年が爐の火のなかに落ちて苦しがつてをるのであります。少年は

何人かゞ自分を爐のなかへ突込んだのだといふやうな風であります。その室には初めよりこの少年の外に誰も居らなかつたのであります。此家に近く深い池がありまして、少年は常に此池に入つて遊んだのですが、かたはらに誰も己の番をする者がなると見ますれば忽ち奔り出で、ザンブとばかり池の中へ飛び込み、深處でもがき、幾度か溺死せんばかりの危いどがありました。少年は誰かは知らず、我が肩を擡んで池のなかへ投込んだのだと手眞似で示しますが、しかし誰も左様な悪戯をする者のあつたを見たことはありませんでした。又ある時は彼が他の子供たちと遊び戯れてをるうち何か氣に入らぬとでもあつたのでせうか、彼れ忽ち聲をあげて泣き叫びて打倒れ、齒をくひしばり、口に泡を出して拘攣けます。さうして彼は何人かゞおのれを打倒したのだといふのですが、一本の指だに觸つたとはありません。此少年はかゝる病氣がある上に又聲で、瘧者で一言も聞くとともにならねば言ふとも出来ませんでした。それで彼れは次第に身體弱く、瘡せ細りて幾何の餘命も無く見えるやうになりました。

これはつまり鬼に憑かれたといふので、前にも申したやうに時々劇烈の發狂をなすのでありました。

随分是迄その父母は醫者といふ醫者につけ、また教會の宰など頼んだとがあつたのでありました。教會の宰などいふ人は時としては狂氣した者を癒すとの出来るものであります。しかし誰も此少年を治療し得た者はありませんでした。ところが不圖ナザレの豫言者が今度當地に見えたといふ評判を聞き込みました。少年の両親は固よりナザレの豫言者とは誰であり、また何如いふ階級の人であるかといふとは善くは知りません。近所の評判として種々様々であるが衆口一致する所は彼れその人は故郷を追はれた人なれど、至てやさしい深切な人で、此迄多くの鬼を退出し、病人を醫された方だといふに在りました。そこで其日の朝早く父は手眞似を以て少年に語り、その豫言者が逗留してをるといふ方へ、遠い道ではあれど往つて見たならば汝を癒し下さる有り難いお方にお逢ひ申すとが出来たらう、さうすれば最早汝は火に倒れ、水に

倒れるとが無くなるに相違なからうと勸めて出立をいたしました。

父子の一行は主及び三使徒がまだ山麓に下りつかぬうち既に此度に参りました。麓には只九人の使徒が何やら互に談合ひつゝ、主を待つてをつたのですが此父子の二人が参る、そのうちに如何この疾病が癒るかそれを見たいと父子の知人たちが来る、その話を又途中で聞いた何處も同じ彌次連がドヤ／＼と聚つて参り、随分の人數となりました。父なるもの九人の使徒に向ひて『豫言者殿は何處に御座りますか』と問ひました。使徒『われらが師は昨夜われらを妙に待たせ置きて山へ上られました。』父『何時頃お戻りになりませうか』使徒『それは分りませぬ、しかし今日は下りられませう、明日といふとはありませんまい。何か御用の御座るか』と申したればかの父答へて『われら事病に憐む一人子の悴を連れて参りました。おの／＼は豫言者殿の御身内とあらば同じく鬼を逐ひ出し給ふとは容易なとでありませう。なんと我子を憫み、癒しつかはされませぬか』と頼みました。使徒たちは大得意となり、『それは容易のとござる、

われらも鬼を逐ひ出す術は知りを取ります。その少年をこゝへお連れなされ」と申すに父は大に喜び、かの少年を使徒の前に連れ出しました。群衆の彌次連は希有なると皆使徒たちの周圍にヒシ／＼とつめ寄りましたので、使徒たちもこゝぞ手柄のあらはし處とマタイ、アンデレを始めとして皆々神に祈り、手を振り、大喝し、主が曾てなされし様を真似て試みたれど、一向にその効が見えませぬ。かやうな筈ではないにとや、呆れて打守る程しもあらずかの少年は非常なる苦痛の様して地上に打倒れました。少年の父は落膽をします、群衆は案に相違して失望をした結果は憤怒となり、「此奴等は詭騙兒だ、石でも擲さつけろ」と今しも大騒動にならんとしました。

此時主は三人の愛弟子を従へ、森の下道を静かに下り來られました。山の麓に近くに従ひて、喧嘩でもあるか高聲に罵り叫めく人聲がする、そのなかに餘程苦しみ惱むか鋭き叫びの交りてきこえました。何事やらんと主の一行は少し足を早めて來り見ますと群衆の人たちが九人の使徒を中にして、拳を擧げて使徒の面上を打たんとしたを

るものもありました。其中に主の下り來られたるを見た者あつて「ソレ、豫言者どのが御出になつたぞ」と叫びましたので、人々は九人の使徒は打棄て置いて、主にあはんと皆その方面に奔り往きまして、主はと見ればおん顔のかゞやき異常なるに一同驚愕、膽を消して立止まりましたは恰もむかしモーセがシナイ山より下り來りし時其顔あやしく光りかゞやきゐると同じ様でありましたからで、そのうち一人二人進みいで、主に挨拶をいたしました。主は其人たちに向ひ、「何事が起りて、左様にきつく喧嘩口論なしをらるゝや」とお聞きになりますと、他の答を待たず、かの少年の父進みいで「お先生様、私一人息子の物いはぬ悪鬼に取憑かれました者を擧れ参りました。悪鬼の憑きます時は何處といはず傾倒され、沫をふき、齒をくひしげり、疲勞てます。この鬼を逐ひ出さんとを御弟子衆に願ひましたが、御弟子衆の手には適ひませんでござりました。何卒お先生様の御慈悲で忤奴の鬼の出ますやうお願ひ申します」と歎願いたしました。

主は之を聞かれ、目を轉じて使徒たちの方を見やられ、さうしてその面上に浮べる相を御覽になつていたくお心を惱まされた。といふは彼等は皆自分一箇の上をのみ考へゐて、更に慈悲寛大の心なきを主は其面上に於てお相になつたのであります。又彼等は十二人のうち誰が一番優勝したものであるかといひ争つたとがありました。又彼等は自分たちの出来ぬ鬼を逐ひ出すとを他人の能くするを見て、之を差止めた事もありました。今この少年が参りました、凡人の者は皆心のうちに『今日こそ我儕が如何に大なる権能を有ちをるか、之を彼等に示めして驚かすのが出来やうぞ。我儕は今奇蹟を爲て見せう、鬼を逐ひ出して一つ驚かして呉れう』といふ考へで、病氣の少年を憫むでもなく、其親に同情を寄せたでも無く、また師なる我主のためと思つたでも無く、たゞおのれの名譽のため、外觀のために病氣を癒しやらんといふのでございました。思ふに彼等は先を争つて、先づアンデレが『己は一番初めに弟子になつたらおれが第一に手を子供の手に按ふ』といへばピリポが『イ、ヤ、さうはならぬ、お

れがやる。おれは主自身で己をさがして、己を弟子にさしやつたのだから己がやる』と力みた。他の弟子たちも各自『おれの方が一番偉いからおれがやらう』と群衆の前もかまはず争つたでございませう。然るに結果は失敗で奇蹟どころではありませんでした。神も人もかやうな自私自利の精神に感應するとはありませぬ。

我主は大に悲しまれました。主は近く来るべき御自分の無残の死につきてお心は一杯でありました。御自分は人のため、世のために生命をお投げ出しに相成るといふのに、その弟子たる使徒はたゞ自分自身のとをのみ考へてをります。これが主をして獨り寂寞を感せしむる所以で、主はその激昂しをれる使徒たちの顔をと見かう見つゝ、深き歎息を發せられて『噫嘻信なき世なるかな、いつまでわれ爾曹と共に在らんや、いつまでわれ爾曹を忍ばんや』と申されて、さてかの父に向はれ『なんちの子をこゝに連れ來れ』と仰せられましたので、父はその子を主の許に連れ來りましたが、その病の一の發作が忽ちおこりまして少年は拘攣けられて地に仆れ、輾轉びて沫をふき出

しました。主はその父に『いつ頃よりかくなりしや』とお問ひになりますと父は『少
 時よりの事でござります、悪鬼しばく、彼を火の中、あるひは水のなかに投入して殺
 さんといたします。お先生様、もし出来るのならばわれら父子を憫み、お助け下され
 ませ』とお願ひいたしました。弟子たちは既に失敗りました、その先生といふ豫言者
 も亦失敗りはせぬかと氣遣ひしましたが、主は父に『なんぢ若し信ずるとを得ば信ずる
 者に於て爲し能はざるとなし』と仰せられますと、父は直ちに聲をあげ、涙を流して
 『お先生様、信仰しませんで何といたしませう。どうぞお助けなされて下さりませ』
 となげきましたので、主は少年に對はれて『啞にして聾なる悪鬼よ、我なんぢに命ず、
 出で、再び之に入るなかれ』と一喝いたされたれば聲の鬼は之を聞き、啞の鬼は大聲
 に叫び出して、少年は俄かに目を閉ぢてそこに打倒れましたので、人々は皆少年は死
 んだのだと思ひました。然るに主はその手を執りて扶け起しましたればかの少年忽ち
 又目を打開き、身を起しました。父子は幾度か厚く禮を述べ、神を頌めた、へつ、手
 に手を執りて故郷へと歸りました。

第七章 よきサマリヤ人

ヨルダン河の外方にベリア、譯していへば外方の土地といふ一地方があつて、そこ
 に主は刑死前の數ヶ月を送られました。主はエルサレムに往き數日間幕屋の節筵を守
 られましたが、此時に生れつきの替者を癒して物見るとの出来るやうにしてつかはさ
 れました。それから又構廬の節筵のために再びエルサレムにお上りになりました。
 この祭日の一は毎年の秋に、一はその冬に行はれます。このベリアは猶太の一部にて
 ユダア、ガリラヤなどと同じものでありました。それ故にその都會や村落には會堂も
 あり、パリサイの人も居りました。

此頃また新しい弟子が大勢主に隨從するやうになりましたので、一日主は其うちの
 七十人を選び、曾て十二人の使徒をガリラヤの各地へ派遣宣教せしめし如く、ベリア

の各都會へお遣はしになりました。七十人は命を衝みてそれ／＼出でゆき、病人を治療し、天國の近きに在るとを宣べ傳へましたところ、人々殊に心のすなほなる者、貧しき者即ち田圃に耕作する農夫や、都會の裏長屋に住居する者たちは喜んでその教を聽きました。が、パリサイの人等は彼等を擯斥いたしました。七十人の者が成功の復命をいたしました時主イエスは心に喜びて、『天地の主なる父よ、此事を智者と達者と共に隠して赤子に顯はし給ふを謝す』と仰せられました。實に智者と達者とは曾てユダヤであつたと同じく此地にても我主を惡みました。彼等は此世に何でも知らぬ事柄は無いと其知識に誇つてをりましたに、主は來られて彼等が從來一度も教へたどの無い道を説かれますので、少からず不快に感じました。これは彼等平生の驕慢に大打撃を與へたのであります。

時としては彼等は主がよも答辯がお出來なさらぬだらうと思つて種々の質問を主に爲したとがありました。或時彼等の一類が主を圍んで坐してをつた時一人の教法師が

立つて主に向ひ、『師よ、われ何を爲さば永生を受くべきや』と試み問ひました。これはこの教法師が永生を喪ふやうな危険の境遇に在ると自ら感じたのでなく、又主にその指導を受けんとの心願があつたのでなく、たゞ何とかして主の失言を捕へてたしなめやうとの邪心からでありました。彼は教法家として言を發しました、教法家といふもの、職掌は何でも質問をするのがそれでありました。主は徐に口を開き給ひて『律法に録るされしは何ぞ！なんぢ如何に之を讀みしや』と反問いたされました。

こゝにいふ律法は今日いふ所の法律とは大に趣きを異にしてをるもので今日の法律書を開いて、永生を受くべきとの書いてある條項を捜し出さうなどとは誰も思ふ者はありません。今日の法律書は主として賣買、抵當、組合、罪過等に關し、人民の之を讀むのは政府の處罰を避け、牢舎に入れらるゝとを免れんためであります。今日の教法師の律法といふのは宗教の事に關して澤山に書いてあるもので、その幾部分は

今猶舊約全書のうちに収録せられ、善悪の行爲は實に其人の現在にのみ關係するばかりでなく、遠く未來にまで影響を及ぼすものであるといふことを認めてをります。そこで彼の教法師は今主の反問にあひまして、その曾て讀んだ律法の書物のなかから其語を誦し出して『「なんぢ心を盡し、精神を盡し、力を盡し、意を盡して主なる爾の神を愛すべし。また己の如く隣を愛すべし」とある、是でござりませう』と答へました。主は之をお聞きになりましたして『爾の答しかり、之を行はゞ生くべし』と仰せられました。が、教法師は満足しません。教法師の間に應へられた主の答は彼の望む所のものでは無つたので、再び問を起し、これに因て主を困らせてやらうと、『その隣りと申すは誰のとを指すものにや』と問ひかけました。嘗ても言ひし通り、我主と彼等猶太人の頭立ちたる祭司や學者との間の相違はこの隣人の解釋に在るのであります。彼等が心にはおのれと同じ種族であり、同じ宗教を奉ずる者である外には彼等の隣人と稱すべきものは一人も無いのであります。故に猶太人は決してサマリヤ人や、異邦人や、

税吏や、罪人を鄰人とは申しません、唯之を外人と稱へて、これらの人に對して親しく交際するとか、憐憫をかけるとかするとはすこしもございせんでした。我主は今の教法師の間に譬喩を以て答へられました。

我主はこの隣といふ説明のために旅人の話をされました。茲に一箇の旅人ありて、エリコよりエルサレムへ向け、人通りの少い寂しき道を歩いて居りました。道途の兩側は絶壁の如き岩石で、又險しく稜立つた曲角が多くありました。或時は崖の下深く下りて、殆んど闇い谷間に入るともあれば、又こんどは高く小山の上へ喘ぎ々登らねばならぬともありして、仲々もつて愉快な旅行ではなく、且つ時々この旅人は足を停めて聞耳引立て、殊に曲角の處に來た時にはいつも用心の眼を見張つて、角の外面に何人も居りはすまいかと氣をつけました。時として崖の上から小さな石でもコロコロと落ちてゝも來やうものなら駭然して上を見あげます、といふのは誰かゞそこに居て足が其石に觸つて落ちたのでは無いかと思つたので、つまりこの旅人は盜賊、お

ひはぎを恐怖してをるのであります。

こゝは赤道と俗にいはるゝ所で、白い岩石の間々に赤き岩の細い、太い層がいくつも横に交つてをると、又生々しい人の血がいつもこの邊に流れてをるので赤道といはるゝのですが、實に此邊には強盜が出没して旅人を殺したり傷けたりして物を奪ひ去る甚だ物騒な處でありました。それでこの旅人も深い用心を爲ながら足早に歩いてをるのでございました。

然るにその用心の甲斐もなく、只在る曲角の處に來ました時にその岩陰から數人の強盜があらはれ出で、かの旅人に飛びかかり、打ちつ斬りつして持物を悉く奪ひ取り、旅人をば半死半生の態にその場に打倒し、赤道をまた赤くしてあと白波と何處へか遁げ去つてしまひました。

旅人がうめき苦んでをるその處へ、エリコよりエルサレムへ上り、殿堂の勤務をしやうといふ一人の祭司が來かかりました。祭司はこの憐れな旅人を見ましたか、

立ち留りてこれを介抱しやうとも致さず、道の一方を拔足して、『あゝ飛んだとた、強盜が出たと見える、それもホンの今の事らしい。大方今頃は行掠だものを近い處で仲間分けをしてをるに相違ない。此方の足音を聞きつけはすまいか。危険い、危険い。急ぐに若かず』と獨言ちながら、唯自分一箇のとのみを考へて、後をも見ず、一直線にいそぎ去りました。

かゝる處へ又一人の旅人が旅装束甲斐々々しくエリコよりエルサレムへ、此も殿堂の勤務のために、通りかゝりました。此男はレビ人で、歌をうたふ役目の者であります。レビ人も此場の有様を一見して大に驚き、山賊強盜の出でたることを知り、手負の如何な態であるかを見んと、傍に立寄りました。手負の旅人は苦痛にうめながらも目をあげてレビ人を見、心のうちに『あゝ、こんどは自分を助けに來た人だらう。あゝありがたい』と思つたのは徒望で、この歌うたふレビ人も好奇にたゞ手負を見ればかりで、また背をこなたへ向け、見過しにして立ち去りました。

之を又喻へて見れば、太平洋で難破した船員が無人島に上つて、日となく夜となく洋上を眺めて救助の船の來るのを待つてをるやうなものであります。一日その一人が『船だ！船だ！』と喜んで叫びました。他の人々一齊にあなたの海上を見ますと立派な船が旗を掲げて此島近くで進んでくるのであります。人々は聲々に船を呼び、棒切に白布か何かつけて打ち振りました。彼方の船長はこの聲を聞き、白布を見つけたらしく、益々此方へ進み寄つて來るやうに見えましたので、人々天にも昇る喜悅をして、雀躍しつゝ待つてをりましたに、如何なる心かその船は忽ち船首を他方へ向けて過ぎ去り、あれよくといふうち早くも水平線下に見えずなりました。彼等の失望落膽は何如でありましたらう。いつそ初めから船など見ざりし方がよかつたでありましたらう。今この半死の旅人がレビ人のわれを見捨て、峠を登りゆく後姿を見た時の感情は丁度この難船した人とのやうであつたとせう。レビ人はかうして見過しにしました。かくて殿堂に往つた祭司は鞠躬如として祈禱禮拜をなし、レビ人は讚美の歌を聲

朗かにうたひませう。彼等の心には神はたゞ殿堂のなかなる種々の事は御覽になつても、殿堂以外、道中に生じた事柄は何も御存知がないと思つてをるのでござりませう。

然るに最後に及んで又一箇の旅人が來合せました。その旅人は神を知らず、教會に参詣せぬといふところから凡てのレビ人からも、祭司からも擯斥されてをるサマリヤ人でありました。この人がうめき苦しみをる手負の旅人を見しますと惻隱の情やみがたく、手負の傍近く寄り、應急の手當として油と酒とをその傷口に沃して繻帶をかけ、抱きかゝへておのれの驢馬の上に乗せ、自身は其側に引添ひて旅邸に連れゆきて寢臺の上に寝かし、其側に坐して一夜看護を爲し、翌朝自分は用事で出立しなければならぬので、旅邸の亭主を呼びて手負の分までの支拂をし、且つ銀二枚を與へて『此人を介抱せよ、費もし増らばわれ返りの時なんぢに償ふべし』といひ置き出て去りました。抑もこのサマリヤ人は此手負にも此土地の者にも謂ゆる外人であります、

さうしてこの手負の知人からも、恐らくは此手負からさへも自分は嫌はれてをるサマ
リヤ人だと知つてをつたのであります。然るにかゝる深切なをいたしました。

此譬喩話をなされたとき主は彼の教法師に向はれ、『さてこの三人のうち誰か強盜に
遇ひしもの、隣なるとなんぢ意ふや』と問はれました。教法師答へて『其人を矜恤に
たる者なり』と申したれば、主は『なんぢもゆきて其如くせよ』と仰せられましたの
で、流石の教法師も主を陥るどころか、却て赤面して引きさがりました。

第八章 放蕩兒

我主が何故に世間から悪まれたまひしか其理由の一は門閥家や、富豪や、また祭司、
會堂の宰といふやうな教役者等が齊しく嫌惡する所の人々に深切を盡される所からで
ありました。パリサイの人又サドカイの人たちは異邦人や、サマリヤ人や、税吏、前
科者をば交際すべきものでないと心得てをるに、我主はかやうな過誤や罪科の人を避

けて交際をせぬのは恰も醫者が病人を避けて治療せぬと同じく、富人や學者に取りて
惡しきとであると思はれました。それで主は自ら進んで彼等と友となり、彼等のため
に何にかの役に立つてつかはされてをられました。さうして幾んど毎日のやうに彼等
と食事を共にせられました。その人たちは是迄一回とても我が家へ世間で尊敬せら
れる人を招待し得たとはなかつたのであります。主は神といふ者はパリサイやサドカ
イの如き局量の極めて小さい者とは異り、學者や祭司などは神について全く間違つ
た思想を持つてをると仰せられました。

嘗て主はこれについて百頭の羊を所有してをる牧羊者が偶ま一頭の羊を見失つたの
で、九十九頭は其まゝ野に置いて、數時間その一頭を搜索するに費し、曠のうち、谷の
なかさまぐに捜した末漸く之を見つけ出して打喜び、之をおのれの肩に掛け、家に
歸りてその友だちや、隣の人々を呼び集めて馳走をしたといふ話をなされ、又お話を
さるに『婦のうち誰か金子十枚をもち、たまく其一枚を紛失せし時燈火を燃して家

を掃除し、之を獲るまでは切に尋ねぬ者ありや。而してその尋ね得た時にはその友とその鄰の人々をよび集めて曰はん、われと共に喜べ、わが失へる金子を獲たればなりと。われ爾曹に告げん、かくの如く一人の罪ある人悔い改めなば神の使の前に喜びあるべし』と仰せられて、又こんどはかの有名な放蕩兒のお話をなさいました。

ある人二人の男の子をもつてをりました。兄は氣立て静かで、勤勉な堅藏であるに弟は之に反して落付かず、家に在つて百姓業するのが厭になり、都會に出で、廣く世間を觀んものと、一日その父に向ひて、おのれ年頃にならば分け與へらるべき財産を今給はりたし、おのれ都會に出で、廣く世の風をも觀、商賣の道をも研究め申すべければと申したれば、子に甘き父親は素より富める人でありましたからその業を適當に分ちて二人の息に與へました。

弟子息はその財を携へて間も無く故郷をあとに遠く都へ上りました。財の有るにまかせて物見遊山やら茶屋小屋に出入し、甘いものを食べ、醇酒を飲みして、心に考へ

るとはたゞ明日は又何して愉快に費さうかといふとばかりでありました。かくて幾月か経ちました。猪くつたむくい、甘い物をたべたむくいは彼に齒痛を與へ、酒のんだむくいは彼に頭痛をのこし、快樂の夢は永くは繼續しませんでした。しかし愚にもこれが凡て何より面白いとあるとよろこんでをりましたが一日その財布をはたき見たるに一錢だに残りを残らず、父より受けたる相應の財はこの數ヶ月のうちに全く煙と消え失せてしまひました。あしき時には又悪しき事が重り來るもので、その年その處は大飢饉でありました。雨といふものは一滴も降りませんでした。穀物は成長し得んで實を結ぶどころではありません。草も成育ち得ません。何も角も成長を中止しました。が、たゞ中止し得ぬのは人々のお腹の食べたい／＼で、これが日に増し烈しくなつて來ました。

財布をはたき盡した彼の青年に取りて他郷の空に饑饉に逢つたほど困つたとはないでありませう。かれはその財を失ふと共にその友をも失ひました。昨日まで金を遣り、

物を與へて自分の取巻にしておいた男も女も今日は皆背をかれに向け、途上で逢へば知らぬ顔して横丁へ避けてしまひます。實は彼等はいかれ青年の友ではなく、彼の持つてをつた財布の友であつたのでございます。尤も彼とても決して彼等の眞の友では無かつたので、たゞ遊蕩の上で彼等が必要であつた爲め、實は自分のために彼等に金や物を與へたので、彼は他のために深切を盡し扶助をしたとはたゞの一度も無かつたのであります。それ故に今日無一物の境遇となつても誰一人かれを助けやうとする者が無かつたのであります。

此際餓死をせぬ一方は勞作に出るばかりであります。しかしそれさへ口を見付けるのが六かしくありました。彼は素より腕に練習の技といふものは一つもありません。美しい衣服を着、軟かい手は有つてをつても、何一つ出来るものゝない無能の勞働者でありました。これは一番難義な仕事をして、一番錢にならぬものであります。しかし饑饉歳の事であるので何の事業も中止の姿なれば左様な手間仕事さへ中々容易には

見付かりません。辛うじて見付けたは豚を牧ふ穢い仕事でありました。それからは毎日毎日晴でも雨でも野に出で、豚を牧ひました。何にいたせ饑饉のと故富有の家でも食物は多分にはありませんから、彼は豚と同じ食物を食はねばならぬ始末でございました。豚の飼料は人間には決して甘いものではありません。考へてごらん下さい、饑饉の眞最中であります、普通の歳でさへ何でも構はぬ豚の飼料は此時何如なものであつたか、定めてひどいものであつたでせう。豚には豆莢が此歳の御馳走でした、かの放蕩兒は豆莢以上の食物を持つてをりませんでした。百姓が樽かバケツかに豆莢を山のやうに入れて来て、それを放蕩兒と豚群の前で土の上に放下きます、すると放蕩兒と豚とは先を争つてそのうちの一番よさうなところを拾ひ食べました。

放蕩兒は故郷の事を思はずにはゐられませんでした。饑しい腹をかへて目を閉り、我家の内外の有様を心に浮べて見ました。まづわが呱呱の産聲をあげた母屋が巍然としてあらはれました。周囲には鬱葱たる樹木が雲をも衝かんばかりに栽ゑてあり、内

には大小の部屋が樓上樓下にいくつもあつて、日頃手なれ見なれた家財道具が整然と置かれてあります。食卓は晚餐のために備へられ、なつかしき父と母と兄たちが各々其席に着て、温く甘さうなものに箸をつけてをります。自分のための一席はそこに設けてはないでせうか。噫嘻わが父の奴僕たちでさへ食ふ物は十分で、他に分け與へらるゝ程あるのに。われは饑ゑて死ぬかも知れぬとは何たる不幸であるのだらう。しかしこれも身から出た錆だ。

青年はもう耐なくなりました。「あゝ家へ歸らう、家へ往つて阿爺に「阿爺、私は天道様と阿爺の罰があたりましてこんな妾になりはて、阿爺の子だと人にもいはれぬ者です。どうか家の傭人待遇にして家に置いて下さいませ」と言つたら矜恤ぶかい阿爺のとだから屹度許るして下さるだらう。あゝ家へ歸るより外に方法はない」と心一決して、袂に豆莢を一杯入れ込んで、豚の柵の入口を閉め、故郷さして立出でました。故郷の父は此日も外に立つて村の往來を見つめてをりました。父は他國へいでゆい

た弟息子のとをひどく案じてをりました。彼より音信が絶えてからもう何ヶ月かになります、その音信もよいとが認めてあつたのではありません。父は往來を眺めながら「あの極道奴もいつかは歸つて来るだらう」と他言してをりました。時に村の道の遙かあなたから此方をさしてのろ／＼と歩いて来る者がありました。永き旅路にやつれ疲れた者の如く、又何處の家の者か、歸り來ても餘り歓迎されさうにも見えぬ様子である。或は浮浪者であらうか、着物は破れて垢つき、見るかげもなき有様なるが、どこやら見慣れた物ごし格形である。父はよく目をとめて見ました。吁それは案じくらしした我が兒でありました。

父は如何いたしましたらうか。「親の面に泥を塗りをつた不届な忤が來居るわい。定めて金銀は費ひ果して、また其上の強請にうせたのだらう。この我が赦罪すと思ひをるか、こゝにうせたら目に物見せて呉れるぞ」と申しましたらうか。或は又「あゝ、あれは忤だ。何としたものだらう？如何したら可からう？赦罪して家へ入れたものか、

それとも叱りつけて入れぬものだらうか」と思ひましたらうか。否、父は直ちに大手を開いて、家へまではまだ少し距離のある其ところまで走りゆき、息子の頸を抱きかへて接吻をしました。息子は道中繰返し念じて来た『阿爺、私は天道様と阿爺の罰があたつてこんな姿に……』をいひ初めました。父はそんな言葉は耳にも入れず、息子を連れて家に来り、僕等と呼んで『コリヤ、一番美しい服を持って来て着せてくれ、指には環をはめてくれ、足には履を穿せてやつてくれ。又一番肥えた犢を屠して料理をしてくれよ。珍客だ、今日は皆飲み食ひして樂まうは』と言ひ付けて、家の族は元より、近所の誰彼も呼び集めて一大饗筵を開き、パンジョーやヴァイオリンなどを掻き鳴して舞踏を始めました。

茲に一人このよろこびの筵に缺けた者がありました、それは長男の兄であります。兄は此日朝から野良に出で、この一大事件がおこつたのを知らずにをりました。はや夕景にもなつたので、鍬を肩に家の門近く來かゝりますと、内には大勢の話す聲、笑

ふ聲がする、鳴物の音がする、踊り舞ふ響きがある、さうして村の若い男や女がみんな我家に来て面白く騒ぎ、はしやいでをる様子なるに、此は何事が生じたのかと大に驚きました。我家に何か喜びごとがあるに相違ないに、おのれ一人招れぬといふ道理は無いが、これは變な事だと思ひました。そこで兄は奴僕の一人を窃と呼んで、家では何事があるのだと問きますと又更に驚きました。僕がいふには『若旦那の弟、兄が歸りやんしたで、大旦那が弟、兄さんの丈夫で息災で戻られたを悦ばれて、肥えた犢を打殺めて先程から御馳走でござす』。兄は之を聞いて驚くばかりか、大に怒りました。家の内へは入りません、『弟の野郎は愚呆者のみか極道者だ。それが歸つて來れば阿爺は引入れて、あんな騒ぎをしてまで喜ばれる。本來は夕食どころか引敵いて呉れねばならぬものを』とひとり心に思つてつぶやいてをりました。

兄の歸宅したを聞いた父は客や舞踏をあとに外面に出で来て、不平満面の兄をなだめました。兄がいふには『阿爺もあんまりではありませんか。この幾年私は家に辛棒

をして、阿爺の仕事にも私の仕事にも精を出し、朝は早くから晩は遅くまで野良で働いて、何一つ阿爺に逆つたとはありません。それでも私のために只の一度も饗筵などして下さつたとはなく、友達を招んで夕食を饗するに羔一匹殺して下さいませんではありませんか。それが何といふとせう、遊興や深酒に切角阿爺が分けて遣れた金の有りたけを費ひはたして舞ひ戻つた極道者にはこんな騒ぎまでしておやんなさる。父は穩かに之を制し『あ、忤、お前は常にこの我と共に住ひ、わが所有は皆お前の屬だ。今お前の弟は死にて復た生き、うしなひて復た得たやうなものだ。それだから我が人を招き、喜んで樂しむのは當然のとはないか』と申しました。

我主の此お話は異邦人や、サマリヤ人や、税吏、前科者などを放蕩兒に喩へ、バリサイヤ、サドカイの人々を惣領の兄に喩へ、神を矜恤深く、愛に満ち、罪過を赦した父にたとへられたのでございます。

第九章 富める人と乞丐

我主の弟子のうち多分は貧しき人々でありました。富みたる人は主の殊に喜びたまふを却て甚だ喜ばぬものでありました。富みたる人はその家業と快樂とにのみ熱心にして、何如して金銀を儲け、何如して金銀を費はるかと思はればかりに腐心してをり、且つ現在の社會生活に全く満足して、其美しく快き家庭に面白く可笑しく起臥して、家庭や社會の變化、變動を恐怖してをりました。又富める人が何故我主と行動を共にせぬかといふ理由に猶一つ別のとがありました。彼等がその現在の生活に餘念なく、満足してをるばかりでなく、その上に彼等が自利自私であることが我主と氷炭あひ容れざるに至らしむるのでございました。我主は總ての人にその餘りある所有を他のこれ無き人々に頒ち與ふべき筈であると教へられ、若し人二つの外套を有ちをらば宜しくその一を隣人の外套もたぬ者に與ふべしと仰せられました。しかし世間の外套二

着持つてをる人はそんなとを好みません、二十着の外套を持つてをる人は却て大に憤りませう。

しかし我主なればとて富める人にかやうな寛い心を容易く持たせるといふとは六ヶ敷くありました。一日一人の若き人が主の弟子の一人たらんと希望して参りましたが、此人は大なる財産を所有してをる者でありました。此富める青年が我主の許に來たのを見た人たちは丁度今日百萬圓の身代ある人が救世軍に投じ來たのを見た如くに打驚きました。この青年非常の熱心を以て主の許に参り、主の前に跪いて、『善師よ、われかぎりなき生命を得んためには何の善事を行すべきか』と申しました。さきに教法師もこれと同じ質問をいたしました。この富める青年は教法師とは全く違つた精神でこの質問をしたのであります。青年は深き熱心をもつてをりました。主は『誠はなんちが識れるところなり、殺す勿れ、姦淫する勿れ、盜むなかれ、偽の證を立つるなかれ、爾の父と母を敬へ、またおのれの如く爾の隣を愛すべし。かくてかぎりなき生

命に入るとを得べし』とお答へになりますと、かの青年は『然り、是れ皆わがいとけなきより守れるものなり』と申しました。この青年は富めると共に善良な性質のものでありましたから、かやうに答へたのであります。主はおん目をあげてこの若き人の青春の銳氣みち溢れ、體力の強壯なるを御覽になりて坐に棄て難き念想をせられました。青年が『これ皆わが守り來りしもの、何の虧けたるところ我に在るや』と申しましたので、我主は『なんぢなほ一事を虧けり、性きて爾の所有を賣りて貧者に施せ、さすれば天に於て財あらん。而して來り、我に従へ』と仰せられました。これは富める人には難題であります。我主はかやうのとを他の富める人たちに申されたとはありません。然るに今之をこの青年に仰せられたは此一事がこの青年に尤も必要なのであるたからであります。此青年はこれまで決して悪しき事は行さなかつたのですが、また善き事も決して爲さなかつたのであります。二十年來眞直にこの世を渡つて來ましたが、それはたゞ自利自私の半生涯で、愛隣公益の事に關しては未だ嘗て一指も染め

なかつたのであります。彼が光明なる生活に嚮ふ轉捩の一方は擧げて之を破り、之を棄て、以て全く前と異つた生活の方法態度に出なければならぬのであります。青年は言葉なく、静かに立ちあがり、さも失望した面色で、踵をめぐらして立ち去りました。主のこのおさとしは青年に取りて餘りに重く感じたからであります。

我主が『財を恃むもの、神の國に入るは如何に難いかな！富めるもの、神の國に入るよりは駱駝の針の孔を穿るは却て易しと』仰せられたる正に此時の事でございます。何も富むことが悪いといふわけではなく、又神は富める者よりも貧しきものをお好みになるといふわけでもなく、たゞ富める者はそれで満足をし、自利自私になりやすいからであります。ある時主は富める人と、その死後のとについて一のお話をなさいました。

さる處に富める人と貧しき人とがありました。富める人は輪奐たる立派な家に住み、紫の袍や細布の衣を美々しく着飾り、奴婢が入りかはり立ちかはりして之に事へ、

朝餉、晝食、晚餐乃至點心に山海の珍味、遠近の佳肴數を盡して金銀の器皿、夜光の盃に滿ち盛られて日々奢り樂しんでをりました。然るに貧しき者はこの富める人の門側に置かれ、他の救助を待つ身でありました。

此人の貧しく、乞丐とまでなり下つたは敢て此人の過失ではありませんでした。おのれが懶惰ゆゑに貧しくなり、乞丐となる者は多くありますが、此人のは病氣のためにかくなつたのであります。彼の身體は一面に腫物が出来て、何一つ働くとが出来なくなりしました。一週間経ち、二週間たち、一月たち、三月経ちました。腫物は一向よくなりません。彼の友達も何とかしてやらねばならぬと思つたのでした。友達も亦貧しくて彼の面倒を見るとが出来なかつたのか、それとも世話をしきれなくなつたのか、ある夜ひそかに彼等は此貧しき男を昇ぎ來て此都會で一番富者の彼の人の門前に寝かし置きました。彼等はかうもしたら彼の富める人が何とか世話をし、食物を與へて呉れるだらうと想つたのでございました。

然るに富める此家の主人はこの憫れなる貧者に對して餘りに冷淡無情でありました。貧しき者は病のために力も萎えはて、身近く寄り来る犬をさへ逐ふとがかなひませんでした。野良犬どもは唸りつ、吠えつして来て、鼻をこの男の顔面につきつけて腫物の膿を舐めました。通りがりの誰彼が錢を彼の手に載せてゆくのもありましたが、彼の要するものは錢財ではなくて、醫者でありました、病院に入れてもらいたいのでありました。立派な馬車が門前に停るとも度々ありまして、内から盛装した貴婦人などが出ましても、此貧しき病者を殆ど身振だにするものなく、却てその上衣の風にあざむき病者に觸れては大變と手を以て上衣をもち、顔を繋め門内深く入つてしまひます。時には彼等が晝餐の席に着き、音楽者が妙技を揮つて饗筵を助けるそのなかに金の盃を擧げ、銀の匙を動かすのを臆ごしに彼が見るともあつて、その案から落つる屑でも得てわがすき腹をみたしたいと思ふともありました。

こゝに一箇晩かれ早かれ如何なる人の所へも尋ねではおかぬ訪問客がありて、無遠

慮にも門といふ門より闖入し、戸といふ戸を亂敲し、如何に富める人であらうが、如何に貧しきものであらうが必ず手を取り引立て、いづれへか招きゆきます。この訪問客は死であります。即ち死なるものは富める人にも乞丐にもその来るべき時に必ず來ります。かの貧しき乞丐は富める人よりもさきにこの訪問客の死に見舞はれて死にました。ところが天の使たちが迎へにまゐり、これまでの饑餓と苦痛とから救ひ出された。幸福の充ち満ちたる天上の樂園へ連れゆかれました。この樂園に大宴會がありました。かの信仰の父といはれましたアブラハムが食卓の上座に着き、さうして今死んで來た乞丐の貧しきものを招き寄せて名譽の一席をかれに與へ、アブラハムの右側に坐らせました。坐るといふよりも寝をべらせました。これは當時猶太人の風習でありまして、彼等は食卓の前で椅子のかはりに臥榻を据え、人々は左の腕を下に、身を倚らせ、横になりたるまゝで食事をするのでありました。かの乞丐はアブラハムの次席に身を横たへました、之を形容してアブラハムの懷におかるといひます。

かの富翁も其のち間も無く死くなりて、葬られました。立派な葬式で、親戚知人乃至泣男泣女の長い、葬列に送られ、會堂の宰はその説教に彼を褒めちぎり、世間の人々は彼がどんなにか歎き悲しまれるであらうと噂し、彼が生前招待してくれた立派な晩餐の御馳走のと、彼がその金銀を以て養ひ得た性行などについていろいろと良き追悼の談などをいたし、何人も彼が死後天に迎へ取らるべきとにつきて疑を挟むものはありませんでした。或人は彼が生前飲食に贅澤の限りを盡したのですからアラハムの食卓に列してそれに満足をしやうなどは思ひもせず、却て彼が地上に於て綺羅を飾りて飲食に日夜を送りし如く、天上に在つても同じ上流の人々と派手な交際をして面白く、愉快に日を送ると誰一人信せぬものはありませんでした。然るに此は飛んだ謬見でした。かの富翁が死の眠りより目を覺してあたりを見ましたれば、こは如何に、彼は地獄の真中に横たへ置かれ、身のまはりには焦熱大焦熱のほのほが焰々と立ちのぼりゐて、その苦しさは耐へがたく、昨日まではその豪貴に誇つた者も

今日は見るかげもなき極貧者となつてをりました。彼がすべての金銀は住み來し都會の銀行には預け蓄へましたが、天上には唯一の錢も蓄へ置きませんでした。かれ今非常の苦痛のうちに在ります。殊に耐へがたく苦しさはその咽喉の渴きであつて、一滴の水とても其處にはございせん。然るに前なる深き谷を隔て、彼方には如何にも涼しく、樹蔭深く、樂しさうな場所がありました、自然の煽風機は常に風を送り、甘く冽き清水の河は美しい山より落ち來て、四時の花咲き匂ふ野邊を流れてをります。さうしてそこにはアラハムが多勢の聖徒たちと晝食の卓に着き、彼に隣りて彼と愛子イサクとの中間に、ヤコブやヨセフを卓の前にして、驚くべし、此間まで我家の門側に寝てをつた乞丐が端然と座を占めてをるではありませんか。

この富翁はかの貧しき乞丐をおのが門前より逐ひ拂ふやうなとは一度もしませんでしたのみならず、時には小錢の一つ二つ與へたともあり、奴僕に命じて些の食物を遣つたりしました。又曾て一度彼と言葉を交へ彼は名をラザロと呼べる者なるとも承

知してをりました。そこで此富翁は聲を揚げて『父アブラハムよ、我を憐み、ラザロを遣はして其指の尖を水に蘸し、我が舌を涼さしめ給へ。われこの火燄の中に苦しめばなり』と喊叫びました。これは敢て過分なたのみではありません。よしやこの富める翁は四圍の境遇が全く變化してをるとをまだ十分知り了らぬにもせよ、今は自分は乞丐なり、ラザロは却てアブラハムの食卓に於ける貴賓でありますから、此位の合力はまづ何でもないであります。然るにアブラハムは之に答へて『子よ、爾は生きたりし時に爾の福を受け、またラザロはその苦を受けしを憶へ。今かれは慰められ、なんぢは苦しめらるゝなり。これのみならず此よりなんぢらに涉らんとするとも得ず、彼より我儕に涉らんとするとも亦得ざるために我儕と爾曹との間に限めおかれたる巨なる淵あり』と申しました。

神の審判は人の審判とは大にその趣を異にしてをるもので、主イエスはそれをこゝで教へられたのであります。世間ではあの人豪貴な金満家だと見ましても、神のおん目には現在の財産は永久も身についてをる者ではなく、死ぬる時携へゆくとの出来ぬものなれば財産を離れて赤裸々となればまことに貧しく、目もあてられぬ有様の者でございます。然るに主の弟子たちの如き種類の貧乏者は金銀財産に於てこそ虧けたれ、別種の最善の財寶に富んでをりますから、天に在つては主なる市民の一人として數へらるゝ人々であります。我主の教に従へば上流の社會といふは衣服や、銀行の帳簿や、門閥や、態度によつて區別せらるゝものでなく、たゞ單純無垢の善良なる性質云爲によりて定めらるゝものでございます。

さてかの富翁はおのれの五人の同胞のことを憶ひ出しました。元來この富翁はおのれより劣れる業の人には金錢上其他の深切などは致しませんでした。自分の遊び仲間、殊にはわが家族の者には中々よく氣をつけてやつたものでした。今の場合となり、おのれは反省して兄弟たちの上が氣遣はしくなり、又アブラハムに向ひて『さらば父よ、願くは我が父の家へラザロを遣りたまへ、蓋われに五人の兄弟あり、亦彼

等が此苦みの所に來らざるためにラザロを證據になさしめよ』と叫びました。彼はその五人の兄弟が此世の快樂の事より外は何も考へず、來世に於て我と同じこの苦痛を受くる準備を爲しつゝあるかの如く、日々その美麗を極めし食堂に山海の珍味を味ひつゝありと想像し、ラザロを墓より呼びおこし、天よりの使者として此音信を齎らしゆかしめば彼等五人のものは大恐怖に今迄の夢も覺め、ラザロの言ふ所に耳傾けて之を聞き、その生活の状態を一變させ、その富を貧しき賤しきものどもに分け與へなどして陰徳を積むに至るだらうと考へたのでありました。然るにアブラハムは冷淡之に答へて『彼等にはモーセと豫言者あれば之に聽くべし』と申しました。今の世ならば『彼等にはその家近く教會あるべし、教師は毎安息日に禮拜を爲し、聖書を讀み、説教を爲さん。教會の教師は天よりの使命を齎し、凡て彼等の財を地に積み蓄へざるやう警告しつゝあり』と申したのでせう。富める人答へて『然らず、父アブラハムよ、若し死より彼等に往くものあらば悔改むべし』と申すと、アブラハムは『若しモーセ

と豫言者に聽かず、教會にて説くところ、聖書に書けるところに心を用ゆるとなくば、縦ひ死より甦る者ありともその勧めを受けざるべし』と答へて彼が切なるたのみを斥けました。

第十章 ラザロの墓にて

前章の話の乞巧のラザロとは別人にて、同じくラザロといふ主イエスの親しき一箇の友がありました。此人のとは前にも一寸述べましたが、エルサレムに近きベタニヤといふ一小都會に住る、富有の家柄で二人の、妹のマリヤ、マルタと何不足なく樂しく暮らしてをりました。此家の富有なるとは嘗てマリヤが特に主に譽を歸せんと思ひ、また如何程自分が主を尊敬し、主を愛好しをるかを示めさんとて、主が食事の席に着きたまひし時、極めて貴重なる香膏を臘石の盒に入れて持ち來り、主の前にてその盒を毀ちて主の頭に膏を沃ぎたりしに、同じく席に在りたる使徒たちこの盒と膏と

は少くとも三百圓の價はあるべきにと互にさゝやきしとあるにても知られます。

我主はこのマリヤ、マルタ、ラザロをお愛しなされて、いつもエルサレムに往かれた時には此家に宿泊せられたかのやうに思はれます。主が始めて此家を訪はれた時には彼等が大層喜びまして、いろいろ驪迎の支度を爲し、大晚餐會を催しました。しかるに主は之を左程にお喜びになりませんでした。ある時のこと姉のマルタは何かして主のお氣に入るやうな御馳走をせんものと、彼もこしらへ、此も調べんと庖厨と食堂の間を何遍となく往來して忙がしく立ち働いてをりましたのに、妹のマリヤは獨り主の足下に靜かに坐して、主のお話を熱心に聽いてをりました。マルタは心中不平でありましたが、遂に主の許に來りてマリヤが姉のおのれ一人を働かせて、自分は大お話を承つてをる、どうか主から仰有て私を助けてくれるやうに願ひますと申し上げた時、主は之に答へて『マルタよ、マルタよ、なんぢ多端により思ひ慮ひて心勞せり。されど無くて叶ふまじきものは一なり。マリヤは既に善業を選びたり、此は彼

より奪るべからざるものなり』と仰せられました。言ふ心は主は飲食よりも説話のみに重きを置かるゝといふとであります。これよりのちは彼等三人も能く主のお心の程を知りまして、別段の饗應はせず、わが家族の一人として簡易に且つ深切に主を待遇いたしました。それゆゑ主もこのラザロの家をわが家の如くに極めて心易く出入なさいましたのでございます。

然るに主がペリヤ地方に在つて善きサマリヤ人の話や、放蕩兒、富める人と乞丐の話などをして人々を教へてをられました時にこのラザロが圖らずも病氣に罹りました。姉妹たちは直ちに使の者を主の許へ遣はし、兄が病氣に罹り、其容態の輕からざるよしを申送りしました。その使者主のもとに來り、教へられた通りに『主の愛する者病めり』と申しました。直にも出立せらるゝであらうと人が思つた主は御出立をなさらずに、猶二日同じ所に滞留されました。姉と妹は首を鶴べて主の御入來を待つてをります、弟子たちは主のお心を計りかねて唯不審に思つてをります。彼等は皆主がラザ

ロを愛してをらるゝとを知つてをり、さうして其ラザロは病日々に重りゆきつゝあるよしも知つてをります。然るに主は空しく滞在してをられます。心配せる姉妹からの音信はあたかも大困難の場合にある人々が神に熱誠をこめて祈る祈禱の如くあります。が、神はそれに應驗を示めしたまはぬやうに見ゆるその如く、主は平然として出立の模様がございます。

さて二日を経たるのち主は弟子たちに向はれ、『われらまたユダヤに往くべし』と仰せ出されました。弟子たちは驚いて『師よ、ユダヤ人は近來も石をもて爾を撃んとせしに復たかしこに往きたまふか』と問ひました。これは主が近くエルサレムに赴かれ、冬の修殿節に列せられました時辛うじてユダヤ人の毒手より逃がれたまひし事があつたから、かやうに氣遣ひてお聞き申したのであります。二日以前ベタニヤから使者の参りました時主は御出立にならなかつた、物に恐怖をなさらぬ主だとは兼てより知つてをる弟子たちでありますから何故の御滞留かと内々異んでをりましたるに、今主

が御出立の決心をなされたので、彼等は往く先の危険なるに心配を致しました。主は『われに爲すべきの務あり。われらの友ラザロ寝ねたり。我かれを醒さんために往くべし』と仰せられますと、弟子たちは主のお言葉の眞意を曉り得ませんから、『主よ、かれもし寝ねたらば愈ん』と申しました。主はラザロの死しとを寝ねたりと申されましたのを弟子たちは寝ねて臥めるとなりと想つてかやうに申しましたから主はこゝどは明かに彼等に告げて『ラザロは死ねり。爾曹をして信せしむるためにわれかしこに在らざりしを喜ぶ。されどいま彼處に往くべし』と仰せられました。弟子たちは之を承つて非常に落膽いたしましたが、弟子の一人トマスは慨然として他の弟子たちに向ひまして、『われらも亦往きて主と偕に死ぬべし』と申し、主に従ひ、ベタニヤとして出立をいたしました。

我主イエスの仰せられた通りラザロは死くなりました。國の風習に従ひまして死くなつたその日のうちに葬りまして、主がベタニヤにお着になりました時は既に四日

を經過してをりました。主が都會近くおいでになりました時、誰かが此事を主に御報知せ申すと同時に又ラザロの家に走りゆきて、マルタに主がいよいよおいでになつたといふとを報せるものがありました。ラザロの家には吊問の人々が一ぱいにつめかけてをり、忌中の時の風習で、倚子も卓もみんな取片付けられて大混雜のなかでありました。報知に來た人はマルタが彼此と忙はしく立ち働いてをるのに出合ひて主のとを話しましたが、此時マリヤはひとりわが部屋に閉ぢ籠り、戸をかたく鎖めて愁傷に沈んでをりました。それ故に此報に接するや否やマルタは飛んで出で、主に面會をいたしましたが、マリヤは之を知らず、猶部屋のなかに垂れこめてをりました。アルタは主のお顔を見るや、涙を流して『主よ、なんぢ此に在せしならば我が兄弟は死なざりしものを。さりながらたとひ今にても爾が神に求むるところのものは神なんぢに賜ふと知る』と申上げると、主は事もなげに『なんぢの兄弟は甦へるべし』と仰せられましたので、マルタは『しかり、我も彼が甦へらんとを知れり——末日の甦へるべき

時には』と後の後の復活のことと取違へてお答しましたから、『否とよ、マルタ、我は復生なり、生命なり、我を信するものは死ぬるとも生くべし。凡て生きて我を信する者は永遠も死ぬるとなし。爾これ信するや』と主は申されました。が、マルタには此おことばは諒解りかねました。現今教會にて葬式の初めに朗讀せらる、聖書の話を遺族の人々が涙を流しながら聽問してをるやうに、マルタも主のお言葉をヂツト聽いてをりましたが、『主よ、しかり、我れなんぢは世に臨るべきキリスト、神の子なりと信す』とお答へ申しました。ベタニヤの主の親しき此同胞たちも十二使徒と同じやうに臙氣ながらも、イエスは榮光の主であるといふとを知つてをりましたのでございませす。

此時主はマルタの妹マリヤがマルタと偕ならざるを訝り、『マリヤは何處に在りや』と問はれました。マリヤは？と問かれてマルタは主を其處に、一寸會釋して我家に馳せ還り、潜に妹マリヤをよび、『師きたりてなんぢを呼びたまへり』とて主がまだ都

會の外に在すとを知らせました。マリヤは姉のこの言葉を聞くや否や、走り出で、主の許へと急ぎました。吊問の人々はマリヤが忙はしく出でゆきますのを見て、マリヤは兄の墓へ往きて哭くのであらうと皆々そのあとに尾いていでゆきました。マリヤはイエスのお立ちなされてをる所に走りつき、イエスを見て身をその足下に投げ伏せ、聲も涙に曇りながら、『主よ、なんぢ若しこゝに在せしならば我が兄弟は死なざりしもの』と姉とおなじやうにかう申上げました。實際この四日のあひだマルタもマリヤもこのことばを幾たびとなく繰りかへしてをつたのでございました。マリヤはイエスの足下に伏して泣いてをります、後に尾いて來ました友だちも亦皆泣いてをります。これを御覽になります主は今にこの涙を笑に代へて遣はすものをお召されても現在の愁傷に御自身も引入られて深き悲哀に満されたまひました。イエスの悲哀は彼等を助け得んがためであります。彼等には信仰が無くては叶ひません。主には同情が無くてはなりません。主は心を働めしめ、身は打ふるひて、『なんぢら何處に彼を置きし

や』と問はれました。人々『主よ、來りて觀たまへ』とて前に立ち、泣きながら案内をいたします、そのうしろには主イエスも亦涙を流されながら尾いておいでになりました。此様を見た人々は『見よ、如何ばかり彼を愛するものぞ』と流石に感歎して申します、その中にはまた『瞽者の目を啓きたる此人にして彼を死なざらしむること能はざりしや』などといふものもございました。

此有様を御覽になりましてイエスは又も心を働められながら墓所へおいでになりました。墓所は岩石に穿ちたる洞にて、その口の所に石を置いてありました。主は人々を顧み、『石を去けよ』と仰せられました。マルタは遠慮のない、思つたとはサツサと言つてのける人でしたから今この主のおことばを聞きまして、『主よ、彼は早臭し、死にてより已に四日を経たり』と申しました。主は儼然として『なんぢ若し信ぜば神の榮を見るべしと我れなんぢに言ひしに非ずや』とマルタに仰せられましたその態度に動かされて、傍にをりました人々はその石を墓壙の口から移去けました。

かくて主は墓壙の口の前に立ち、天を仰いで祈られました、『父よ、已に我に聴けり、われ之を爾に謝す。われなんぢが恆に我に聴くことを知る、しかるにわがかくいふは傍に立てる人をして爾の我を遣はし、ことを信せしめんとなり。』祈り畢りてのち今度は墓壙に向ひ、大勢にて『ラザロよ、出でよ』と呼はりたまへば、死にしと思ひしラザロは忽ちに起ちあがり、布にて手足を縛かれ、面は手布にて裹まれたるまゝで墓壙の外へ出てまゐりました。此處に居りましたラザロの二人の妹、使徒等およびベタニヤの人々この有様を目撃して、駭然としておどろき、呆然として口を開くものさへありませんでした。主は彼等に『疾く彼を釋きて行かしめよ』と仰せられましたので、マルタ姉妹を初め人々漸く吾にかへり、いそぎ縛きたる布を釋きすて、人々保護介抱しつゝ、自宅へ引返へしました。

これは實に不思議な事であり、然るに此不思議などにも劣らぬ又一の不思議なことが出来いたしました。それは此場に居合はせた者のうちに驚喜の心を以てこの事實を迎ふるかはりに恐怖と憤怒の情を起した者がありました。其人たちは今日のあたり知人が死より甦りたるを見て、忽ち心に生じたる思想はナザレの豫言者は一層多くの弟子を得るに至るであらうといふとでありました。此國の主なる人々が惡みきらふこの豫言者は以前に増して勢力ある者となるであります。此は由々しき大事であるとその足ですぐにエルサレムに上り、一伍一什をパリサイ派の人々に語りました。パリサイの人はサドカイの人に語り、サドカイとパリサイ二派の人々は打寄りて會議を開き、『われら如何にすべきや』この人多くの奇跡を行すなり。若しかれを此のまゝに棄て置かば人皆かれを信せん。さらば羅馬の人來りて我儕の地をも民をも奪ふべし』と飛んだ心配をいたしました。其時カヤバとてこの歳の祭司の長なる者がしたり顔して人々に向ひ、『爾曹民のために一人死にて舉國滅びざるは我儕の益たるを思はざるなり』と申しましたので衆議一決し、此日よりして主を殺すについていろ／＼と相談し、その機會を待つてをりました。我主が富翁と乞食の話のうちに申された聖書の

うちにも、日々の生活のうちにも神の御聲を聞かぬ所の者はたとひ死より甦りて彼等に警告する者ありとも、かれらその勸を受けざるべしとお言葉が現實になつたわけでございます。

さて主イエスは一たび死にし者を生命に甦らせたまひました。これによつて多くの人々が主を信ずるに至りましたが、又祭司や學者たちは主を殺さうと欲ふやうになりました。祭司とか學者とか教會の人々とかいふ者どもは自分の利益に關するとかかり考へてをりまして、その神にさぐる祈禱さへ自利自利のとはかりでありました。彼等はナザレの豫言者が一旦勢力を得るに至らば必ずわれらを逐ひ放つとであらう。彼の遣口は我儕の遣口と違ひ、彼の思想は我儕の思想と氷炭相ひ容れぬ。われらは彼の息の根を止めて、さうして彼の勢力を止めてしまはねばならぬと申しました。彼等は以前には内々かやうなどを申合つたのでしたが、今は公々然と大聲して之を叫ぶに至りました。

ラザロは甦り、病も癒えました。かの四日間死してをる間に何を聞き、何を見ましたかラザロは之を語りませんでした。之を語りましたにしても吾人はそれが如何なとでありましたか知りませぬ。ロバート、ブrouningは嘗て一の詩を作りまして、アラビヤの醫者がラザロを訪れたとにして、自己の思想を詠じました。その醫者がラザロを訪れたのは墓より甦り出でたのちや、久しく経つた頃でありました。醫者は彼が甦生について問ひ尋ね、さうしてラザロからその一場の物語を聞きました。醫者が云ひますのはラザロといふ人は醫者が此迄出合ふた人のうちの最も單純無垢の男でありまして、凡そ最も多くの人をよろこばせたり、困らせたりすると、たとへは侵入軍の進行の如きはラザロの注意を喚ばしむるに足らぬものであります。然るに遊戯中の小兒が極めて小さい悪言悪行でもいたせばそれは、大へんの恐怖かたで、わが小兒が熱病に罹つた徴候を示したのを見たよりも一層も二層も驚き怖れます。或人が何です、其程のとをと申せば、彼は喫驚してその人を仰ぎ見、其人を譬へば何人か火薬

の桶の上に、燃えてをる一本のマッチをかざして、なに、これは小さな火ですよと言つて平然たるが如き人だと思ふやうな人でありましたと。

恐くは我儕も他界に四日間も費したならば其時は斯様な工合に物の判断を爲すことが出来ますとでありませう。

第十一章 エルサレムへの途にて

ラザロの復活は爲めに非常なる人心の激動を起して、主イエスをして何處にか危難を避けしめねばならぬやうにさせました。主はパリサイとサドカイの人々が主を殺さんと評議一決したるをお知りになりました。しかしまだ主の時は到来いたしませぬ。それゆゑにエフライムとユダヤの北部連山の中に在つて岩石多き曠野の境なる地に使徒等と偕に一時退居せられ、こゝにて主御自分なり、十二使徒なりを訓練し修養せられて最後のエルサレム行をお待ちになつてをられました。

既にして冬も過ぎ、春が来りました。樹々の梢は緑の若葉色濃く紅く白く百千の草花は小河の縁に咲き亂れてをります、やがて逾越の節の時となります、主は此節をお待ちなさつたのでございました。この逾越節にはエルサレムは諸國より上る人を以て充ち満ちますので、ユダヤからも、ガリラヤからも、ペリヤからも、主イエスが有り難き説教を爲され、不思議の業を行はれました各邑々村々から凡そ來られる限りの猶太人は皆參集するのであります。即ち其日、其處にイスラエル民族が各地方より參集し、其時、其處に時至りて榮光の主たる王が出現せらるゝのであります。榮光の主たる王はその建設せんと宣言せられたる王國は如何なる種類のものなるかを明白にし、王自身をその人民に示めして、人民が之を驩迎するか、拒絶するかを見んとせらるゝのでございます。

主は能くその成行を先見豫知してをられました。主は嘗て之について一の話を作りました。或人葡萄園を作り、籬を環らし、酒搾をほり、塔をたて、農夫に租與て

久しく他國に往きをりしが、期が來ましたので、その葡萄園の果を收取らんために僕を農夫の所へ遣したるに、農夫等は之を執へて打撲きて、徒しく返らせました。また他の僕を彼等へ遣はしましたところが、農夫等は之を石にてうち、首に傷つけ、辱めて、これも徒しく返らせました。三次僕を遣はし督促をさせましたるに、こんどは之を殺してしまひました。葡萄園の主はこれは如何に爲したらばよろしからうか、わが子ならば恭敬ふであらう。この我が一人の愛子を遣はさうと遂に其愛子を遣はしたるに、農夫等たがひに謂ふやう、此子は主の世嗣である、これを殺したならば自然この産業はわれらの物となるからと、乃ち主の子を執へて之を殺し、葡萄園の外に棄てました。この話の葡萄園の主は神のとて、農夫等は猶太人、僕といふは神より使命を帯びて世に出で、さうして猶太人のために石で打たれました豫言者たち、子は即ち神の子イエス自身を指されましたので、イエスは惡しき農夫等がその主の子を執へて殺したやうに猶太人が御自分を執へ且つ殺すに至るべきとを知つてをられましたのでござります。

いよく其日が參りました、我主はその最後の旅行に出で立たれました。斷乎たる決心は主のお顔を眞直にエルサレムの方へ向けさせ、最先に打立たれ、十二人の使徒は後につゞきて歩を進めました。使徒等は主の此有様を視て大に驚歎いたしました。主が前に立たれて進み給ふ御様子はさながら大勝利を期して戰場へ向ふ英雄の如くにて、使徒等は未だ嘗て主の此の如き凛々たる御様子を見たとはありませんでした。

『どうだ、あの様子は？ 死にゆくといはるゝが、死にゆく人の足態や、身の態ではないではないか』と彼等はうしろに在つて互に噂をしましたが、彼等も亦心を取直し、エルサレムに往けば十字架などは滅相もない、王冠は主のために備へあり、我儕十二人もそれ／＼立派な大臣になれるに違ひないと大に勇氣を起しましたが、主は常の如くしば／＼後を振り顧みられて、嘗て彼等が主を榮光の主なりと認められた時お話になつたとを繰返しお話しになつて、『さて愈々時節到來してわれらは今エルサレムに上る、

人の子について豫言者が嘗て記し置きたるとは此度みな應げらるゝに至るべし。己れ人の子は異邦人に解され、戲弄られ、凌辱られ、唾せらるゝのみならず、彼等われを鞭撲ちて殺さん。さりながら三日目には我れ甦るべし』と仰せられました。彼等使徒には此時になつてもまだその事を諒解し得ませんでした。

三年も主に親炙してをる使徒等がまだ主イエスの使命を諒解し得ざりしとは、使徒たちの二人ヤコブとヨハネは此道中にて不思議な要求を申出したことによつても分ります。此二人の母は此一行のうちにありました、又マグダラのマリヤといふ嘗て主が其人より七箇の鬼を逐出して病を愈して遣はされた女も、其他に幾人かの善良な婦人たちも此時主のお伴して、主をはじり十二使徒の衣食其他の御用を辨じてをりました。かの二人の兄弟は恐くは他の弟子たちと一列に在るとを耻ぢたものか、みづから主に申出すはさすがに面伏せな所から、母の口よりして主が王國をいよゝ建設し給ひたらば兄弟には高い地位を授け、一人は主の右に、一人は左に坐らせ下さるやうにとお

願をいたしました。此母子三人も猶榮光の主なるイエスはエルサレムに君臨し、朝廷もあれば宮殿もあり、黄金の椅子に坐し給ふであらう、其時自分ら二人も亦黄金の椅子にかゝりたいものだと思つたのでありました。此願を傍で聞いてをりました十人の使徒は尠らず不快に感じました。彼等も亦心中には新に王國が建設されたならば我こそ一番の高位を占むべきにと内々考へてをつたのでございました。主は二人をはじめ人々を前にお呼びになり、人に優るといふとの眞の意義をお諭しになりました。『誰にても爾曹のうち大ならんと欲ふ者は爾曹に役るゝものとなるべし。またなんぢらのうち首たらんと欲ふものは爾曹の僕となるべし。此の如く人の子の來るも人を役ふためにあらず、反て人に役はれ、又おほくの人の代りて生命を與へその贖とならんためなり』と仰せられ、大なるといふとは多くの奴婢を有つといふとは無く、其人みづから多くの人の僕となるのであると教へられました。

又この道中に於ける一日の母親たちが孩提を携れ來て、主に手を按けて祝したま

ふやら願ひましたるに弟子たちは之を阻み責めました。主は之を御覧になり、怒を含まれて、『その孩提を我に來らせよ、彼等を禁むるなかれ。神の國に居るものは斯の如き者なり。誠にわれ爾曹に告げん、凡そ孩提の如くに神の國を承けざるものは之に入ることを得ざるなり』と仰せられ、母の手より孩提を抱き取り、手をその上に按せて祝されました。實に孩提はバリサイやサドカイの人々が亡くした所の單純にして自然、愛々しく、誠實の偽善なき精神を有つてをる可愛きものでござりまする。

また一日主の一行がある村を通過らるゝ時十人の癩病に罹つてをる者にお出合ひなさいました。この癩病は實に怖ろしく、人に嫌はるゝ病でありまして、初めは皮膚に一の小さい腫物が出來、それが次第に擴がり、肉を腐らし、骨を腐らし、死よりも猶辛い病となるのであります。罪惡といふものは恰も此病のやうなもので、初めは極些細な悪い所業や思想からおこり、之を早くに抑へ停めぬときは次第次第に增長して、はては靈魂にも身體にも怖ろしき病となるものだと言間の人は申しました。又この病

は罪惡の標號であり、また傳染するものであるところから癩病患者は普通人民より離隔されて生活をいたしました。それ故患者が途を行くときには自ら『穢れたもの！穢れたもの！』と叫び呼ばなければなりません。さうすると途行く人は他へ塗を避けて之に出合はぬやうにいたしましたのでござりました。

同病相憐むこの十人の癩病患者は主が此村にお着になると同時に主に出會ひたしました。彼等は遠く離れて立ち、近くへは寄りもせず、弱き聲をあげて、『師イエスよ、我儕を矜恤みたまへ』と、病氣の治療を願ひました。それは彼等は兼ねてより主が深切で、癩病人をさへ憐み助けたまふといふとを知つてをつたからであります。主は彼等を御覧になつて『往きておのれを祭司に見せよ』と仰せられました。蓋し祭司は健康檢斷を掌つてゐて、若し癩病患者にしてその病の愈えたるを知りたる時は殿堂の祭司の所に往き、祭司をして其の果して治愈せしや否やを檢斷せしむるとが規則になつてをりましたから、主は『往きて己を祭司に見せよ』と申されたのであ

ります。

しかし十人の病は些も癒つてはをりませぬ。それであるのに何故祭司の所に往かねばならぬでせうか。若し彼等が疑ひぶかき普通人のやうならば一步も踏み出しは致さないでございませう。子供でさへも或場合にはその親からこれ爲よ、あれ爲よと命ぜられし時「何故？」とか、「何で？」とか申すことがあります。然るにこの十人の癩病患者は何とも言はず、殿堂に出勤しをる祭司に面はんものと弱き足を曳きずりながら一直線に進みゆきました。しかるに彼等は途中に於て清まり癒りました。歩一歩彼等はエルサレムをさして進みゆくほどにその痛みは軽くなり、腫濃は收靨だし、皮膚は小さき子供の如くつや／＼しくなりかけ、遂に全く癒えてしまいました。彼等は我主の言を信じて、後を顧みるとなく、真正面に打ち向ひつゝ進む間に全然平癒したのであります。かく罪惡も癩病と同じく、その人が一旦翻然として之を悔い、善行を繼續するによつて次第々々に消滅してゆくものであります。

彼等十人は途にて潔められ、平癒いたしました。彼等は猶進んでゆきましたらうか、或は引き返して來ましたらうか。九人は猶進みゆき、主より命せられた通りエルサレムの殿堂に往き、祭司に自分の身體を示めし、祭司はその平癒を宣告いたしました。彼等は久々にて其なつかしき家に歸りました。彼等は疑ひもなく歡喜して手の舞ひ足の踏む所も知らぬ程であると共に主に對して感恩の情に充ちてをりました。しかし彼等はそれについて一言も申してはをりませぬ。十人の中唯一人だけ主の所に返つて來ました。彼は途中にて身の潔められたるを知ると共に返り來り、大聲に神を榮め、主の足下に俯伏して呉々もお禮を申述べました。此男はサマリヤ人にて、祭司や學者たちの日頃擯斥する所のものでありました。主は「潔められし者は十人に非ずや、その九人は何處に在るか。この異邦人の外に神に榮を歸せんとして返りたる者あらざるか」と歎息され、此男に向はれて「起て往け、なんぢの信仰なんぢを救へり」と仰せられました。

第十二章 エリコの街に於て

エルサレムへ向ひて一條の國道がエリコといふ都會を貫いて通つてをります。此都會はヨルダンの峽谷中に在りて、一方は河、一方は山、綠色濃き梧桐の樹に取り圍れたる美くして大なるものでありました。また重要な國道の驛站でありますから繁昌な處で、税關も有つて税吏が通行税を徴し、行商人にはその貨物に對して相當の税金をかけてをりました。税吏の長にザアカイといふ人がありまして、所得の多い役目で、なか／＼富んでをりましたが、人々からは一向に尊敬せられませんでした。税吏といふものは仇敵たる羅馬政府のために役はるゝといふことで、猶太人からは何處でも一般に惡まれてをりましたこの税關にて徴收する税金は其地方の道普請や教育費に使用せられずに、之を羅馬へ送り、羅馬貴族の奢侈の資となるばかりでございました。それ故にザアカイはこのエリコにては最も富みたる市民の一人ではあります、極めて

不評判な一人で、上流の人々はザアカイと交際するとをいたしませんでした。

しかるに今度ナザレの豫言者がエルサレムへの道中このエリコを通過するであらうといふ噂が高くなりまして、ザアカイの耳にまでも入りました。エリコの住民は皆イエスの入來に興味を以て待ち構へてをりましたが、誰よりも一番に熱心に待ち構へておました者はこの税吏の長ザアカイでありました。ザアカイはその豫言者の十二人の門徒のうちに我に同じ税吏が一人居るといふとをかねて聞知つてをりました。逾越の節筵の頃となりますと、かの赤道を経てエルサレムへ上る諸國からの京詣の連中が毎日毎日参りますので、エリコの街上は肩摩擊の大雜鬧でございました。殊に我主のこゝを經過せられました時は隨從の弟子たちの外に多人數の、殊更ガリラヤから参つた人々が中々の人數でありました。ガリラヤにはバプタイ派の者其の迫害が有りましたに拘らず、眞實に主を信ずる所の善良なる人々がまだ中々にございました。それで此度主の京城入りには隨從の人々が頗る多くあつて、さながら小侵入軍の如き觀が

ありました。エリコの人々は主の一行を打眺めながら、見よ、ナザレの豫言者は彼の生命を覗ひたるパリサイやサドカイの人々に對敵し、彼等を其權威の位置より放逐して、自ら王たらんとて弟子たちの先に立ちて往かる、様の雄々しさよと互に囁きましました。かういふ噂が前から有つたためにエリコの人々は何かして主の英姿の颯爽たるところを觀たいものだ、此の繁昌な都會の街上は大群衆を以て滿されて身動きもならぬ位、戸々の窓は悉く打開かれて顔の上に顔をつき出し、主のお通行を待つてをりました。

ザアカイも飛び出して往きました。此人は元來身長が至て短い人でありました。それで大通りには群衆が充満である上に、丈高き人々が人垣つくつてをりますので、彼は通行の人を見るとが出来ませんでした。かゝる場合に臨んでは子供はうまいとを致します、ザアカイも今は威儀を正してをるとは出来ません。心にうなづきながら主の一行に先立ち只有る路傍の桑樹の中に攀ち上りまして、今やおそしと主の一行の通

過を待つてをりました。そのうちに主を第一に、それから十二使徒、ガリラヤからの連中が練つてまゐりました。小兒等の見物には餘り面白い行列ではありませんでした。制規の服装を着てをるでもなければ旗が一流あるでもなく、また樂隊もなく、只小兒等の目に映る所は農夫の服を着けてゐたり、漁夫の服装であつたり、種々雑多の身装をした塵埃に塗れて、如何にも永の旅路に疲れ果てたらんやらの有様したる一行でありました。しかしザアカイの目に入る所はその外見ではありませんでした。彼はその双の眼を見張り、又その心情を熱せしめて税吏の友、ナザレの豫言者なる威あつて猛からざる主イエスを打守りました。

主も亦一歩々々油断なく、四邊を注意し給ひながら歩を進められました。これは群衆の人々や、其喝采などに注意せらるゝのではありません。主は決して御自分の事に關しては何もお考へにはあらず、却て如何なる時、如何なる所にも他に善を爲すべき機もがなと、それについて油断なく心を用ひて在せらるゝのであります。さてこの

群集のなかを通行せらるゝ折りしも忽ち人々が嘲笑の叫聲を發し、路傍の樹の枝に足ふみかけて立つてをる一箇の人を指しつゝ、名を呼んで笑ひ騒ぐを耳にせられました。これは群衆が税吏ザアカイを樹上に見付け、平生彼等がザアカイについて何如思つてをるかをそれとなく主に示めさうとしたのでありました。主は異様におもはれて側の人に『彼は誰ぞや。人々の斯程に惡みきらふ人は何人なるや』と問われましたところ、側の一人『かれはザアカイと申す税吏で、此邑で一番不評判な男であります』と申上げました。主はやがてその樹の下に來られ、仰ぎ見て『ザアカイよ、急ぎ下れ。われ今日必ずなんぢの家に宿らん』と仰せられました。ザアカイは事の意外に、且つは大に喜びまして、急ぎ樹より下り、主をお迎へ申上げました。又群衆は案に相違して大に驚き、呆然としてしばしは立つて見てをりました。おのれらが見物に來たその豫言者は憎しとおもふ税吏の長ザアカイに迎へられて街の角を曲りて過ぎゆきました。彼等は皆ブツブツといひ出しました。果は高聲もて惡口を爲すに至りましたが、當の敵

は側へそれましたので、手持無沙汰に各自家に歸り、事の仔細を女房小供に話さかせましたが、彼等は考へれば考へるほど口惜しく、憤怒に勝へませんでした。『豫言者殿は罪ある人の客となつて往かしやつた』と、手を戟にしてのゝしりました。

主及び十二使徒等はザアカイの家の客となりました。ザアカイは立ちて主に申上げました、『主よ、我が所有の半を貧しき者に施さん、若し誣ひ訴へて人より收りたる所あらば四倍にして之を償ふべし』と。ザアカイは此時まで未だ嘗て一錢の財も貧しき者に施したとはありませんでした。また我が當さに收るべき額より以上のものを強奪しましても、未だ嘗てそれを其人に返へしたとはありませんでした。これは全く教會の人々があまりに彼を嫌ひにくみました爲めにザアカイの心情を氷の如く冷かにさせたのでありましたが、今主イエスに逢ひ、その春風の如き温く柔順しき徳に感じて此時始めてその頑梗な心情が融けたのでございました。主は彼に向はれて、『今日この家すくはるゝとを得たり、そはこの人もアブラハムの裔なればなり』と仰せられ、獎

勵を爲さいました。實に信仰の父の裔、神の家族の一人は思ひも寄らぬ所に見出さる者でございます。主は猶つけ加へて『それ人の子は喪ひし者を尋ねて救はんために來れり』と申されました。主が路傍の桑樹の上を仰ぎ見られました時に、喪れたる一箇の人を御覽になつたので、そこで何事も置てその下にゆかれ、さうして彼れザアカイを見つけ出されたのであります。

その翌日主はザアカイの家を辭して、弟子たち及び例の大衆とエリコの邑を出で給ふ時バルテマイといふ瞽者が道傍に坐して乞食してをりました。大なる群衆の漸く近づき來りましたので彼れ瞽者は大衆の踏む足の響を聞き、又其語合ふ聲を耳にし、して、何事ならんと傍を通る人の裳を執らへて『何事か邑に出來たのですか』と問ひましたれば、その人ナザレのイエスが通られるのじや』と言つて聞かせました。瞽者はイエスは何如なる人であるかを兼て知つてをりました。そこで邑の人々の話を氣をつけて聽いてをりました。ナザレの豫言者はきのふ罪ある人——税吏のザアカイ——

と食を共にし、且つ其家に宿られ、今朝出立をせられるのだと知りまして、瞽者の乞食は甚だ喜びました。この乞食は世の謂ゆる罪ある人と能く心易くしてをり、さうしてその罪ある人たちは世間で悪く言ふよりも餘程善人であるといふとを知つてをりました。

それで今し主の一行がわが前を通行せられると思ふや、聲張り上げて『ダビデの裔イエスよ、我を恤みたまへ』と叫びました。多くの人々は之に緘黙れと戒めましたが、愈々よばはりました。『ダビデの裔よ、我を恤みたまへ』と申します。主はその聲を聞きつけられて立ち止り、『彼を召べ』と御命じになりましたので、群衆の人々主が瞽者になさけをかけられるのだと思ひまして、態度を一變いたし、聲やさしく『心を安んぜよ、起てよ、主なんぢを召びたまふぞ』と申しました。

時は早朝のどで、春とはいへどまだその始めの頃でありましたから朝の氣は中々に寒くありましたが、瞽者の乞食はその纏ひをりました上衣を棄て、たちて主の所にま

おりました。主はかれに『なんぢ我に何を爲れんと欲ふや』と申されまされたれば、彼れ『主よ、見えなんと欲ふ』と答へました。主『往け、なんぢの信仰なんぢを救へり』と仰せられたれば、かれ直ちに明を得て、感謝のあまり主の後に従ひて往きました。

第五編

榮光の主エルサレムに上り給ひし事。弟子に裏切りされ、罪せられ、十字架に釘けられ給ひし事、及び死より甦り、天に昇り給ひし事。

第一章 棕欄と詩篇

去程に主及び十二使徒、ガリラヤより京詣の人々の一行はエルサレムに上らんとてかの赤道を指してエリコの門を立ち出でました。日中には大なる巖の陰に憩ひ、夜には既にベタニヤに到着いたしました。この小さな邑は逾越の節に參會せんとて諸方より來ました人々で既に一ぱいでありました。中には天幕を張つてそのうちに寢てをる者もあり、星を燈火として屋外に臥せるもあり、また朋友のある人はその朋友の家に宿りたるものもありました。我主は例のラザロの家を主人としてこれに宿泊せられました。あくる日は安息日でありまして、その夕人々は主のために嘗て癩病患者でありましたシモンと申すパリサイの人の家にて晩餐會を催しました。パリサイ派の人のなかにはかやうに主の仇では無く、親しき友もありました。ラザロもこの食卓の一席を占めてをり、妹のマルタは主の給仕をいたしました。マルタの妹のマリヤが貴重な香膏

の入つてをる臘石の盒を毀しましたのは此時の事でございます。マリヤはその盒を毀し、膏を主の頭に沃ぎました。

お客のうちの或人はマリヤの此の仕業を喜びませんでした、といふは其人たちは我主がかういふ事をおよろこびなさらないと思つたからであります。主はいつも簡易單純で、人が主のために何か致しても一向それに御注意なさらぬやうに見えてをりました。そこで一人が我主に代つて物言ふやうな調子で、「此香膏を何ぞ銀三百に售りて貧者に施さざるん」と申しました。此男が斯様に申したは他に理由があるので、殊に悪い理由があつたのであります。此男はイスカリオテのユダと呼ばれた、十二人の會計方をいたしてをるものであります。惣じて主及び十二人の財は一箇の財布に入れて、此のイスカリオテのユダが常にこれを携へ、その出納を掌つてをりました。その財布は別段に重いものではありませんでした。その理由は第一それへ入れる財が尠いの、十二人の入用が多くてそれから引出す額が割合に多いのと、今一つは會計

方のユダに盗心があつて、自分の有でない分を密に財布から取出して、おのが財布へ着服いたすからでございました。この着服一條は他の使徒たちも終には氣づいたのでありました。さてユダがさもしき心よりアリヤの所行を非難いたしましたのを我主はお聞きになりました。アリヤの所爲は當を得たとであると宣ひ、かつおん身に逼れる十字架の處刑を今更に感じられて、『マリヤは我が葬の日のために之を貯へたり』と仰せられました。

さて此人が現今日曜日と稱へます日がまゐりました。その朝殿堂の奉事のをりに人々は相互に話し合ひました、甲『豫言者は御座るでせうか。あなたは如何お考へなさる、あの方はこれどの節日においでなさいませうかしら？』乙『いや、おいでにはなりません。殿堂の宰たちはあの仁を殺さうと決めてゐますで、多分遠く避けてゐられますよ。』丙『いや、豫言者殿はもう來て御座らつ！』いませよ。昨晚はベタニヤに泊られました。今日は屹度こゝへお出でなさいませう。』甲、乙『え、何と仰有る、

お出でになりましたつて？ではお迎ひに參らうでは御座らぬか』と我主に好意をもつ一群の人々はエルサレムを立出で、口々に歌うたひ、手に手に棕櫚の葉を打振りつゝ、ベタニヤさしてまゐりました。

この時主はベタニヤにて京上りの準備をしてをられました。『視よ、爾の王は柔和にして驢馬すなはち驢馬の子に乗り、爾に來るとシオンの女に告げよ』と數百年前舊約聖書に録るされてあります。それに應はせんために主は二人の弟子を隣村の知人の所へ遣はされ、『彼處に入らば人のいまだ乗らざる所の繋ぎたる驢駒に遇ふべし。其を解て牽き來れ、若し誰か爾曹に何ゆる解くやと問ふ者あらば主の用なりといへ』とお命じになりました。二人はその村へ參り、門の外岐路に繋いでありました驢馬の子を見て、之を解きにかゝりました。驢馬の持主がそれを見付け、何故に我が驢馬の子を解くかと詰問ねましたら、弟子は主のお言葉の通りに『主の用なり』と申しましたれば持主は自分の友なるナザレの豫言者の所から來ました使者だと合點して、驢馬の子

を解いて渡しました。

二人の弟子は驢馬の子を主の所に牽き來り、自分たちの衣を脱いで、鞍のかはりにその上に置きました。主は之に乗りたまひ、エルサレムとして出立されました。澤山の人が後から従って参りましたが、かのエルサレムから迎へに出てまゐりました大勢の人々に途中で出會いたしました。その人々は直ちに又エルサレムの方へ向き直り、我主を中央に練り行くようになりましたが、彼等は着てゐました上衣を脱いで路上に歩いて其上を主に歩かせ申すやうに爲し、且つ樹の枝を代つて通路に布き、前に往く人後に従ふ人みな一齊に聲を合せて、『ホザナよ、主の名によりて來る者は福なり。至上處にホザナよ』と呼はり謳ひました。弟子の大勢はこの有様を見て非常に喜びまして、高き聲を立て、神を讃美いたしました。群衆の歡呼は實に一通りではありませぬ。甲『豫言者殿は我が村で病人をおほ勢醫して下さいました。臥床のまゝで連れて來られた病人は返りには飛んだり跳ねたりして還りをりました。』乙『私にはあ瘡で

ありましたが、かう口がきけるやうにして下さいました。丙『左様ですか、私はまた人さまに悪はれます癩病でござりましたが、こないに潔めて下さりました。』丁、戊『私等はラザロさんが墓から活きかへつて出て御座つた時側で實地を睹てをりましたせ』など、自慢氣に話すもありましたが、一段聲高く喚いてをりましたのはバルテマイで、『私は瞽者でございましたが、何と有りがたいではありませんか、こんなに見えるやうにして下さりました』と見る人見る人を執へてかう叫んでをりました。斯様に人々は笑つたり。呼つたり、叫んだり、歌つたりして練りゆきます中に我主は黙然として驢馬に乗つて進まれました。群衆の歡呼の甚だしきにパリサイの人々が耐りかねたと見えまして、『此はまた餘りのと、師よ、少しく弟子を責められては如何に？』と申しましたに主は答へて『われ爾曹に告げん、此輩も黙止りなば石號呼ぶべし』と仰せられました。

此の如くにして王は御自分の都城をさしてお出でになりました。今とても頭には王

冠を戴いてをられませんでした。おん身に王者の然るべき御衣も着てはをられませんでした。世の謂ゆる帝王とは全然異りました御様子でございましたが、矢張り王として、その人民が之を受け入れますか、受け入れませぬかを御覽になるためお乗込みになりましたのでございます。お乗込みの途上、群衆の歡呼のなかにも主は鬱々として樂まれませんでした。冷淡なる面色したるパリサイの人々はニダヤ全體の人々を代表してをるやうに主には感じられました。エルサレムの人々は國主を迎へるやうに歡待すべきが本當でありませうが、どうもさうは致しさにない。一行か山の腰をめぐりて、只有る處に出でました時にエルサレム城は歸然として、一の深き谷を隔て、あなたに立つてをるのを見ました。この聖なるエルサレム城は幾座かの小山の上に建てられたるもので、大なる建築物が數あるなかに一箇實に立派なる殿堂が輝く屋根を戴いて諸建物の上に君臨してをるかの如くに見えてをります。この景を御覽になりました。王は思はずも驢馬の足を止めさせ、滂沱たるおん涙を抑へられつゝ、深き深き悲哀を

もて、『若し爾だにも今この爾の日に於て爾の平安に關はれる事を知らば福なるに今なんぢの目に隠れたり』と泣く泣く仰せられました。

これは全くその通りでありました。一時は成程榮光の主の盛大なる入城式の如く見えしました。城内にをりました人々は主の入城に一寸驚きさはぎました。しかしそれは一種の好奇心から騒いだので、この入城の行列は如何なる意味のものかといふとは知るものがございせんでした。彼等は單にガリラヤから農夫等の一群が京詣に來るのであるとより外には何も思ひません。その中に一人驢馬に乗つてをるのが異様でありましたので、『あれは誰ぞ』と問ひましたに答へて『これはガリラヤのナザレより出でたる豫言者イエスなり』と農夫の一人が申しましたが、京城の人たちは數十百里も離れた片田舎に住へる人のとなどには何も注意はいたしませんでした。そのうちには今迄棕櫚の葉を振つて『ホザナよ』を歌つてをりました連中もいつしか一般群衆のなかへ紛れ入つて、姿も見えないやうになりました。

否認せられ、受入れられなかつた王は獨り蕭然として殿堂に入られました。いと悲しげに、また屹と殿堂の中を御覽じまはされて、此日は静かにたゞ十二使徒を携へられてベタニヤに返られ、一夜を明かされました。

第二章 聖週間の三日

あくる朝我主はベタニヤより橄欖山を越えてエルサレムに上らるゝ途にて、聊か飢氣味にていらせられましたところ、少し隔たりて無花果の樹が葉の鬱葱としてをるのを御覽になり、果實の澤山あると側に立ち寄りて見られましたに、葉の外には果一だに御座いませんでした。これはバリサイやサドカイの人たちと同じきもので、宏麗なる殿堂に出入し、其都會村落の會堂に説教し、言語や風采はまことに立派ではあります、その心中の陋劣なるとは又甚だしきもので即ちこの無花果と同じく全く見かけ倒しでありました。我主は案外なりし無花果に向はれて『今よりのち永久も果を

結ぶことを得ざれ』と仰せられなした。かくて主及び十二使徒はエルサレムさして往かれました。

我主は殿堂にお入りになり、昨日御覽になりました同じ堂内の光景を例の悲しげなまた厳しき御目を以て一通り御覽になりました。殿堂は前にも申した通り廣大な廷に建てられ、その廷に平石で敷詰め、その周圍には亦石の塀があります。この廷を異邦人の家と申します。それは異邦人でもこゝまでは出入自由を許るされましたが、殿堂そのものゝ門を入るとは禁じられてをりました。即ち此廷は他國の人々には聖所として見るべく、猶太人ならずとも志ある人ならば此處まで入りて、神を拜し且つ禱りするやうにと希望して設けられたものでございます。

しかし其頃こゝにて祈禱をする者は一人もありませんでした。逾越の節筵には參會の人々が無數でありますから、従つて彼等の獻げます犠牲も勿論莫大な數になります。誰にてもこの聖なる都に参りましたものは殿堂の壇に犠牲をさゝげたいと欲ひますの

で、其人々に供給するため、即ち彼等が祭司の所まで持つてゆきます牡牛や羊や鶴などを得させるために、その賣買の場所がこの異邦人の室に設けらるゝに至りました。それ故にこゝは教會といふよりも田舎の市といつた方が當つてをるやうな觀を呈してをりました。されば此方には羊や牛を入れ置く小屋もあれば鶴の籠もあつてその賣買をしてをり、彼方には卓子があつて兩替屋が錢を其上に並べ、大錢を小錢に換へたり、外國錢を猶太の錢に換へたりしてをりますので、その雜鬧は一通りでなく、喚めき叫ぶ其聲はかまびすしさ譬ふるに物なく、祈禱など兎ても出來るとではございませんでした。

この光景は昨日既に主の御覽になつた所であります。今日ふたゝびおいでになりました時には手に細い糸をより合はせた筈を持つてをられました。やがてこの異邦人の室に何事の出來せしか、尋常ならぬ物音が聞えました。今この處をさして來かゝりました大勢の人々は入口の門の處にて牝牛や羊が内から奔り出て來る、そのうしろには

主が嚴肅しき面色して筈を手にし、逐ふて來られますのに出會しました。それから主は又兩替屋の卓子を覆へし、鶴を賣る者の椅子を倒し、大聲にて、『是等の物を携去れ。我室は萬國の人の祈禱の室と稱へらるべしと録るされたるに非ずや。然るに爾曹は之を盜賊の巢となせり』と叱咤いたされ、かつ器具を持つて殿を過ることをお許しなさらず、また何物にても祈禱に妨礙になるやうなものは悉くこれを止められました。その時の主の風采は實に威風凛々たるもので、神の聖名を以て商賣人や祭司たちを罵り懲らされました。此次は主が人民の指導者として躬親らを世人の目に顯はしたまひたる第二次でございました。此次は餘程人々の心を感動させまして、折りから謳うたふ組の童兒の一隊が殿堂から出てまゐりましたのが、前日ベタニヤからの途上群衆の歌ひましたやうに此童兒等も思はず、『タビデの子、ホザナよ』の歌をうたひ出しました。翌火曜日主及び十二弟子は復たエルサレムに參られました。その途中かの果の無き無花果の在ります處を過られました。此は如何に無花果は凋み枯れてをりました。

殿堂においでになりました時祭司の長、學者および長老たちが主の所に來りまして、『何の權威を以て此事を行すや、誰が此事を行すべきために爾に此權威を與へしや』と問ひました。しかし此時は人々が多く主の周圍に居り、豫言者として主を尊敬してゐましたので、彼等は之を畏れて主に指一本さすものもありませんでした。それゆゑ主は此日一日殿堂に在つて教を説かれました。パリサイやサドカイの人々は難問題を挈げて主と論難し、主を罪に陥すべき何か語尾を捕捉へんといはしましたが、そこ處ではなくみんな主に論破せられて、終には誰も復た議論しやうといふ勇氣を失つてしまひました。

かくて其日も暮れました。暗夜に此都城に居るは主に取りて危険でありますので、主は弟子を伴ひて外に出で、城壁の外なる橄欖山の岩の上にしてしばし休息いたされしました。夕陽の光景がエルサレム城とその殿堂を照らします莊嚴なる光景に見とれました弟子たちは『帥よ、視たまへ、此石この殿宇いかに盛んならずや』と主に申しまし

た。然るに主は答へて、『なんぢら此大なる殿宇を見るか、一の石も石の上に圯れずしては遺らし』と仰せられ、且つ彼等にこの宏麗莊嚴なる都城は如何やうにして破滅せらるゝか、それが何人も知らぬ、主みづからさへも御存じなき時に滅ぶるか、またこの全世界が滅亡に歸すべきとさへもお話しになり、又萬民の審判者として主が何如な有様をもて來らるべきか等の事についても同じくお告げになりました。

この三日間のうちのいづれの日なりしか主がエルサレムを去つて城外に往かれま

す時、嘗てコラジンやベツサイダやカペナウンに永別を告げられしやうに、このエルサレムにも永訣の辭を與へられました。『噫、エルサレムよエルサレムよ、預言者を殺し、爾に遣はさるゝ者を石にて撃つ者よ、母雞の雛を翼の下に集むる如くわれながらの赤子を集めんとせしこと幾次ぞや。されど爾曹は好まざりき。』これでいよいよかくて水曜日となりました。祭司の長や學者や民の長老たちの恐怖と憤怒とはいよ／＼高じまして、祭司の長の最も位高きカヤバと申す者の家に集會を開き、如何にし

てイエスを捕へ、之を殺さんかの相談をいたしました。彼等は人民の或る部分はいエスを豫言者と信じ敬つてをるとを知つてをりますから、この節筵の畢はりて参詣の群衆がそれ／＼歸郷したあとで、かつ公然と捕へずに内密つかまへるやうにしやうなど、合議いたしました。

彼等がまだいろ／＼と捕縛の手筈など相談いたしてをります所へ戸を敲く音がいたしました。しばらくすると一人の此家の者が來まして、「唯今一人の男が参りまして、自分は豫言者の弟子の一人であるが、内々でお目にかゝりたい」と申しますが、如何取計ひませうか、こちらへ入れませうか、如何でございますか？」と申しました。構はぬ、こちらへ入れよ」と皆々申しました。しばらくするとかの十二使徒の一人にして、不正直なる會計方イスカリオテのユダが案内せられてまゐりました。ユダが申しますには、「諸君は幾何金私に下さいますか、金高によつては私のかの人を諸君にお付し申しませう。私は諸君をお伴れ申して極しづかに彼を召捕るとの出来る處に参りませう。その賞には幾何私にお拂ひなさいますか」と。彼等はユダに銀三十を遣うと約束いたしました。かくてユダは意外の手引に打ち喜ぶ人々をうしろに、祭司の長の家を出まして、何食はぬ顔してふた、び主の所へといそぎました。

第二章 バリサイ、サドカイ兩派の人と婚筵の賓客

我主が在エルサレムの三日間のある日バリサイ、サドカイ兩派の人々に向はれて、主は彼等は實に或る王が催したその王子の婚禮の祝宴に招待を受けた賓客の如き者であると言諭を以てお話になりました。

そのお話は某處の國王がその王子に妃を迎へましたので、國王はその祝賀のために盛大なる晩餐の筵を開かんものと國中の首立ちたる人々に澤山の招待状を出されました。かくてその當日招待し置きました人々を迎へんために、使者をつかはし、凡て準備は滞りなく出來いたしたにつき皆參集あるやうにと申させました。然るに彼等は

意外にも王宮に参集するのを欲みません。使者は空しく還つて來ました、さうして一人の賓客も従いてまゐりませんでした。

これは實に不思議のとでございませぬ。苟も王家の婚筵に招待を受けながら之を辭退するといふは理に於てあるべき筈でない。それゆゑ國王はお考へになりました、これは何か彼等に誤解があるのであらう。今日がその當日であるといふを思ひ違ひしてをるのであらうと、更に他の使者を命じ、「我が筵すでに備はれり、わが牛また肥えたる畜をも宰りて悉く備りたれば婚筵に來れと請きたる者に言へ」と仰せて出し遣られました。これは餘程大きな響應と見えます。幾頭かの黄牛を燻き、其外肥え膏ぎつた羊や雞など數おほく煮たきしてあるのでございませぬ。然るに使者は此次も一箇の賓客も伴れ來ず。空しくその不参の申譯をのみ聞き來て國王に申上げました。甲のものが申すには「私はこのたび地面を買入れましたについて、今日はそれへ參つて檢分を致さねばなりません。御免を蒙ります。此義宜しう御披露を願ひます」とて其

處をさして右の方へ往いてしまひました。乙は「私は今日五頭の牡牛を購めましたにつき、只今よりその檢査に參らねばなりません。よろしくお斷りを申上げ下さるやうに」と、これは左の方へ往つてしまひました。丙「私は今日商賣が中々いそがしうござつて、店舗を片時空けますとが出來ませぬから、失禮ながらお斷りを申上げます」。丁「私奴は今日女房を貰ひましたので罷り出づることは叶ひませぬ。宜しくお取り做しを願ひます」。何の角のと辭退を皆々申しましたが、これはいづれも宜くない申譯でございませぬ。新たに購入したといふ地面でも、牡牛でも今日に限つたのではない、明日までその檢分を延してもすこしも差支は無いのであります。それに王家の此上もなく出出たい婚禮の當日は即ち祝日で、商賣人は店を休んで參會するがよし、また女房を貰つたといふ人はその花嫁を同道してまゐれば猶更時に取つての珍客が一人増したといふものであります。それを皆々一同に王家からの切角の御招待をお斷りしたといふは全く彼等が王家の婚筵に連るを嫌つたのでございませぬ。不敬とも不忠とも申すべ

甚だ以て心得違ひのとでございました。

それのみならず使者のなかには還つて來ぬ者もありました。彼等市民は招待を辭退するばかりか、その使者に髮を氣爲掛けて之を噬ませ、或は石にて打ち、殺害したのもありました。這々の體で逃げ還りました使者たちは噬み裂かれた外套、血にまみれました肩、腕などを王にお見せ申し、無残に命を喪くしました同僚の最後の様を上聞に入れました。是に於て國王は赫として大に怒られ、兵士を彼等へさし向けられて悉くこれを誅戮し、その邑を焼き亡されました。

さてからなりましては國王、王妃の名譽なる一座に連り、太子、太子妃のお目出たき御婚禮を祝すべき賀客は一人もなくりました。そこで國王はその家臣に向はれ「婚禮すでに備りたれども請きたる者は客となるに堪へざるものなれば汝等衢といはず小路といはず、人々の往來するところへ往きて遇ふほどの者——貧しき者、病疾、跛者、瞽者——を招き來れ」とお命じになりました。家臣等は命を畏み、衢や小路へ出向き

まして、これまで立派な御馳走といふものを食べたものない人々を王家の饗筵に招きました。彼等は叫んで申しました、「國王殿下は今夕王宮に於て太子、太子妃御婚禮の一大饗筵をお開きになる、今や食卓は並べられ、左右の端には黄牛の燻きたるが堆く盛られ、その中間には肥え膏ぎつたる羊や雞が大皿に充ち満ちてをる。してそのお客は即ちお前がたである。甲もお客だ、乙もお客だ、丙丁も御招待を蒙りをる」と行き遇ふ人々の甲乙丙丁を捉へて、「汝等いぞき王宮へ往け、國王殿下が太子祝賀のためにお備へになつた御饗應の席に坐はれ」とせき立てました。

かゝる次第で種々様々の人物が繰込んでまゐりました。襤褸を纏うた貧乏人、拐杖にすがる片輪もの、子供や狗を案内にする瞽者などを始めとして異様異態の者が續々とまゐり席に着きましたが、それでもまだ座席が大分空いてをりました。これで觀ましてもこんどの招待は極めて大まかで、一般的でありまして、爲めに多くの人々は國王の招待を信ずるとが出来ぬ位でありましたのでございました。彼等は招待を受けて

彼方に三人、此方に五人打寄りて相談をいたしました。「これは全體如何したといふのだらう。我儕は抑も何者なればかう國王殿下から御招待を受けたのだらうか。殿下は我儕風情にお注意なさる筈もあるまいに」と。實にこの御招待は人民が之を信ずるには餘りに結構すぎた望外のものでありました。それでまだ空席があるのでございました。國王は再び家臣をお召しになり、「かく空席が多くあれば爾曹ふたゝび出で往きて市内といはず、田舎といはず、往來なり、裏屋なり、何處へなりまわりて出で會ふ人々を伴れ參れ」と仰せられ、やう／＼のどで筵席は充満になりました。

以上は我主のお話でございます、パリサイとサドカイの人々は耳傾けて聽いてをりました。これは自分等に引きあて、申されたのだといふとを曉り得ました。彼等は上流社會の人々で、國王なる神は彼等をそれ／＼の官職に任じ、その國にて尊敬せらるゝところの者でございました。神の使者としてバプテスマのヨハネの如き人が彼等の所に至りて王家の饗筵に罷り出で、其主のよろこびに入るやうにと神の命を傳

へたのでありました。然るにバプテスマのヨハネは殺され、使徒等は往昔の豫言者が石にて撃たれましたやうに往くさき／＼から空しく還つて參りました。そこで神は彼等の復命を聞かれてこんどは王宮即ちその教會を公開し、異邦人にも、サマリヤ人にも、税吏にも、前科者にも、凡ての人に自由に御馳走を食べるとをお許しになりました。

しかしこゝに一つ此お話のうちに或條件がありました。主は此事を神の召を蒙りました人々にお告げになりました。さて食卓は來賓を以て空席なきに至り、御馳走の品々は後から後からと運び出されますその間に國王は今夕の來賓を一見いたさんと此席に出御になりました。豫て此席に出づる者には一の事が是非とも行てなくてはならぬ筈になつてをりました。それは婚禮出席の禮服を着てをるとであります。併しながら裏屋住居のものがかやうな禮服を所有してをる筈がなく、途中から招き來た旅の人がその荷物の中に禮服を入れてをるともありません。それで國王は前以て其人等の

ために準備をしておかれしました。人々が王宮に参りました時王の家來は玄關の所にて『この白い禮服をお着なさい、その紫の方のは貴所お着なさつてお入りなさい』とそれ／＼皆禮服を渡しました。然るに一人そんな事に注意せず、大股にいそぎ入つたものが有りました。國王が今しこゝにお出ましになつて一わたり來賓を御覽になりましたるところ、塵埃に塗れた上衣を着てをるこの人にお目がとまりました。國王は此人を召され、穩和ながらも嚴肅とした調子で『友よ、如何なれば禮服を着ずして此處に來るか』と仰せられました。彼は默然として御申譯が出來ませんでした。彼は實のところ禮服の着用は其程大切のとは思はなかつたので、本來疎懶の心から國王のたゞ一條の御要求を敬んで守る手順を怠つたのでございました。國王は家臣にお命じになり、この人を外に遂出されました。此人は煌々と照りかゞやく大廣間から夜の暗らき門外へ悄然としていで往きました。

我主のこのお話の旨はかうであります。天の神は吾人すべての人類を今は此世に於

て、後には天に於て神の現前に立つ大歡喜にお招きになりました。たとひ吾人は如何なる者にてあらうとも、貧しくても、替者でも、不具者でも一向にお構ひなく、吾人一同を悉くお招き下さいます。併し一の條件は吾人が善良なる生活といふ婚禮の禮服を着用するとであります。神は吾人に謙遜、正直、眞實の衣を着、慈悲と祈禱との外套を蒙るとを御希望になります。若しこの條件に外れ、守らぬ者があれば、それが稠人廣座のなかに只一人でありましても、神は忽ち之を發見し給ひて外の幽暗に投げ出し給ふのでございます。

我主はまた一日殿堂にて教へていらした時、今一つ婚禮の時の話に譬へて申された教訓がございます。

主が申されますには或時十人の乙女が新郎親迎の一行を待つて一所に居りました。即ち此十人の處女は謂ゆる待女郎で、此夕新郎が新婦を迎へんために此處に参りますそれに伴ひて婚禮の席に出づるとになつてをりました。折柄月のなき暗夜の事であり

ましたので、十人は各燈を用意してをりました。その燈は圓形の器で、中に油を入れ、燈心を添へてありました。その底の處には細く尖つた物があつて、小さな棒をさし入れるやうに出来てをり、丁度今日吾人がカンテラ行列に使用する器のやうな體裁でございました。然るに新郎側の人々の參るのがよく有るとですが、大分遅延いたし、十時となり、十一時となりましたので、平生早寢の習慣で成長ちました待女郎は遂に待ちくたぶれて假睡をしてしまひました。十箇の燈は壁に沿ひて一列に煌々と燃つてをります。待女郎の少女はいぎたなく眠こけてをりました。

夜半に及びまして、「新郎來りぬ、出て迎へよ」といふ家人の呼ぶ聲に驚き覺めて、彼方を見ますと遙か前面の方から松明を振り照しながら新郎の一行が練り込んで參りました。十人の少女は周章狼狽、大いそぎに燈をかき立て外に出でんといたしました。五箇の燈には燈心が既に罄きてをりました。元來十人のうち五人は燈は持參したのですが、他に油の用意を爲ておきませんでした。彼等はその美しい衣服の色

合、縞柄などにのみ心を奪はれて、油のとは失念したのでございましてせうか。それとも彼等は「油は先方へ往つてから何とか爲ませう、何處かで油は貰へませう」と思つたのでせうか。この五人の少女は丁度世間の祈禱といふものを致したともなく教會へ詣つたともなく、また未だ嘗て神様をおよろこばせ申さうなどは考へたともなく、心にいつも「どうにかなるだらう」と呑氣に構へてゐます男女の如きものでありました。

新郎の行列は次第々々に近づいてまゐります。然るにさし加ふべき油は河處にも得るとは出来ません。今は一滴二滴を餘すばかりで、燈心のさきがパチ／＼して光が明るく暗くゆらひでをります。困じ果てた五人の愚なる少女は伶俐い五人の仲間「われらの燈熄んとす、願くば爾曹の油を我儕に分け與へよ」とたのみました。愚なる少女等は燈皿一杯の油は今夕用ゐて餘りありと考へたのでありました。世間にはたゞ教會に屬してさへをれば、または自分は宗教的家族の一人なれば別段に何を爲なくと

も、時來らば他の人たちと同じく天國へ往かれるものだと考へてをる愚者が随分ございます。愚な少女等は飛んだ誤謬をいたしました。伶俐い五人の小女等は餘分に油を持つては來ましたが、他に頒けるほどは所持してをりません。そこで『我儕と爾曹とに恐くは足るまじ。爾曹賣る者に往きておのがために買へ』と謝絶りました。

愚なる五人の待女郎は詮方なく、いそぎ外面さして出でゆき、油を買うといたしました。併し夜半のことですから商店は疾くに戸を閉めて眠てをりました。五人は彼方へかけ、此方へ走り、この店を敲き、かの家を起して油を買はんとしました。が何處でも起きてはくれませんでした。

其のあひだに新郎は參りました。婚禮の行列は音楽隊を第一に、笑ひさゝめき、歌うたひ、松明や燈の光りまばゆきまでに振り照らして婚禮の式場へと向ひました。もち論かしこき五人の待女郎は新婦のそばに引きそひ、大きな星の如く輝く燈を携へてその行列の真中に加はつてをりました。かくてその家に着いたし、皆々門内に入る

と同時に戸は嚴しく閉されてしまひました。

やがて門の外に急ぎ足に踏みならず履の音がきこえ、長途を馳けまはつて來たと見えて、あらい息づかひしながら門を敲く音が聞えました。即ち愚なる五人の待女郎が何處に往いても油を賣つてくれる者はなく、明の熄えた燈器をもち、闇黒の夜の中に立ちて戸を敲くのでありました。甲敲き乙推しましたが、中なる音楽の劇亮たる響に消されて之を聞きつける者がありませんでした。少女等は喚き呼びました『主よ、主よ我儕のために開きたまへ。』新郎は之を聞きつけまして『われ誠に爾曹に告げん、われは爾曹を知らず。こゝに在る者は皆わが友なり。爾曹は誰なればかくおくれ來るや』と申しました。

我主は以上のお話を爲されて、さうして仰せらるゝには『されば爾曹怠らずして守れ、爾曹人の子の來るその日その時を知らざればなり』と。實に主が此世に臨まれます時燈に若し油がありませんならば何等の用にも立ちません。此時我主はバリサイ

やサドカイの人々を屹と御覽になりました。善き職務といふ燈に若し善き生活といふ油が無つたならば、神の嘉賞に入るべきやうにその人を照すとは出来ませんからであります。

第四章 最後の晚餐

逾越の節日は水曜日から始まります。これは猶太國民の誕生を記念する祭であります。猶太人は往昔埃及に奴隸となつて苦しんでをりましたが、千數百年前のこの水曜日に埃及から遁げ去るとを得ました。その前彼等は何時埃及人が追ひかけて參るか分りませんから非常に取りいそひでをりましたので、麵麩を製へる暇がありませんでした。彼等は各自その家に於て羔羊を主として夕餉の食を取りました。その羔羊の血を各自の家の門口の兩旁の楯に塗りて、この家は猶太人の家で、埃及人は一人も居らぬといふ記號となし、以て此夜報仇天使が降り來て、この血を視ればその家を逾越し、

たゞ埃及人の家のみ撃つやうにいたしました。麵麩はたゞ麥粉を水で捏ねたばかりで、酔を入れませんでした。之を酔入れぬ麵麩と申します。この埃及遁逃の日を記念いたして其後千數百年の基督出世の時代に至りますまでも毎年毎年猶太人は羔羊の炙肉と酔入れぬ麵麩との晚餐を設けて、彼等が祖先の神の大なるお助けを得て、埃及奴隸の苦境から遁れ出でたとを感謝いたすのでございます。

この節期にはエルサレムは非常な人出ででございます。此時エルサレムに參ります人は皆羔羊を先づ殿堂に献げねばなりません、さうして其餘肉を以て晚餐を市内で食するのでありますから、市内の住民の家は何家も彼家も地方からのお客で充滿いたします。市場といふ市場の羔羊の賣買は實に盛であります、亭主が羔羊を買つてまゐりますと女房は臺所にて之を炙き、晚餐の準備をいたすのであります。それ故此日の朝弟子たちは主に向ひまして『われら逾越の食を爾のために何處に備ふべきか』と問ひました。此時かのユダは主が何と答へたまふかと注意して聞いてをりました。主は今

日始めてエルサレム城内に日暮れてからお留りなされるのでありませう。果して何處にお留りなされるであらうか。教會の宰たちは主を捕へんために人を遣すであらう。夜間人々はそれく、晩餐の席に着いてをり、街衢は人通りが無いから靜かに容易に彼を捕へるとが出来る。さて何處へ彼は往かれるかと、かやうにイスカリオテのユダは考へ込んでをりました。

我主は熟とユダの顔を御覽なさいました。すべて心に悪計を有つてをる者は口へこそ出しては申さずとも、その目には度すとの出来ぬものでございます。主が弟子たちに御自分が近く殺されなされるといふとをお告げになりました。主が幾週間か経ちました。その間に主はユダの心意にも容態にも變化の生じたとを看取なされました。ユダは猶十二使徒の中に加はつてをりますが、心は甚だ不安でありました。ユダも嘗て一度は他の弟子たちと同じく榮光の主は絶大なる権力をもつて此世に君臨せらるゝと思ひ樂しんでゐたのでした。彼等は實に最後のエルサレム行の、城近く來ました

時でさへも此希望を有つてをつたとは前に述べた通りであります。併しユダの希望は漸次冷却しました。彼は主の敵は數に於ても増せば、その憎惡の度に於ても加はるばかりなるを目撃してをりました。主が驢馬の子に騎り、人民が棕櫚の葉や木の枝を途上に布き、ホザナを預ふ歡呼の時には、或は猶太國民が我師を主として迎へ奉るに至るかとも聊かまた其希望を起したのでありましたが、これも亦失敗に終はつたのを見てからはユダは最早何をも期待せぬやうになつてしまひました。その月曜日主が殿堂にて各種の商人を罵り、逐出された、それをサドカイの者等が黙止つておかぬことはユダの能く知つてをるところでございます。ユダに取つては萬事休せりといふとは明白な事實となりました。主に取りては亦ユダは希望を失ふと共に信仰をも失つたといふとは明白な事實となりました。

それゆゑユダは晩餐は何處で食せらるゝか、それを知らうと熱心に聞耳たてゝをりました。然るに我主は彼に知れぬやうに準備されました。主は最も信用を置くことが出

來ると思召す二人の弟子、ペテロとヨハネに『京城にゆけ、さらば水を盛れたる瓶を挈る人に遇ふべし。之に従へ。その入る所の家の主人に「師いふわれ弟子と偕に逾越を食すべき客房は安に在るや」といへ。されは彼れ陳設へたる大なる樓房を爾曹に示すべし。我儕のために其處に備へよ』と仰せられました。かく主はユダの計を破られました。

二人の弟子はエルサレムさして往きました。城門を入りますと果して水瓶を挈へた一箇の男に遇ひました。その男の後について只有る家に参り、問きましたるにすべて主の仰せられた通りでございました。外方の楮子を昇りますと大きな樓房があり、其なかに一時の大卓子が据ゑられ、その周圍に臥榻が幾個か添へてありました。それからペテロとヨハネは羔羊を携へて殿堂にまゐり、之を犠牲として祭司に付し、その餘肉を受けて返り、法通りに料理をいたし、晚餐の準備は悉皆出来いたしました。やがて太陽は落ち、薄暮となり、闇黒は天を蔽ひました。この時我主は弟子をつれ、橄

欖山を下りて京城に入り、この樓房に着なされました。

さて皆々席に着かんとして計らずも紛争が生じました。即ち彼等は各自の驕慢から吾こそ師の高足弟子である、師の席に直接してその左右に坐せんと争ひでございませす。ペテロは一番年長者であるからその名譽なる席にはおのれ着すべしといひます。ヨハネは否、師はおのれを別けて愛し給ふゆゑにその席はおのれの占むべきものであらんと申します。主は甲を上席に、乙を下席にと順序をお立てなさるやうなとはいたされません。それは主の爲さる道でございませぬ。主は他を凌ぎ壓してみづからを善くしやうとする論争は甚だ宜ろしくないといふとを教へやうとせられました。此時我主は徐ろに席を起たれ、上衣を脱ぎ、手巾を取りて腰に束ひ、それから盥に水を入れさせ、弟子の足を濯ひ、その腰に束ひおかれか手巾を以て拭きはじめられました。此國では草履か皮靴を穿きました時には暑熱と塵埃のなかを歩いて汚れ疲れた主人なり客なりの足を濯ひますのは奴僕役でありました。我主は高慢のおれがくを争つてゐ

ます十二人の弟子の顔を熟視されながらこの奴僕の役をおん身みづから取られました。ペテロは之を拒みました、他の弟子たちも無論拒みませんでしたらう。ペテロは申しました、『主よ、爾わが足を濯ふか。なんぢ斷じてわが足を濯ふべからず。』しかし主は聴入れなく順々に皆の足をお濯ひなされて、遂にユダの足をも濯つてつかはされました。そこで再び上衣を着け、もとの席に復せられて彼等に、『我がなんぢらに行しとを知らるか。爾曹われを師と呼びまた主と呼ぶ。われは爾曹の師また主なるに尙奴僕の如く爾曹の足を濯へり。爾曹も亦たがひに他の足を濯ふべし。是れ大なる者の爲すべきとなり。眞の大なる者は能く他に役はるゝ所の者なり』と仰せられました。

さて是から皆逾越の夕餉につきました。卓上には炙きました羔羊の肉と、苦菜と、苦菜を浸して食べる醋と、酔入れぬ麵麩の圓く扁平き菓子陳設べてありました。一同食し畢りましたのち、この夕餉の嚴肅なる式が始りました。葡萄酒を滿々と注いだ盃は祝されて順に廻されました。さうして苦菜を各自が醋につけて食べました。其

時主は弟子たちを一應見まはされ、深き憂を心にもたれて仰せられるには『誠に實に爾曹に告げむ、一人なんぢらの中に我を賣す者あり』。詳しく言換へて見ますと、爾曹の知る如く我は今生命の危険に臨んでをるのである。教會の宰等は我に對して死刑の宣告を發し、日夜我を捕へんと機を覗ひをれり。わが友よ、爾曹のうち一人われを彼等に賣らんとしをれりといふとで、主は又悲哀の感情をお顔に彰はされて『これは我と偕に食する者われに背きて踵を擧げし』と録されし聖書の語に應はせんためなり』と仰せられました。弟子たち大に悲しみ、互に面を觀あはせ、各々主に言ひ出でまして、『主よ、我なるか。』『主よ、われなるか』と申しました。主は之に答へて『われと共に手を盃に着る者是れなり。人の子は己に就て録されたる如く逝ん、然れど人の子を賣す者は禍なるかな、その人は生れざりしならば幸なりしならん』と仰せられました。ユダも亦細く弱い聲で『主よわれなるか』とお聞き申しました。ヨハネは主に隣りて坐してをりましたから、主の耳に近く小聲で『主よ、誰なるか』とおたづねいたしま

した。この時主は醋に苦菜の葉を漬して之をユダに與へ、『なんぢが爲さんとすると速かに爲せ』と申されました。しかし主の此お言葉は餘り自然で、溫和でありましたから誰もこのお言葉の譯を解したものはございませんでした。或弟子などはユダは會計方でありますから何か必要な用事があつて、それで會計方を使に出されたのだらうと考へた位でございました。ユダにはよく曉つてをりました。ユダは主のおん前から、また此二三年のあひだ久しくも又親しくも交際つた友達の前から立ち去りました。その背を彼等すべてに向け、夜のくらさが中に身を没して祭司の所へと急ぎました。

それから晚餐の順序として第二の盃を祝し、その次には例として埃及より逃れ出でし時の物語を爲し、詩篇の第一百十三より第一百五までのうち何れかを歌ひます。主はその盃を祝し、感謝を爲し、彼等に此盃を取りて各自一口づゝ、頌け飲むやうに命せられてのち仰せらるゝには『われ爾曹に告げん、今よりのち爾曹と偕に新しさものを吾父の國にて飲まん日までは、再びこの葡萄にて造れるものを飲まじ』と。弟子たちは

此お言辭を聞きまして、漸く主の終爲は近く逼りをり、今夕の食事は主と最後の晚餐であるといふとを曉解りかけました。

主は次に麴麩をお取りになり、謝して之を擘き、弟子たちにお願けになつて、『取りて食へ、これは爾曹のために與ふるわが身體なり、我を記えんために此を行せ』と仰せられました。次に又盃をお取りになりました。これで逾越の晚餐は畢るのであります。其時主はその盃を祝し、之を弟子たちに與へ、『これ新約の我血にして、罪を赦さんとして爾曹のため、又衆の人のために流す所のものなり。われを記えんために屢々これを行せ』と申されました。我主は御自分の如何してもお死亡なさらねばならぬことは弟子たちに已に話し置かれましたが、此の席にて始めて御自分は彼等のため、また世の衆の人のために死なれるのであるとを附け加へてお話しになりました。さうして永久も御自分を記えをるやうにと彼等におたのみになりました。お前方が予が世を去つたのち與に偕に食卓に着いた時には予が斯う行すやうに麴麩を擘き、葡萄酒を

注ぎ、予の身體が何如裂かれ、予の血が何如流されたか、予の事を憶ひ出だして考へてくれと、まあかういふ工合に申されたのでございます。

晚餐後我主は長い間丁寧懇切に彼等に訓諭を與へられました。今度御自分が死亡ならるゝのは彼等に取りて却て最もよいとである由を申され、此迄御自分が彼等に教へられた凡ての事を彼等が實行するを以て彼等の主を愛するといふ心を主に表示さねばならぬといふとをお話しになりました。

主は彼等がいたく憂愁に沈めるを御覽になり、『われ爾曹のいたく憂うるを見る、憂なんちらの心に盈てり。時まさに至らん、今至りぬ、爾曹散りて各人その屬する所に往き、たゞ我を一人のこさん。されどわれ爾曹に平安を與へん。なんちら心に喜ぶべし。我すでに世に勝てり』と彼等を慰め勵まし、さうして彼等と共に神に禱られました。それから彼等は他の詩——詩篇第百十五より第百十八までの詩——を詠ひて此家を出で橄欖山にまゐりました。

第五章 ゲツセマネの園にて

我主及び弟子たちが最終晚餐の席より外に出でました時は満月は天に麗り、街上はまことに静寂で、時折り逾越の食卓を圍める樂しげな人々の笑聲が聞ゆる位のものでありました。それゆゑに主の一行は途にて何等の障害にも逢はず、城門も無事に通過いたしました。塗はこの小山からして深き谷に向つてついで、そこにケデロントといふ小河に橋があり、橋を渡つてから橄欖山の坂路にかゝり、山の麓の小河を越えたと橄欖樹の繁茂せる一の小さな園があります、之をゲツセマネの園と申します。

往く途々彼等は前の話を續けてまゐりました。彼等がエルサレムの小山から下の谷に下る時死蔭の谷についての詩篇の言葉を憶ひ出したでせうか。その闇黒き谷へ彼等は今下りつゝあるのでございました。主が仰せられますには『わがしばし、爾曹に告げたりし時は今到れり。パリサイとサドカイの人々われを捕へ、われを嘲り、鞭ち、

且つ唾吐きて、われを殺さん。爾曹はわが友、わが愛する友にして、わが擇びてわれと偕に在らしめ、爾曹も亦他の人々われに背を向けし時獨りわれと偕なりしが、今夜は爾曹さへわれにつきて礙かん。そは「われ牧者を撃たん、其時綿羊散るべし」と録されたればなり」と。此お言葉を聞いてペテロは例の第一に叫びました、「假令みな礙くとも我は然らず。」主はペテロに「我まことに爾に告げん、今日この夜、鶏二次鳴くまへになんぢ三次われを知らずといはん」と仰せられますと、ペテロは前よりも力を込めて「主よ、われ獄にまでも、死にまでも爾と共に往かんと心を定めたり。われは爾と偕に死ぬるとも爾を知らずと曰はじ」と申し、他の十人の弟子たちも皆同様に主を離れまじきよしを申し上げました。

かくてゲツセマノの園に参りました。我主は弟子たちを入口の處に待せおかれ、「爾曹こゝに坐れ、われかしこに往きて祈らん」とて弟子たちのうちペテロ、ヤコブ及びヨハネの三人を携へて、橄欖の樹蔭深き處に往かれました。残留れる弟子たちは皎々

たる明月の下に草を袂に腰をすゑて、或は考へ、或は眠り、或は師なるイエスの往かれたあたりに非常の苦楚に在る人が神に祈るしほるが如き聲が細く、低く、それも斷續して近く流るゝ小川の潺々たるに奪はれ、樹梢に通ふ夜風の颯々たるに消えて聞えずなるに耳傾けてをる者もありました。

園の内深く入り給ひました主イエスは心に非常なる憂苦を感じられるやうになりました。主は刻々に逼り來れる御自分の死は避くべからざる者であるといふとを層一層お考へになると、其死なるものがつらひといふとを層一層お感じになりました。併し主は決して死を畏れてはをられませんでした。此時でさへも彼等の毒手を避けて遁げやうと思召されるれば容易にそれは出來たのでございました。主がこの園の入口より外に出で、橄欖山を越え、ベタニヤを過ぎ、人知らぬ田舎へ往かれましたならば誰も主に害を加へやうとするものはございせん。主にして若し單に平和に、靜閑に世を送られたらば、バリサイやサドカイの者が一人でも主に手を觸れやうとはいいたしません。

彼等の希望する所は主の沈黙に在るのでございました。若し主が再び大工の仕事場に、戻られやうと思召されたらば、主は無事に此世に生き長らへられたのであります。併しこれは主に取りて絶對に出来ませぬ事でございました。主は神の眞理を世人に教へ給はんために、神の名を以て、將た神の子としてこの世に出でられたのであります。これ實に主の生命でございます、一日の生命があれば一日の天職を果たさなければならぬのであります。

斯の如き天職を以て、斯の如き使命を以て此世に來りたまひし主が擯斥せられ、拒絶せらるゝといふと、溢るゝばかりの愛を心に湛へをらるゝ主が却て人から憎まるゝといふと、世人の爲めにとて來られしに其世人が主を殺さんとするに至るといふと、もは實に主を喫驚かしたものでございました。實に悲しむべく、怖るべき喫驚でありました。主は三人の弟子に『我が心いたく憂へて死ぬるばかりなり。こゝに待ちて我と偕に目を醒しをれ』と仰せて、たゞ一人少し進み往れて地にひれふし、若し出來得

るとであるならばこの悲しき怖ろしき時を我より過ぎ去らせたまへと祈られました。此の怖ろしき事は是非無くてはならぬものでせうか。此の苦楚は主の身に臨まねばならぬものでありませうか。死ぬのは何でもありません。が斯して死ぬのは言語に絶し、思慮に絶したる怖ろしきとであり、むごいとであります。パリサイ、サドカイの如き物の理の分つた者が主を殺さんとし、教會の立派な教師が教會の會員の是認を得て主を殺さんとする間違つた事は主に斷腸の思をさせたのでございます。若し愚夫愚婦が主を悪んだのならば主は之に勘忍へるとはお出来になりませんでした。然るに世の人の視て善人とする所の者が主を悪み、教會に出入する所の人々の祈禱の結果が主を殺さんと計畫むに至つた此の一事は主を喫驚かし、主を地に投げ倒させたのでございます。我主は地にひれふし、祈り宣ひました、『吾父よ若しかなはゞ此杯を我より取り給へ。我をわが愛する人々の手にかゝりて死なしめ給ふなかれ。されど我心のまゝを成さんとするに非ず、聖旨に任せ給へ』と。

祈禱り畢りて主は樹下蔭の暗き處より三人の弟子の居る場所へ出で來られました。三人は皆眠てをりましたので、主は先の程立派な約束をいたしましたペテロをゆり揺し、「如此一時も我と偕に目を醒しをること能はざるか」と譲められましたが、彼等がいたく疲憊れをりましたのを御覽になつて、「その靈には願ふなれど肉體よわきなりと申されて、再び以前の暗き處に往かれ、苦悶ます〜甚しければ一層熱心に、『あゝ吾父よ、若しわれに此杯を飲まさで離すと能はずば聖旨に任せたまへ』とお祈りなされました。その汗は血の大粒の滴りの如く地に落ちました。やがて起ち上り、弟子の處に來て御覽になると、彼等は以前の如くに寢てをりました。これは一は身體の疲憊と一は憂慮のためであつたのでございました。三たび主は暗き樹蔭に參られて同じ言葉をもて熱烈に祈られてから、弟子たちの處に同情の念をもつてお出でになりましたところ、彼等三人はまた言甲斐なくも眠りこけてをりました。主の足音を聞きつけて目をさました。いかに恥かしげに且つ悲しく見えましたので、主

は之に『今は寢て休め』と仰せられました。

然るに此時エルサレムから此園の方へ通じてをる道路に當つて急ぎ足に此方をさして參る多人數の足音人聲が聞え、ケデロン河に架てある橋の側なる小さき林の間に松明の光りの隠見するのが見えました。此は抑も何の故であるかといふとは我主は夙に能く御存じでありました。是に於て主は三人を起し、他の弟子たちを呼びよせられて、時至れり。見よ、人の子は罪人の手に賣さるゝなり。起きよ、我儕往くべし、我を賣す者近づけり』と仰せられました。

ユダは嚮に晚餐の席より退き、主の在所を密告せんものと、其筋の人々を捜しに出でゆきました。祭司其他に捜し逢ひたる時、『豫言者は唯今斯様斯様の家の樓房にたゞ少數の弟子と晚餐を俱にしてをります。疾く建捕の人々をお遣はしなされ、彼の未だ他へ去らざるさきに彼をお捕へ召され』と申したのでありませう。ユダが果して斯く言ひて、祭司等が之に従つたとすれば、それは少し手遅くれで、樓房は已に主及び

人々の立ち去つたあとでありました。併し何處へ往いたか、それはユダにはよく知れてをります、『それではゲツセマネの園へ参りませう、豫言者は必ず其處にをりませう』と申したでせう。この静寂なるゲツセマネの園は弟子たちの善く知つてをる處でありました。彼等は屢々こゝへ参つたのでありまして、ユダの如きは薄き月明りの下でさへも園内の通路は隅から隅まで歩いて迷ふやうなともなく、樹木も一本一本に熟知してをりました。此處にて午天の暑い時も、また晡時爽涼い時も常に師なる主イエスの側近く座を占めて、主の教話を聴聞したのでありました。さればユダは必然此處だと目星をつけて、祭司の長の家から奴僕の一隊を自ら案内いたし、各自提灯や松明を振り照らし、刃物を携へて急ぎまゐつたのでありました。ユダは人々に合圖の號をとて、『我が接吻するものは其なり。之を捕へて、慎と曳き去れよ』と申し置き、園内に來りて我主を見るや一直線に主の所へ走り寄り、まだ十二弟子の一人であるかのやうに『ラビ、ラビ』(師よ、師よ)と申して接吻をいたしました。

それと見て人々馳せ寄り、我主を捕へました。例の氣早で短氣なペテロは之を見るや、たま／＼携へ持てる劍を抜いて、近くに居ました祭司の長の僕を撃ちて、その耳を削ぎおとしました。我主は之を御覽になり、ペテロに劍を鞘に收めるやうお命じになりました。且つ『爾曹は我れ今十二軍餘の天使を吾父に請うて受くると能はずと思ふや。もし然せば如此あるべきとを記し、聖書に如何で應はんや』と仰せられましたので、ペテロは劍を収ひました。又ペテロの外にも一人劍を有つてをる者がありました。此お言葉を聞いてこれも劍を抜きませんでした。已に抵抗も防禦もせぬとなりますと急に怖氣がついて十一人の使徒は言甲斐なくもペテロを始めにヤコブ、ヨハネ、トマス其他の人々は其師を棄て、園の樹蔭の闇黒へ我れささにと右往左往に遁げ散つてしまひました。

祭司の長の奴僕等が主イエスを引立て、園の入口を出ました時一人不思議な扮装を爲た者が現はれ出ました。月明りに之を視ますと一箇の青年で、今しがた寢床から出

て来たといふ有様で、麻の白き夜具を身に纏うてをりました。逮捕の者等のうち此異形の青年を見付けた者が之を執へんと追ひかけ、麻の夜具に手をかけましたが彼は夜具を振りすて、裸體のまゝで闇黒處へ逃げ去り、その姿をかくしました。この青年の一條はたゞ馬可の福音書にのみ書いてありますので、この青年は乃ち馬可その人に外ならずと考へた學者が多くございます。それは左様かも知れませぬ。抑も馬可といふ人は當時エルサレムに住んでゐました青年で、この時より數ヶ月のちに馬可の母の家は主の弟子たちの集會所でありました。かういふ事實から推して考へて見ますと我主が最後の晩餐を爲された樓房といふは即ちこの馬可の家のもので、當時青年なりし馬可は已に寢床に就きました。イスカリオテのユダと祭司の長からの逮捕の者等が襲ひ來ましたので、急ぎゲツセマネに往き、此よし主に御しらせ申さうと衣服を着る隙もなく、夜具の白いシートを身に巻きつけて園に參り、弟子たちの眠りかけてをりますその間に、主が何如様なる態度と言辭とを以て神にお祈りなされましたか、

又主のおん額に血の如く見ゆる汗の大つぶが點々たるを見たり聞いたりいたしたのであらうと思はれるのでございます。

第六章 カヤパの前に立ち給ふキリスト

時は已に夜半を過ぎてをりました。月は道塗を照して明るくありました。逮捕の者共は嚴重に主イエスを中に圍んで、ケデロンの橋を渡りましたが、橋の下にはこの小さき河が月の光を受けてさながら銀の流の如くに潺々と音を立て、流れてをり、前方を看れば小丘の頂上にエルサレムの城壁と開いてある城門とがあります。彼等が城門に入りました時には市中の人々は皆睡てをつたと見えまして、街上には人の影一つだに無く、家々の牕は燈火消えていづれも暗うございましたが、たゞ番兵のみが城壁に沿うて往つたり來たりするばかりでした。しかしこの寂莫を破つて一二人の馳け走る足音が聞え出しました。やがて祭司の長の邸宅は煌々と明るくなりまして、玄關口

から僕どもが足を空に彼の町此の町へと手分けをして走りゆき、大きな家々の戸を事有りげに打ち敲きました。その家の人が戸を開いて顔を出し、『何事が起つたのじや』と問ひますと、『例の奴がいよく捕りました。只今すぐに集議所の會議が開かれまして、奴の吟味が始りますから御出席を願ひます』といひ置いて又他を起しに飛んでゆきました。

猶太の人民には二人の統治者がありました。一人はピラトと申して羅馬政府から派遣せられた方伯で、國家の統治者であり、又一人はキャバといふ祭司の長で、教會の首長でございます。然るに祭司の長は集議所の常置委員の承認が無くては何事も執行する事が出来ません規定でしたから今夜已に更關けてはをりましたが此等の委員は睡眠より起されて召集されたのでありました。我主が逮捕の兵卒や奴僕共に取りまかれて歩いて參らるゝ其間にかの委員たちはいそぎ衣服を着けて集議所へと急ぎました。かくて主イエスはこの集議所へ引入られ給ひ、吟味が始りました。

祭司の長は主イエスに弟子と教のことを問ねました。主は之に答へて『われはあらはに世に語れり。われ常に猶太人の平生あつまる所なる會堂および殿にて教誨をなし、隠に語る事なし。何ぞ我に問ぬるや。われ如何にかたりしか、聽ける者に問ねよ。彼等わが言ひし所を知れり』と宣ひました。その時旁に立てる一人の下吏が掌にて主を打ちました。僕等は今回の事件は如何落着するかを能く存じてをりました。さうしてその主人の御意に入るやうにとの心から、かく我主を打ちて且つ申しました、『なんぢ畏れ多くも祭司の長殿へお答へ申すにかくも無禮の言辭を吐くか。我主は首を回らし、靜に仰せらるゝやう、『若しわが語りしこと善らざればその善らざるを證せよ。若し善くば何ぞわれを打つや』と。正邪曲直は今や議論にはなりません。祭司の長はこの野鄙無作法の僕を叱責めもいたしませんでした。

祭司、民の長老、集議所の議員等は皆主を死刑に處せんものと妄の證を求めました。彼等は主を殺さんと心を決めてはをりますが、同じく殺すにも合法的にしたいと

欲つてをりました。彼等は多くの人民が我主を豫言者なりと信じてをるとを知つてをりますから、迂濶に殺したならば後のたゞりが如何であらうと恐れてをりました。それで法律上當然に死刑に處するといふとにせんと心を碎き、それには少くとも二件の證據がなくてはなりません。若し眞實の證據がないとすれば虚妄の證據でも差支ないのであります。

そこで祭司の長の僕等は命を受けて證人を捜がしに再び夜の眞中に四方へ飛んでゆきました。嚮に我主は殿堂にて教誨を爲された時誰も全く了解の出来なかつたをお話しなされた事がありました。そのお話の言辭が神秘的であつたのですか、或は何か混雑か雑沓でもあつて彼等が明白と聞くとの出来なかつたのでありませうか、それは吾人には分りません。兎に角主の此お話は殿堂の有力者へいろくまちくくに報告されましたが、それが今主を陥る材料のみに使はるゝに至りました。そこで多くの妄りの證人が來ましたが、そのいふとが互に齟齬して合ひませんでした。のち又二人

の妄りの證人が參りまして申しました、「此奴が曩に申したことがございます、われ能く神の殿を毀ちて、三日のうちに之を建て得べし」と。しかし此二人は主がさきに仰せられた言を其通り誤りなく記憶てをりませんでしたから、段々問ひ詰めると二人のいふとは全然一致しなくなりました。實は使徒等でさへその當時は主の此のお言葉を諒解出來ず、餘程後になりましたから、此の殿といふは主のお身體をさして申されたのであらうと衆議一決したやうなものであります。しかし其當時は何人もこの意義を存じませんでした。兎に角主は殿堂の破壊について何か仰せられただけでは明白でありました。それで彼等は主イエスは殿堂の聖所について大不敬な事を申されたと信じました。その聖所の奉事はサドカイ派の人々の承はる所でありますから、主がこのお言葉は取りも直さずサドカイの人々に對して無禮を働いたといふとになりますから、祭司の長や議員たちはいろく評議し、重罪の議決を爲さんものつとめました。

しかるに、妄證は互に一致いたしませんから、合法的に主を訴へるには他の證據が
 擧げられねばなりませんでした。是に於て祭司の長はその職服を着けて儼然と中央に
 起立し、我主に向き直りまして、『なんぢこたふる言なきか、この人々の爾に立つる證
 據は如何に』と申しました、が主は默然として一言もお答へになりませんでした。そ
 こで祭司の長は又『爾はキリスト、神の子なるか、われ爾を活ける神に誓はせて之を
 告げしめん』と申しました。嗚呼我主イエス、キリストが今迄永き間待ちに待たれた
 その時が參つたのでございます。嘗てペテロが主に對へて『爾はキリスト、活神の子
 なり』と申した時主はペテロに『我をキリストと人に告ぐる勿れ』と口止をなされま
 した。又嘗て主が變貌のその翌朝山を下る時主は三人の弟子に『爾曹の見し事を人に
 告ぐべからず』と戒められました。然るに今や主みづからこの大事實を宣言せらるべ
 きその時が到來いたしました。此時我主はこの集議所に聚れる人民のうちの首たる面
 々を儼乎と見廻はされて、『然り、我はキリスト、神の子なり。且つわれ爾曹に告げん、

この、ちわれ大權の右に坐し、天の雲に乗りて來るを爾曹みるべし』と仰せられまし
 た。

このおん言葉を聞くや祭司の長は非常に憤激して、その着してをりました職服の一
 端を握むや否やピリ／＼と上より下まで裂き破りまして、高聲に『此人は褻瀆すを
 言へり。自ら豫言者の約束したりしメシア、榮光の主、神の子なりと言ふ。われら何
 ぞ外に證據を求めんや。爾曹も今その褻瀆したるを聞く。爾曹如何にももふや』と
 いひのゝしりました。我主の殿につきての神祕的のお言葉は已にサドカイの人々をし
 て主を重罪に構陷せしむべく決心させました。さうして今この宣言はパリサイの人々
 を決心いたさせました。彼等が初めからこのナザレ生れの大王は彼等の大切としてを
 る習慣俗例を遵守せざるのみならず、却て之を擯斥して來た、彼は必ず自らキリスト
 を以て任じをれるならんと疑ひ來りましたが、果してその通りでありました。彼等は
 一人残らず悉く主に反對でありました。吟味は吟味でありませんでした。彼等は今

夜家を出る時から既にその心は決つてをりました。祭司の長の「爾曹は如何におもふや」の相談に異口同音に「彼は死に當せり」と答へました。

事は決りました。天より降り來られました人、その人のうちに神僭に在し、神の中に僭に在すその人、萬民の父たる神が「これわが愛子なり」と宣ひました人、榮光の主は今死刑に處せられたまはんとしてをります。彼は彼の何人であるかを人々に告げんと、われは爾曹の王なり、主なりと申せば人々は罵り叫びて、然らずといひ、祭司の長は彼を拒絶して受けません。從て多くの祭司、會堂の説教者、教會の全會友悉く皆かれを横斥いたしました。神の教會は神の子を殺さんと議決いたしました。かやうな間違つたとが他に復とありませうか。

しかし教會は如何なる人なりとも之を死刑に處する權は有つてをりませんでした。これは國家に屬するものでありました。祭司の長カヤバは主イエスを偽キリストとし、死刑を宣告致したれど、刑の執行權は方伯ピラトの握る所でありましたから、イエス

をピラトの手に解さなければなりません。此時月は既に落ちてはゐましたが、まだ太陽は昇りませんので、ピラトの公廳へ往くにはあまり早過ぎたので、夜の全く明け離るゝまで人々は主イエスをカヤバの僕等の手に預けて學者、長老たちの議員は皆一先自宅に歸りました。我主は兩手を縛られたるまゝ僕等のうちに立つてをられました。無知無學の僕等のとでありますゆゑ主イエスを彼等の主人たる祭司の長が死刑と宣告した所の重罪人とのみ思ひましたから、様々のを申したり、行たりして主を嘲弄いたしました。彼等は先づ主の左の片頬を打ちました。それから又左の頬を打ち、おん顔を唾を吐きかけました。又主のおん目を布で蔽して、その周圍を踊り歩きながら一人一人主を撲ち、一つ撲つては「豫言者よ、爾を撲つ者は誰なるか豫言せよ」と嘲り笑ひました。

嚮にゲッセマネの園にて主を棄て、遁げました弟子たちのうちペテロとヨハネの二人は後から誰も逐うて來る者の無いのを見まして、又あとへ引き返し、壁や家の影の

闇黒き所に身を匿しつゝ、漸くに祭司の長の邸に達し、遂に思ひ切つて内に入りました。最初に入つたのはヨハ子で、内の様子を視るに誰も自分に注意するものがないので、安心して外に出で、ペテロを伴れて再びなかに入りました。カヤバの邸宅は中廷の周圍に建てられ、其の幾個大小の部屋は此の中廷へ向いて入口をつけてありました。二人のこゝへ忍び入りました時には遅参の議員だの、急使の僕どもが出たり入つたりで、此中廷は却々に雜鬧してをりました。廣間の會議所には燈火が煌々とかゞやいてをつて、その光線は此中廷をまで照らしてをりましたが、カヤバの前に主キリストが端然として立つてをられますのが二人によく見えました。春とはいへどまだ淺く、しかも夜明けまへのとなれば寒氣は中々身に沁みますので、僕等は疊石の中廷に炭火を熾んにおこして、それを取巻いて、暖まつてをりました。ペテロは深い思慮もなく彼等のなかに交りて、手をさしのべ、暖つてをりましたが、例の饒舌家であるのに殊に今はその感情が甚く高まつてゐますので、沈黙つて見たり聞いたりしてをるとは出来なかつ

たと見えます。それに彼の態容が一見して田舎漢たるをを表はしてをる、そこへガラヤの漁夫の使用う粗朴の言語で話してゐますので、ペテロが一たび口を開くや、その話しかけられた人は直にこれはガラヤから來た者だと知つてしまひました。

最初にペテロに口を開いた者は入口にをつた婢でありました。ペテロが中廷に入る時『お前さんも此人の弟子でせう』と申しました。睡眠不足で既に身は疲れ、神經は過敏に且つ恐怖に充ちてをる矢ささへかく問れたので、喫驚いたし、思はず『いゝえ、左様ではない』と言つてしまひました。ヨハ子と彼とは事の終局——彼等のあらゆる希望の終局——を見んと此處にまゐりました。此處には復た一人の弟子もありませんでした。かの美はしかりし兄弟の親密も師弟の關係も已に破壊れてしまつてをりました。師たるイエスは生死いづれか吟味の最中でありまするのに、今迄彼に隨從してをつた弟子等はその運命を共にしやうとも、先途を見届けやうともしてをりませんでした。ペテロは熱湯を飲むやうな思ひで彼の弟子ではないと申しました。噫嘻かれは實

にイエスの弟子でありました、が今は弟子ではなくなりました。

ペテロはそれから内に入り、火の旁に立ちながら師の身が如何になりゆくとならんと注意して見聞きいたしてをりました、其様子が如何にも哀れに沈んで見えますので、他の婢が不思議相に彼を見守つてゐましたが遂にペテロに向つて『お前さんも亦ナザレのイエスと一所にゐましたね』と申しました。ペテロは今度も之を肯ひませんで人々の前にて『お前さんは何を申されるのです、私には一向了解りません』と答へました。少馬ありてペテロは門口へ出でゆきました、こゝはこの中庭から街上へ出る所であります。彼がこの門口に立つて居りますうちに東の空が少し明るみだして、一番鶏が隣りの鶏舎で鳴き出しました。

庭門に居りました婢がペテロを見て、火に煖つてゐます人々を呼びて、『この人を御覧なさい、此人もあの連中の一人でせう』と申しますと、人々はペテロをつくづくと視て、『大きに左様だ。此奴はガリラヤの男だ。その言葉の國なまりが何よりの證據だ』

と言ひ罵りましたが、そのうちの一人で、ペテロがゲツセマ子で耳を削り落した男の親族の者がをりまして、躍り上つて『左様だ、左様だ、此奴が偽キリストと偕に園に居たのを己は確平と見た』と叫びました。ペテロは今更白状も出来ず、騎虎の勢で、自分がイエスの弟子で無いといふとを證する爲めに神を引合にまで出して、『お前方の言はしやる此仁を私は識りません』と言ひ放ちましたその時鶏は二たび鳴きました。

此時我主は集議所から伴れ出され、此方をさしておいでになるところでありました。さうして今ペテロが主を識らずと言ひ張つてをりますのをお聞きになりました、儼平とペテロを御覽になりました。ペテロは主の御顔を見ると同時に主が『鶏二次なく前に爾は三次われを識らずと曰はん』と仰せられたお言葉を憶ひ出して、大に驚き呆れ、外面へ出でゆき、大聲立て、哭き悲しみました。

第七章 ピラトの前に立ち給ふキリスト

夜は明けはなれました。今日は吾人が善き金曜日と稱する日でございます。その朝早く集議所の役人どもは主イエスに縛かけ、これを方伯ピラトに付さんとして集議所を立ち出でました。

彼等は既に殿堂の祈禱を済して戻つて参つたのでございます。彼等は神の前に跪き、彼等に祝福を垂れたまふやう願ひました。彼等はカヤバの廷の吟味とピラトの吟味との間の時を殿堂の静肅なる奉事に用ゐました。彼等が殿堂の聖案の前にて心を籠めて祈つてをりました時は、乃ち我主が祭司の中廷にて嘲けられ、唾吐きかけられておいでになつたのでございました。彼等は元來悪人といふではありません。彼等は主イエスをかく訴へますのを當然の事を爲てをるのだと堅く信じてをりました。彼等は宗敎裁判の審判官が異端を唱へ、人を惑はしたと判決したその人を火刑柱に縛つて焚殺すを平氣で見てをると同じく、少しも良心に耻づる所なく神の前に祈禱を捧げ得るのでございます。彼等が主イエスを殺さんといふまくのは彼等の心が罪惡に充ち満ちて

をるといふ理由では無くして、深く僻見に囚はれ、先入主と爲つてをつたからであります。彼等は教會の舊章に率由してをるから善良なる教會員なりと信じてをります。されば教會の舊章に率由せず、慣例を破棄したナザレのイエスは決して善良なる教會員に非らずと信じました。これが主イエス捕縛の唯一の理由で、主を惡み、主を殺さんとするも實にたゞ此一事に存するのであります。彼等は良心より神の子は神の教會を損害する者だと信じ恐れたのでございました。

然るに此の早天の奉事の最中に不愉快なる意外にも意外の珍事が出来いたしました。彼等が熱心に祈に禱つてをりましたその處へ一人の男が手には銀貨を溢るゝばかりに握りながら怖ろしくも又激し切つた聲を以て叫びながら闖入いたしました。「無辜の血を付し、我は罪を犯したり」と叫ぶその人をよく見れば内通のユダでありました。ユダは昨夜一睡もせず、良心の叫責に堪へず、苦い苦い悔恨の情に驅られて此處へ飛び込んでまゐつたのでございました。彼は彼の名をして未來永劫擯斥され、嫌惡され